鳥影社版 星雲社発売 ISBN4-7952-5125-8 C0093 ¥1200E

蘭花物語

頼山陽と妻梨影

布施雅男

鳥影社

布施雅男（ふせまさお）
1927年生。旧制高知高校文甲ヲ経テ阪大国文卒。
戦後、新興芸術文学会委員、「群星」「彩光」「中央文学」同人。
現、「骨壺」「滋賀作家」同人。
『花骨壺・落城霊秘』・『歴史小説への招待七話』（全国学校図書館協議会選定図書）

川西市大和東1—92—8　〒666—01

蘭花物語　頼山陽と妻梨影

定価1200円

著　者　布施雅男
発　行　昭和61年10月1日
発行者　百瀬精一
発行所　鳥影社
〒143　東京都大田区大森中3—11—12
電話　03(763)3570
〒392　長野県諏訪市大手2—2—16(編集室)
電話　0266(53)2903　Fax(58)6771
印刷製本　精文堂書籍(株)・書籍用中性紙使用
発売元　星雲社
〒112　文京区小石川5—19—25
電話　03(947)1021
©Masao Fuse 1986 Printed ih Japan
ISBN4—7952—5125—8　C0093　¥1200E

乱丁・落丁はおとりかえします

目次

その一　女の里……5
その二　男の里……26
その三　めぐりあい……47
その四　女ごころ……69
その五　男ごころ……91
その六　京のひと日……114
その七　水仙……137
その八　時の流れ……161

装幀　野村美枝子

蘭花物語

頼山陽と妻梨影

その一　女の里

「女というものはな、優しさがいのちや。やさしさを失うたら女ではない。道ばたの石ころとおんなじや、血も情も通うとらんのや」

母の口癖を耳にするたびに梨枝はいつものことながら思わず苦笑してしまう。

〈ああまた始った、今日はなんの話をするつもりかしら……〉

お曲突さん（かまど）に薪をくべながら、庭の落ち葉を熊手でかきあつめながら、大きなたばこの葉を揃えながら、なにをしていようと気紛れで母は口癖となった決まり文句を呟いている。せわしげに働くうつぶせ加減の母の背越しにひとり舞台の語り節が揺らいでいる。

思うてみれば随分とながい間、母の語り節を聞かされている。幼いころは子守唄、漸くちかごろになってみて母の語り節が理解できるようになってきた。人は誰でも昔話は好きである。講釈が聞きたければ木戸銭を払えばいい。ところが母の語りは木戸銭不要の天の邪鬼、気分しだいのひとりごとである。興に乗ったところで容赦もなく話は跡切れて無言劇である。ああ、もどかしいと梨枝はいつも思う。そんなことは意にも介しないで母の次の語りは別のはなしである。

〈ああまた……〉その癖、梨枝の心は妙に和むのである。

ちかごろは、どうも話が難しくなってきたように思う。それというのも土地にまつわる歴史というものを語りはじめたからで、複雑な人間の繋がりに梨枝の頭のなかは困惑してしまう。それでも

朦げに浮かびあがる歴史のたたずまいに心は惹きつけられてゆく。いままで気もつかなかった歴史の跫音が不思議なことに身近かに聞えてくるように思える。それにしても全く思いもつかぬ別の世界があったものだと感心するのである。四季の移ろいの静謐な里であってみれば歴史とはなんと痛々しいものなのであろうかと梨枝のこころは疼く。なんのことはなく今日ひと日も暮れた、そんな日々の営みのなかで母の語りは梨枝の目を醒ましてくれる。それにしても母はいったいどうして斯うした話を知っているのだろうかと不思議でさえある。

朝な夕な綿向山を見あげるにつけても幼いころの母の語りがふくよかに甦ってくるのである。小手毬ついたり、おこんめしたりしながら、いつも山の由来を思いうかべていたものであった。

「ずいぶん昔のこと、夏やいうに山が真白に雪で埋れてしもうたとやら、村の衆が山へ登ってゆくと猪の足あと、それをどんどこさと踏んでゆくと一挙に山のてっぺんに着いた由、と思うや、尊い神さまの後光がサッーと射し、五色の雲の上には神さまの御姿、その前に猪。――天子さま、そう欽明天子さまに此の事を申し上げなさったところ、勅使が見えてな、綿を積み重ねて見ているようじゃと仰言った故、綿向山と名付けられた、そして山のてっぺんに天照大神さまのお子さまを、ちゃんとお祀りなされた、よう覚えておくんやで――」

遥かに遠い日々への回想は涙ぐむようなこころの憩いでもある。走馬燈はゆくりかにめぐる、その明滅は梨枝にとってのささやかな歴史のあゆみである。生きている、生かされている、そんな実感を肺腑にしみて覚えるのである。言葉とはならない喜びをじっくりと嚙みしめる。ゆたかではなくとも生きてある幸せを覚える梨枝である。

家の前の聖財寺境内にある百日紅にうす紫に花が咲いた。すべすべと滑る木の幹に幾たび攀じのぼったことであろう。なにもなにもが梨枝のこころに綻んでいる。この寺を草創した僧善慶は室町

幕府に仕えていた武士であったが、二君にまみえずで主君の死を契機として仏に仕えたという。

「前のお寺にはな、ありがたい阿弥陀如来さまの画像があるのやで。むかし石山本願寺に馳せ参じなされたことがあってな、その御褒美に貰われたものや、顕如という偉いお上人さまからな」

母から斯の話を聞かされたとき、お坊さまが戦さをされるということが腑に落ちなかったことを思いだすのである。さきごろ寺を継いだ曇鳳のところには常時学僧たちの姿が見え講筵が敷かれている。香華のくゆりのなかで読経の声が静もって揺らいでいる。寺とは然うしたものだと思っているだけに、いまの梨枝は殊更に歴史というものの流れを感じるのである。いまの世が、この里が長閑であればあるほど歳月の重い跫音を耳にしてしまう。ときには怖ろしく、ある折は哀しげに心の底に斬り苛んでくるのである。いつまでも静かであってほしい、この今は永劫のいまであってほしいと梨枝は思う。娘ごころの感傷などではなく母語りに摑んだ人の世の実感なのである。

「おぬいさんは、なんでもよう知っていはる、お寺へもしょっちゅう顔出してはるさかいな」

これが梨枝の母ぬいへの里の人の評である。実によくこまめに働く母は暇をみては境内の清掃もし、幾多出入りする学僧たちの身世話などもしていたようである。

まぢかには仁正寺陣屋がある。元和六年、越後三條城から市橋長政が家臣四百四人を引きつれ此の地に陣屋を構えたのである。元来、武家社会は冷酷な掟に縛られたものである。三條城主市橋長勝には嫡子がいなかった。かくて所領没収、家名断絶と悲運に泣くところであったが、その甥である長政に家督が許され近江・河内に二万石を与えられたのである。四万石から二万石へと減封である。当然のこと主従の別涙を流さねばならない。三條城をあとに浪浪の境へとさまよいの旅にでる家臣たちの後姿を見送って長政は此の地へ来た。重く淋しらのこころで長政は仁正寺藩主となったのである。この心の翳りが目には見えずに尾をひくとは思いもしなかったにちがいない。一族であ

れ権力の座を狙う虎視の牙は機を待ち構え、その渦中にあるかぎり身の安泰は望むべくもない。いずこの大藩小藩それぞれに哀史を刻みこんでいる。

本丸、東西五十一間、南北五十間である。城下は三筋となって夫々の筋は重臣、中級武士、足軽の家宅を構えている。蒲生氏郷が会津の地へと移封となって荒涼となりはてた里にも、いまは活気が溢れている。三十七年という歳月の流れが、いまや昔日の賑わいを甦らせたのであった。

「これは内緒のことや、滅多なこと人に話してはいかんのやで。仁正寺藩二代目の殿さまには男の御子が六人、女の御子が二人おいでやったのや。御嫡子政房さまは大層かしこいお方で、それというのも母さまは徳川さまに仕えなされた板倉さまとやらいう偉いお方の御息女。ところがな、惜しいお方は早う此の世から消えなさる、母さまは二十二才でお亡くなりじゃった。殿さまは溝口出雲守さまの御息女をお迎えなされた。御子がお産れになる。政勝さまや。なんとしても政勝さまをお世継ぎにしたい、そのためには政房さまが邪魔になる。藩のお侍衆は二つに割れてな、争いごとが絶えなんだそうや。あわよくば若君政房さまの命をと狙う人たちがいる、お偉いところは気の休まるものではないのや。まわりは悉く敵と思わんといかん、いつなんどき命を奪われるかもわからん、権勢の座とはそうしたものなんやで。それにくらべると、この暮らしはなんと安らかじゃろう――」

「女というものはな、いったんお仕えしたからには心からお仕えせねばならんのやで。おまえかて、いずれは嫁にゆくことになろう、御奉公にあがるかも知れん。命がけでお仕えすることや、よいな。――そうやったな、このまえの話のつづきをせないかんわ。万津さまのことや、この方は若君政房さまの乳母でな、若君の母さまがお亡くなりなされる折、この乳母をお呼びになって、政房を守ってやってくれと頼まれたのじゃ。お殿さまの奥方さまの御言葉を乳母の万津さまは大切に胸

の底ふかく仕舞われた、それはもう傍で見てはおれぬほどに心労されたのじゃわ。政房さは立派な御気性だけに容赦なく思うたことを仰言る、世の中なり藩のことなり目がようおみえになるゆえ錐で突いたようなことを仰言る。万津さまは心配なされた、反対派の思う壺にはまりはせぬかと。お食膳にしてからが万津さまは毎度お毒見をなされたそうや。政房さまのため身も心も捧げつくしての御奉公なされたのやで。寛文六年というから今から百四十年ほど昔のことやな、万津さまが殿さまのお言いつけでお出掛けになられた、その隙を狙って毒饅頭を政房さまに——たぶらかされたお女中が政房さまにな。お痛わしいことやないか、苦しまれたのも束の間で死んでしまわれたのや。妾がいなかったばかりに、ああ……万津さまは若君の命なきいま生きてはおれぬ、奥方さまに申しひらきが立たぬと池に身を投じなされたのや。政房さまのあとを追われた、それがまことの女というもの。美しい、やすらかな死顔やったそうやで。女は美しう死んでいかんといかん、醜う息を引きとったらいかんのや。心さえ素直であれば美しう死ねる、よう覚えておくのや」

「人の世には見えぬ力が働いているのやな、あのことがあって以来、藩主さまをめぐって色々なことが起ったんや。三代目の殿さまになられる筈の、いんや、政房さまを斃された政勝さまは御乱心なさってじゃった、七人目の御子吉之助さまは僅か四才で死んでしまわれる、殿さまになられる筈のお方が座敷牢で死を迎えられる、他の方も早死なさる、なんという酷いことやろう。それだけではなかったのや、後継ぎは分家から迎えねばならん、御養子が利政さま。このお方も御乱心気味で、江戸城中では御失態なさるはで仁正寺で閉居させられなさる。そこでまた分家から御養子を——お侍衆も感づかれたとやら、怨みじゃ、祟りじゃ、奥方さまの、万津さまの、とな。いんや、それは違うとる、怨恨などでは無うて、もっと大きな力のせいや、人の世を動かす目に見えぬ糸のせいやで。お寺でよう聞かされる因果というものやないやろか」

「さきに話した利政さまも結局は毒殺されておしまいじゃった、毒を盛ったのは藩医の森島三折というお方とやら。いや、毒を盛らさせられなさったのや。嘸や、つらいお気持じゃったろう、こともあろうに医者の身で人のいのちを奪わねばならん、藩のお偉い衆の言いつけには逆らえんしな。三折さまはな、毎日、河原へ行っては石を拾うてきて石ひとつひとつにお経を書き写されたのや、なん年も何年も続けられ、石は幾つもの俵に一杯になったということやで。こころとは然うしたものなのやな……。納得できんことがある、毒殺されなされた利政さまは菩提寺にな、清源寺のことやが、そこには葬られなさらなんだということがな。なんで御先祖のお墓と一緒ではいかんのやろ、さっぱりわからんな――」

「ああ喋りすぎたわ、仕事せんといかん、仕事や仕事――」

母は黙って畑の土を鋤で掘る。梨枝はそのあとを鍬で均しにかかる。かすかに滲む汗はこころよいのに今の梨枝はなぜか重い気分に沈んでいる。政房の乳母であったという万津のことが頭から離れはしない。

〈美しい死に顔とはどんなものなのかしら……〉梨枝はただそれのみを考えつづけていた。

「手を休めたらあかん、早う均して種子を播かんといかんのや」

ハッと気付いて梨枝は鍬をふるう。

「今日のおまえ、どうかしとるな。しっかりせにゃいかんで」

「……」

「なにか気になることでもあるのかいな……さっきの話、つづきがあるのや、ちゃんとなったんやで。毒殺されなされた政房さまは神さまになられた。万津さまは政房さまのお墓の傍にちゃんと祀られなされたんや」

〈ああよかった――〉梨枝はこころから思った。

「妙な子や、おまえは――」母は梨枝の顔をみつめながら言う。

祟りとか怨みとか、そうした万津さまであってほしくはなかった。その万津さまは若君の傍で安らかに眠っておられる、ただそれだけで梨枝の気持ちは安らいできた。

溝口信濃守重雄の子兵部は養子となり信直のあとを嗣いで藩主となっている。市橋直方である。きわめて信仰あつき藩主であって、各地の寺を再興させている。この直方が遠祖である清和天皇の皇孫源経基を祀るべく神社をあらたに建て、政房を涼橋大明神として祀ったのであった。万津には誠忠院なる院号を諡した。とはいえ藩の、それも後嗣にからむ事件であったが故に、直方は事を秘し政房の名を伏せ、藩士以外の参詣を禁じたのであった。徳川家を慮らねばならぬ小藩主の苦衷であった。固く口を閉された秘事も、いつともなく人の耳に漏れ、口外してはならぬと言い聞かせては語り草となったのである。それあらぬか知る人は神社の前をよぎる折、直方のあたたかき心に感じたのである。

梨枝は母から随分と多くの昔日譚を聞かされた。ちかごろは耳にするもの悉くが心に疼きを覚えさせてくるのである。以前であれば特別の感懐も湧きはしなかった事柄が不思議と妙に心に突き刺さってくる。それだけ自分が成長したことになるのか、それとも世の中の動きとは娘ごころをも苦しめるほど苛酷なものであるのか、思わず梨枝はフウと大きく吐息をつく。吐く息は哀しいものであった。それは束の間に消えて再び梨枝は家事に手を染めるのであった。

不意に梨枝は吹き出した。たばこ屋という家業が可笑しくてたまらなくなったのである。考え出すとまた吹きだしてしまう。

〈なぜ、たばこを商うようになったのかしら……〉可笑しくてたまらぬのは年のせいでもないので

ある。たばこそのものが可笑しいのである。

〈長命草だと言って有り難がる人もいる、万病の薬として吸う人もいる。かと思うと毒があるとて怖れる人がいる、吸うているとコロリと頓死すると言う人もいる。そのような得体の知れぬ烟草を商うなんて……〉

〈笑うてばかりはおられん、人の身とて善もあれば悪もある、人さまざまやないか。それに、この商いがうちの家の生業――〉

もともと烟草を栽培しはじめた歴史は古い。いまから二百年ほど前である。慶長年間というから文化の今からすれば可成りの昔である。大豆、粟、稗、芋というものが主産物でしかない土地柄では烟草がきわめて恰好の稼ぎ種である。水利が無くても収穫がある。これ天の恵みとばかりに食いついたのであろう。周辺の地では烟草の繁みが目にはつく。梨枝は聞いたことがある、たばこを吸う奴は家財産取り上げじゃと幕府が御触れを出したことがあったのや、と。確かにその通りで慶長年間でも三度の禁止令が出ている。元和年間にも禁止令が出された。人間とは妙なもので法網をくぐって取り引きする、そこに無類の心地よさを満喫する代物であった。となると正しく鯔ごっこである。栽培まかりならぬ、たばこ吸うべからず、お触れ書きは素通りで元の黙阿彌である。烟草とは人を謀るたばかり草じゃ、異国の草に謀られて国を傾けてはならぬと憤る者も居る。このままにては烟草は日蔭草である。そこはそれ人間の知恵である、庄屋の肺煎りで何卒お見逃しをと願い出て落着という仕儀となる。藩主とて片意地ばかりでは下を治めること叶いはしない。烟草の栽培地に制限をつけた。という次第で、たばこ問屋の手に依って広く各地にたばこ嗜む連中の数は増したのである。みめ美しき遊女よりも、このたばこの方が迷いやすいと物語に記されている。とにもかくにも烟草は普及したのであった。たばこひとつにしてからが明と暗との歴史を繰りひろげてき

たのである。ましてや人の世の歴史は言わずもがな、理の当然なのである。
〈このたばこが、男と女を結びつける相思草とは……吸う人、吸わぬ人、それぞれに勝手なことばかり言ってからに……〉
〈わざわざ高価な道具を使うて――保知煙管も注文が多くて忙しいということ。このきせるが保知張太閤作り……〉保知にある煙管屋で受け取ってきた煙管一本を掌にして梨枝は凝と見とれている。粋狂な人もいるものだと感心もするのである。きせるを賞でるというよりも贅を競う風潮が出てきているのであった。
　ことしも石南花のうす紅が色どりはじめるようになった。綿向神社の祭礼を迎えると各所随所で婚礼が行われる。
「えらいことや、うちの子が捕えられてしもうたんや」
「おまえのとこもか、うちも同じや。年寄に頼んでなんとかして貰わんとな」
「おぬいさん、力貸してほしいのや、お寺のお住持さんに頼んでみてや」
「またかいな、仕様ないな」苦笑しながら梨枝の方を振り返り母はまた笑う。
「すまんな、頼んだで」
　村人の立ち去ったあと、母は目の前の寺に駆け込んでゆく。
〈いつも斯うなんや……〉喜んでいいのやら悲しんでいいのやら我ながら妙な気持になる。在所の子供たちにとっては婚礼は一つの楽しみである。梨枝自身、そうであった。見知らぬ人が嫁いでくる、見知った人が嫁いでゆく。子供ごころにも好奇の目が動く。そのうえ、この日はいろいろな振舞にあやかれる、滅多に口にしない餅菓子も貰える。婚礼のある家の前で子供たちは屯して待つのであった。それに並行して一つの習慣があったのである。石投げである。婚礼の行列が近づくと皆

が石を投げる。調子づき興に入るや家障子に石を叩きつけるという始末、婚家は迷惑千萬である。子供たちに交って若い衆が投石するとなると被害はただごとでは納りはしない。平素の鬱憤いまぞとばかりに石に叩きつけての狼籍である。

婚礼の砌、石を打ち狼籍いたし候う者、頭取は百日手錠、同類五十日手錠。

これは藩よりのお達しである。

〈なにごとも無う静かな毎日に飽きたりずに、みんな騒ぐのかもしれんなァ……〉

綿向神社の祭礼とて例外ではなかった。御旅所での喧嘩である。それも常日頃の張り合い意識が年に一度御旅所で炸裂する。村の面目と意地とを懸けて争うのである。肝心の神事は放擲されたまで睨み合う。挙句は庄屋、年寄の仲裁に持ちこまれる。藩の寺社奉行も手をやく始末であった。謂わば喧嘩もまた年中行事化していたのである。

梨枝にも見傚うて石を投げた思い出がある、楽しみに待ちわびた祭礼が中絶された折の悲しいおもいもある。祭礼のころになると梨枝のこころに深く刻みこまれた母の話が甦ってくるのである。

「人というものはな、嘘ついてはいかん、たばかってはいかんのや。よいな——」きまり文句を耳にしていたころの母の背の温もりが伝ってくる。いまの梨枝は母の語りを自分の口で語ってみるのである。

「山というものは大事なものや、粗略に扱えんもんや。山には柴山、草山があってな、勝手には入れんもんや。やぶ視山、あの鎌掛城山のあたりまでとな、綿向山をめぐって昔から揉め事が絶えん。山があって皆の暮しが成りたっている、柴草が刈れんようになってみい、たいへんなことや。東九ケ村と西の九ケ村とが揉めに揉めてしもうてな、綿向神社で決着をつけることとなったんやで。神さまに裁いていただこうというわけや、東の村からは音羽村の庄屋喜助というお人が、西の

村からは石原村の角兵衛という浪人が白装束で鉄の斧を炭火で焼く、真っ赤に焼けた斧を掌に握って神前の三宝棚へ投げ入れるんや。熱い鉄の斧を持てた者の方が正しいということに定められる。鉄の斧は真っ赤に焼けた、愈々じゃ、サァというとき、御役人が言われたそうや、東と西と斧を取りかえて渡せと。喜助という人は、ちゃんと鉄の斧を三宝棚へ投げ入れなさったんじゃ、三宝は白い煙をあげて棚板は焼けてしもうた。ところがな、浪人者は掌が焼けてしもうて鉄の斧を投げ棄てた、そのまま一目散に逃げだした、お投人が追っかけて引捕えなされたんや。この浪人者は引き廻しの末に西の仕置場で磔になった、なんでやと言うとな、斧が熱うならんように前もって自分のに仕掛けをしとったんや、初めから謀すつもりやったんやな。天罰覿面や。喜助というお人も偉いが、その母者が立派や、女の鑑や、今日もしも悴が鉄の斧を掌に持てぬようであったら其の場で手打ちにしようと覚悟して神社まで馳せつけられた、長刀をかかえてな。悴の不首尾は九ケ村の恥辱となる、そのような悴を生かしておくわけにはゆかぬ、申しひらきが立たぬとな。女というもの、この心がけでないといかんのやで」

この鉄火裁きは元和五年九月十八日に行なわれていた。そもそもの発端は浪人角兵衛であった。十余年間にわたる東西の村々の山入会権問題を一挙に解決するために言い出したことである。湯起請、火起請の由来を説き、長年浪浪の身を養うてくれた石原村への恩を返さんと案じたのである。裁きともなれば一方が重き処断をうくるは必定、そこで西明寺、金剛定寺、正明寺の僧は東西の村々へ和解を勧め鉄火裁きを思いとどまらせようとしたのであるが一蹴されたという経緯がある。当日、老中酒井雅楽頭、板倉伊賀守、本多上野守、安芸対馬守、土井大炊頭より検使役が派遣され、遠く離れた山里に幕府の存在を知らしめている。

それはともかく、心は正しく持たねばならぬと梨枝は母から教えこまれてきた。今にして思う

と、あの折母は……と母の教えんとした気持のようなものが幾らかわかってくるのである。楽しい話、悲しい話、怖ろしい語りの底流にある人のこころを母は摑まえさせようとしたにちがいなかった。その甲斐あってか梨枝は人の姿、人の心というものを考えるようになっている。

〈いったい、この私はどのような女になれるのかしら……〉

〈優しい女、美しい女、正しい女……ああ、いずれも駄目のよう……〉半ば諦め、それでいて嫁となり母となった折の姿を見はるかすのである。

「お父！」近在の子供が父親に取りすがって甘えている。

「こいつ、腕白小僧めが——」それでいて嬉しげな父親の顔であった。

そうした情景を目のあたりにすると梨枝はたまらぬ気持になってしまう。ああ、と思わず嘆息をもらしてしまうのである。涙ぐみ、父と子の姿を見つづけている。梨枝は父の顔を知らない。母の袖だけに包まれて大きうなった。梨枝のものごころつかぬうちに父は逝ってしまった。母の袖のぬくもりが折に触れては父への思慕を駆り立てもした。さびしい、淋しかった。氷のような冷たさが逆に梨枝に生きる力を与えもしてくれた。

〈ちゃんと一人前の女にならねば……〉唇を嚙み必死になって思う。

ひそかに慎ましく月日は流れる。

「なァ、やはりおまえは京へ戻った方がよいのや——」ポツリ母が呟いた。

「……」

「浮世には義理というものがあるのや、身勝手が許して貰えたとしても限りがあるのやで。いったん他家の娘となったからには、そこのところをよう分別せんといかん」

「それに、こんどの話はほんまによいお話や、ありがたいことやなァ……しっかり御奉公せんとい

かんで」

ふと母の表情に淋しげな翳りが宿ったのに梨枝は気づく。

〈ああ、もう形のうえでは此の家のものではない……〉いま置かれている自分自身の場を思うと梨枝は複雑な気持になってしまう。確かに自分は同じ里の他家へ養女として籍を委ねている。早くして父を失ったものの悲哀でもあろう。けれども、その縁あって今の話がもちかけられた。行儀作法を見習うには誂え向きの歴とした奉公先であった。

隣りの甲賀の人で京の二条に居を構える銅駝餘霞樓と称す人からの話であるらしい。言うまでもなく文人として才を認められる御仁である。ともかく奇行の多い此の文人中島棕隠は懐徳堂の中井竹山と親しく、竹山と交のあった小石家への奉公口であった。梨枝の養父である嘉兵衛は近江仁正寺の人であって、同郷とてか何かの縁で話が持ちこまれたものであるらしい。

「小石家というのはな、偉い蘭学の医者のお家やそうな。ありがたいことや」母は手放しで喜んでいる。

「なんでも先代はたいそう変ったお人やったそうな。偉いお人は皆そうなんや」

先代を小石元俊と言う。いま、梨枝の奉公先になろうとする元瑞の父である。元瑞の生れる前年、元俊は伏見で解剖を手がけている。貴重ともいうべき「平次郎臓図」を記しているが、橘南谿は元俊の解剖への姿勢を君子のごとしと評している。もともとこの元俊という名は神医とさえ称された淡輪元潜が自ら名付けたものである。京に蘭学医として君臨したこの元俊、実に多才である。老子・荘子も学ぶ、兵法の極意も授けられている、朱子学をも身につける、慈雲大和上のもとで参禅するといった具合であった。元俊の子元瑞に対する躾の厳しさは一筋縄ではゆかぬ苛酷とも言うべきものがあった。元俊には嘗って祖が酒井家家老であったという武士の血が流れていたのかも知

れない。いまは元瑞の代となり、これまた父の血をうけ継ぎ詩人墨客と交っている。
〈立派に奉公できるかしら……〉梨枝は不安であった。幼馴染の娘たちの幾人かは夫々に奉公に行っている。藪入りで戻った折の話を聞かされているが、どの商家でも厳しい毎日のようである。それはそれで構いはしないのだが、なにしろ小石家というのは京での蘭医の大家である。学問の家である。然様なところに無学なものが奉公にあがって……と梨枝は考えこんでしまうのである。掃除、炊事、小間使いであるとしても何かの折に恥かしさを味うことになるのではと心配である。この話があってからというもの梨枝の心は妙に重い。いつか奉公にゆくことになろうとは思ってはいたが、いざとなってみると二の足を踏むのである。
藤の花房が揺れている。ゆらめきを縫って姉が姿を見せた。
「達者そうやなァ」姉はどっしりと腰を下ろして家じゅうを見まわしている。
「やっぱり此処がいちばん良いなァ、妙にこころが落着いて……」
「なにを言うのや、女というものはな、嫁いだ先が一番の筈やいうに、この子ときたら——」母は透かさず口を尖らせ、それでいて笑みをうかべて言う。
「そうやったなァ……まだまだ修行が足らんのや、申しわけのないことで……」クスリと姉は笑ってみせる。
姉は寺に嫁いでいる。その気苦労のほどが屈託のない表情にも却って窺われるのである。
「若いうちに苦労せんといかんのやで。仏さまにお仕えできるお前は幸せや、きばって修行せんといかん」
「そうや、城山へ登ってみやせんか、なつかしいわ」姉は母の言葉を背で受けとめて、梨枝を誘った。

久方ぶりで姉妹は城山に登る。こんもりとした山は鬱として樹々が茂っている。
〈ああ、山の匂い……〉梨枝は大きく息を吸う。
「梨枝はいつでも大仰な……」両手をひろげて息づく梨枝を見て姉は笑いながら言った。
「忘れていた山の匂いなんやもの……」
ふたりは石垣の上に腰を下ろした。ながい沈黙の時間が音もなく遠い昔へと逆流してゆくのであった。ここ音羽城の重みが天涯からのしかかってくる。
「このお城はな、凄い戦のあったお城や。半年も戦がつづいて、お城の侍衆で、大刀を持てる人の数が十指にも充たなんだとか。食べるものもない、寒い冬でも夏衣ひとつ……それはもう酷い様子やったんや」
「……」
「さいごは降伏ということになってな、観音寺城の六角さまの手で話がつけられたのや。蒲生さまのお家もなんとか納った」
「なんのための戦やったの――」
「蒲生さまのお家争いや、家督の奪い合い。どこでもお殿さまの家では家督争いで揉めるのやなァ」
この音羽城が降伏の悲運に泣いたのは大永三年三月八日のことであった。貞秀智閑入道の子刑部大輔秀行が業半ばにして世を去り、十三歳の秀紀が後を継いだ。伯父高郷は蒲生の家督を継ぐべき正統は此の高郷なりと入道に申入れをしている。このとき以来、藩は二派に分かれ陰に陽にと凍てた氷と氷の刃の対立となった。高郷一派の策動しげしとみて、事態の緊迫をひしと覚えた秀紀は音羽城に叔父秀順を頼りとして身を寄せたのである。高郷にしてみれば、秀紀を倒さぬ限りは如何に

権謀術策を弄したとしても蒲生の家督を己れの掌に握ることは出来はしない。そこで秀紀乱心を口実の楯として大手搦手から策動しつづけた。貞秀以来の家臣は秀紀の心を心として蒲生の家を守ろうとしたが、所謂紋の内なる地侍たちは功を焦り血にはやり風聞を真にうけ、秀紀を除かんとして盟約を固める。日増しに大きく渦捲く陰然とした蠢きを感じながら秀紀は己れの道を考えねばならなかった。そこに許される道は譲歩ではなく態をかわす以外の何ものもなかった。それが蒲生家を守る唯一の道であった。

秀紀が音羽城に入るや、貞秀以来の忠臣達も音羽城に馳せ参じた。この動きを見て激怒した高郷は六角家に救援を頼み、朽木種綱を入れ総勢二万余騎が音羽城めざして攻め寄せたのであった。城兵二百余名、緒戦は華々しく寡兵もって六角の大軍を引き寄せはしなかった。六角勢は長期の戦構えに入った。いかに鉄壁の名城であったとて、それを守る屈強の士も食糧乏しくては如何に志かたくあろうとも、心のみでは己が身は動きはしない。またたくまに月日は流れ、降伏の日を迎えたのである。音羽城を落した六角定頼は心中ひそかに思うところがあった、蒲生の所領悉くを高郷が握るとなれば禍根を残すやも知れぬ、蒲生家を継ぐものは秀紀とはいえ立てるわけにもゆかぬ、とすれば二者互いに牽制し合うこと、それが六角にとっても安心の道というものじゃ。そこで六角定頼の筋書きどおりの秀紀・高郷間の和議となり、高郷、その子定秀は中野城に入り、音羽城は秀順が、秀紀は新たに築城ということになったのである。しかも定秀の息女を秀紀に妻すこととした。秀紀が音羽城から坤にあたる峠越えの地に築城したのが鎌掛城であった。

「あそこに見える石南花渓、あの山が鎌掛城のあったところや」

「藤兵衛池のある……」

「そうや、お殿さまが身を投げられた池がある――」

「哀しい話ばっかしやなァ」梨枝はふっと漏らす。
「人の世とはそうしたものなんやで。宿世というものがあってなァ……」
秀紀が鎌掛城を築いてからというもの高郷・定秀父子の心中穏かならず、愈々もって覇権への異常なまでの執念を燃したのであった。密命を受けた禅僧善知容は城主秀紀に近づき寵を得て毒殺をはかった。年に一度の藤見の宴は城主非業の死の宴となった。毒ゆえに朦朧とした秀紀は咽喉笛をきり、刀を口にふくむや暗闇の渓底めがけ身を投じた。城主狂乱の果、自害、誰の目にも疑う余地はなく、まさに高郷の思う壺であった。蒲生藤兵衛尉秀紀、二十四歳であった。
「鎌掛のお殿さまはやさしい方で、音羽籠城のただなか、正月には歌会を催されたとか。毒殺の張本人の高郷さまとやらも入道になられてからは、えらい信心でな。そや、思いだしたわ、高郷さまの歌、何を聞きなにを見るにも老が身は南無阿彌陀仏にまかせたらなむ――」
「なむあみだぶつ……」
「人はな、みんな仏さまのおこころに包まれるのや、そうでなければ浄土へは行けんのやで」
「姉さんはよいなァ、お寺に居るのやもの、浄土ゆき間違いなしや」
「そんなことはないのやで。人は心がけ次第や。念仏は無礙の一道なり、そのいわれいかんとならば信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし――親鸞上人さまのお言葉なんやで。お念仏を唱えるこころが大切なんや、どこに居ようと信仰心を持てば阿彌陀仏さまは守ってくださる、そういうものなんや」
「お説教きかされるみたいや、あまり難しい話は……それより相談があるの」梨枝は口ごもって言った。
「そんなに勿体ぶらずに、さァ早う言いなさいや」

「……」姉にせきたてられて猶更梨枝は口が重くなってしまう。妙に恥ずかしいのである。梨枝は姉に一目置いている。それだけに一笑に付されるのではないかと考えてしまうのである。

「おかしな子や、梨枝は――」姉は苦笑している。

〈これだから敵わないのや……〉このまま何も言わずにいたのでは折角誘いに応じて此処まで伴をした本意が果されはしない。

「御奉公の話が……ちゃんと勤まるかどうか……」

「それなら聞いている、とにかく女は一度奉公に行って世の中というものを知らんと不可んなァ……井の中の蛙になったらあかん、行儀作法ひとつでも然うやで――」

「なんや怖ろしいみたい……」それでいて梨枝は未知の世にとびだしてみたく思う。

「こころに杖を衝くことやなァ、これが出来たら怖いものなしや。そや、聞いたことあるやろ、お城を築かれた智閑入道さまの話。血腥い戦場で刀を振りかざしながら手には常に数珠をしておられた、ただ一心にお念仏を唱えておられた……敵が怖いのとはちがう、敵を斃さねばならん、いやが応でも斃さねばならん、その支えとなったのがお念仏や。人それぞれに大なり小なり自分の心のなかに杖を衝いて生きていくもんや。杖がなかったら余りにも哀しすぎるのとちがうか」

〈……杖、こころの杖をつく……〉梨枝は幾たびとなく口遊んでいた。

「お寺で明け暮れていると、ほんまに様々な人たちが見える。みんな苦しんで、みんな精一杯で生きてるんやなァと思う……人の世は並み大抵のことでは暮してはゆけん、それだけに何かが要る、なんでもよいのや、なにかがある人は矢張り違うとる。……心の杖を見つけださねばならん、なにが自分の杖になるのか、よう考えてみんとなァ……」

「……」

「ともかく自分自身、世の中に揉まれて苦労することや。ちっぽけな殻のなかで息をしとっては駄目、世の中はそれはもう大きうて凄まじいものや、美しいものもある、醜いものもある、みな生身なんや。白い蓮の花を思うてみても泥のなかに在るからこそ美しう咲くのや。苦を避けたら不可ん、与えられた目のまえの事に食いつくことが先ず第一や、そのうちにひとりでに世の中を見る目というものが開けてくるもんや」

「……」

「お医者のお家で御奉公すれば、いろいろの人たちの姿が見られる、偽りのない真の姿というものがな、お寺と同じやと思うけんど……海原に乗りだしてみるんやな、ちっぽけな舟で、そりゃ、途中で溺れるかも知れん、座礁するかも知れん、やるだけの事やればそれでよいやないか」

「そうやなァ……」梨枝はひと言つぶやいて大きく息を吸い込んだ。山の匂いが一頻りはげしく迫ってきた。

「もう戻らんといかんなァ」姉にうながされて梨枝もやおら腰をあげた。

「ああ、いい藪入やった」と笑いながら姉は帰って行った。妙に淋しい思いがした。それでいて梨枝は爽やかであった。城山へ登って良かったと心底から嬉しく思う。この日頃の重い心の霧がはれたようであった。姉は心に杖を衝けと言う。いまの梨枝には何が杖となるかは皆目見当さえつきはしない。いや、杖というもの自体が掴めてはいない。ただ、なんとなく何かを掴まなければという気構えだけが湧き出てきたようであった。そのことが無性にうれしく思われるのである。

〈姉さんは矢張り偉いなァ……負けんようにせんといかん〉今更ながらに姉の存在のありがたさに気付くのであった。

「どうかしたのかいな、えらい厳しい顔をして――」母が梨枝の顔をのぞき込んで言った。

すかさずに梨枝はクスリと笑う。
「おかしな子や、おまえは――」
「杖をつくことにしたんや、この心のなかに」梨枝は自分の胸元を指さして言う。
「なんやて？　杖をつく――」いぶかしげに母は首をかしげた。
「女というものは杖をつかんといかんのやで――」言い終えて梨枝は母の顔を見る。母の語りのお株を奪って切り返したつもりであった。
「そうや、女というものはな――」母は不得要領で笑う。それにつられて梨枝も笑う。
「秋になったら御奉公にあがらして貰うわ、杖をつかんといかんもの――」梨枝のこころはすがすがしかった。
　心とは斯くも変るものかと梨枝は不思議にすら思う。些細なことが、束の間の時が、昨日までの自分とは違うこころにしてしまう。あの山の遥るか向うには京の町がある。梨枝のこころは京へと翔んでいる。憧憬でないと言えば嘘になる。山里から王城の地への旅立ちは夢幻にも似る。が、梨枝は一途に何かを求めようとしている。厳しさの旅立ちでなければならぬと自らに言い聞かせるのである。正直に言って世事に疎く無学な身にとって小石家の奉公は任が重すぎるような気がするのである。商家なら気は楽である。医術・学問の家での一挙一動は思うてみただけで梨枝のこころをも金縛りにする。ああと嘆息をつくや、これではならぬと鞭を打つ。鞭は骨の髄にこころよく響いてくる。これでいいと梨枝は自分自身を取り戻す。なにも魑魅魍魎のお屋敷でもあるまいにと苦笑するのであった。何事も修行やと辛棒づよい梨枝は胸を張ってみせる。
「えらい早うから起きて――」母が寝間から声をかけた。
「こころを入れかえましたので」殊勝顔で梨枝は答える。言葉づかいまでが改まっていて我ながら

可笑しくもある。前の寺の小僧さんたちに負けてはならじと早暁に起きて働くことにしたのであった。

〈一に修行、二にも修行……とは言うても修行とは……しんどいものやなァ……〉梨枝はフウと大きく息を吐く。

遥るかの地蝦夷では異国の船が高田屋嘉兵衛を捕え去ったということも、幕府が蝦夷巡察に心奪われていることも、それに近くの京では先年上田秋成が佗しく此の世を去り、蕪村の末期の水をとった呉春の死も、この村里とは何の関わりもないことであった。江戸の大火の噂すら梨枝の耳には伝っては来なかった。ましてや「大日本史紀伝」が朝廷・幕府に進献されるなどは雲栈のかなたの挙措でしかない。

〈秋祭りには此処には居ないことになるのやなァ……〉ふと一沫のさびしさが梨枝のこころに横切る。それでも梨枝には夢がある。女というものはな、との母の語り口調を真似てみる。

〈女というものは……いったい、どんな女になれるのかしら……〉

今日も川原で虎杖を採って来た。その太い莖に塩をつけて母と一緒に綿向山を仰ぐのであった。

その二　男の里

備後の神辺村の明け暮れは静謐である。

黄葉夕陽村舎に笈を負う者の数は実に数十を越えている。昨年歳暮、ここ菅茶山の廉塾に来て以来、多くの塾生に「論語」を講義し茶山の詩集を編んではいるのだが山陽のこころは何故か満たされないのであった。あれほどまでに意気込み、己れの道を烈しく踏みしだくべく決意して乗りこんで来たというのに、ここ山村での日々が余りにもむなしすぎる、わが才能は山中の瓦礫として埋れさってしまうではないか、切歯扼腕、山陽は一室に胡座している。こころは正しく黄葉夕陽であった。

〈妙に怖ろしいな、このままではどうなることか……わし自身、わが心をはかりかねてしまう……〉黒い翳りが横切っては山陽は心が重く沈みこんでしまう。ちかごろは毎日が耐えがたいのである。「ああ――」思わず嘆息をつく。庭の竹越しに茶山の居間がある。茶山が端座していると思うだけで山陽は滅入ってしまう。このような筈ではなかったと初心に戻ろうと努めはするのだが徒労であった。頭に鉄枷でも嵌めこまれたようで思考どころではない。胡座をかいて凝と天井を見つづけている。不意に天井がそのまま落ちてきそうに思われる。仰向き大の字になりゴロリと横たわる。〈ああ、なんたる生きざまであったのか……〉このひとときに山陽の眼窩の底から過ぎ去った歳月の営みが走馬燈にも似て浮かびあがってくるのであある。いまはただ過去の翳りのなかに身を置くよ

り他に道はなかった。その翳りなかで酔う、酔うては眼とじて墨色の絵を彩る。微塵も絵は動きはしない。山陽の目は絵を嘗めつくしている。この刹那は、詩もなければ歴史も顔ださぬ静止の時間でもあった。それ故に山陽は茫然として過去の翳りに身を委ねて酔うのである。斬り苛んでくる筈の翳りが何の痛みすら伴わぬのはどうしたことか。

〈さまざまのことがありすぎたようだな――〉今となっては絵空事のように思い出されてくるのである。甦っては消え、沈んでは浮ぶ一つ一つの水泡がそれでいて鮮明である。大きく音たてて迫り跫音もなく遠ざかってゆく往にし日の残照であった。

〈十有三の春秋　春秋去ること水のごとし　いずれの時か吾が志成りて　千古青史に列せん――歴史に名を留めなければと意気さかんであったなァ、ともかく道はただ一筋にゆくてに開かれてあると信じこんでいた、進めばよい、歩めば叶えられると頑なまでに思うていた……幼かったのだなァ。江戸におられた父上からも賞賛された詩であった、昌平黌の柴野栗山先生の助言を戴いて通鑑綱目を読む明け暮れ……あのころから自分のからだのただならぬことに気付いていた、さながら二つの自分が在るようで書籍に熱中できずに頭が重くひきつり万事億劫となる、どうとでもなれと生きていることすら大儀で煩わしくなる、いったい青史に名を留めんなどと大言壮語した輩はどこの誰なのだと罵声を浴せかけてやる、すると途端に奴は身を縮めて姿をかき消してゆく、様を見ろ、わしは思いきり嘲笑してやる、実にこころよかった。が、そのあと襲うて来るのは激しい虚脱だった、喚くほどに心が痛んできたな……手足が言うことをきかぬ、頭には霧がかかる、口を開くことすらままならずで一室に蹋蹐しているより他に手だてはなかった、さようの明け暮れに母上は朝な夕な薬湯を服むことを無理強いなされた、薬は服まねばならぬと分ってはいながら不意に襲うたあの恐怖、この薬で命落すのではないかと……なんたる不遜驕傲であったことか。凝としてはおれ

ぬ、それでいて何を為せばよいのやら皆目わからぬ苦しい日々であったなァ……正直言って何故斯様に苦しまねばならぬのかと運命を呪うてみさえした、なにの救いのあろう筈とてない、あるは日を置いて襲う発作のみ。書を読まねばと思った、が、それが叶わぬ苦しさは己れの心中の地獄絵図である。下痢はする、医師は姿を見せる、母上の狼狽された姿、頭は重い、腫物にさわるかのわが処遇であったな……それでいて心の奥底を垣間見てくれるものは居ない、さびしい、せつなかった。ただ己れひとり心のなかで苦悶していた、これでよいのかと。ひとつの己れが他の己れを打擲する、狂おしくなる、喚かねば気がすまぬ、あたり構わず暴れてしまう、その折そこに見境はない、目前にあるは悉く鬼であり夜叉、斃さねば自分がやられる、わしは必死で抗した……弟大二郎が疱瘡で死んだのもその頃であったなァ〉

あの頃、山陽は確かに異常であった。自らを禦し得ぬ為体であった。十有三春秋の意気など那辺にも窺うことはできはせぬ。家人の持て余しものであった。父春水の苦衷はいかばかりであったことか。苦労の末に手に入れた藩儒の地位、それに幕閣松平定信の信用を背にして春水は跡継山陽の狂態に心を痛めた。父の苦悶とは異なる世界で山陽は自らのこころを嘖んでいた。正気に戻ったとき、言い知れぬ寂寥にとらわれ、ああ吾が志も果し得ぬかと山陽は人知れず涙するのであった。

〈石見へ出掛けたな、叔父の杏坪どのに伴われて有福温泉へ……暗闇であった、暗く重い旅立ち、登り登りて峡路天まさに黒からんとす、それでも何かを此の掌にしかと摑みたかった、溺れるもの藁をも摑む、まさに然様の気持で旅立ったものだ。誰にも理解され得ぬこころ、いや、自分ですら摑み得ぬこころを抱いてな——これほどの苛酷なさだめがあろうか、涙し喚く以外なにを為し得ると言うのか。温泉での半月のあいだ、叔父上は何も教えてはくださらぬ、気をゆるりと持て、気を養うことじゃと仰言るのみであった。無為ほど辛いものもない、日々湯気と戯れるとき妙に甦った

は平家物語、保元物語などを読み耽った幼き日々の思い出であったな。無性に読書したい冀求にかられたものだ。それでも温泉の湯はわが身を洗うてくれたようだった、なにものかを求めねばと心底から覚悟し、まさに正念場なりとの思いを実感できたな。そして――〉

寛政九年三月十二日、山陽は江戸の昌平黌めざして旅立つのであった。不思議と山陽のこころは明るい、身も軽らかであった。周辺の思惑をよそに山陽ひとり浮き立っていた。江戸で学問が出来る、十有三春秋の思いは夢ではない、ただもう山陽のこころは逸るのであった。旗亭処々　人の酔いを喚ぶ　一路春風野の菜の花……江戸は招く、山陽は叔父杏坪とともに広島の地をあとにしたのであった。

〈あの旅立ちは実にこころよかったな、旅空を見上げても孤雲あり、この乾坤に在ってはわが身また孤雲、ひとりなればこそ青史に名を留めねばと言い聞かせつつ……源平の古戦場も此の目で見ることができた、湊川では諸葛孔明のこころを楠木正成のこころに見た、見るもの聞くもの悉くが心をとらえる、唐突に江戸へ行けと言われ多少の辟易は覚えもしたが、挙に出てよかったと肺腑にしみて喜んだものだ。

藩邸から尾藤二洲先生の官舎に移ってからというもの、ありがたかったな、毎夜々々、歴史の講義を聞くことができた、歴史の見方がよう摑めた、考えてみれば先生の酒の肴にされていたのやも知れぬ……大学、中庸を服部栗斎先生の許で読んだ、詩は古賀精里先生の許で……母上宛の書状にも灸をすえ薬を服んで体調に意を用い至極快調で勉励の旨を記したことを覚えている、こんどこそは直面目な円満な人間となってみせますとな。

通鑑綱目を読めとの教示を戴いた柴野栗山先生の炯炯たる眼の輝きに触れた折の感激は、いまだに忘れられぬ、わが師、わが恩人とも言うべき栗山先生の御尊容を拝したはあの折だけであった…

…江戸はわしの心をとらえて離しはしなかったのだが……月日の流れのうち、どうも満たされぬ、これでよいのかと疑念が生じはじめたな、昌平黌とはいったい何であるのか、斯様の学問ならば何処の地でも学び得るのではないか、なにを勿体振る、そのむなしさ、寂寥は足を遊里へと向けしめたものだ、よう暴れ遊びもしたなァ……われこそは天下の奇男児たりとの矜持だけは常に失ってはいなかった、父上のような一儒官として世を終えはせぬぞと胸を叩いたものだったが……気宇宏大なれど意満されずで悶々の日が続いた、これでよいのか、日夜己れを責めつづける、耐えきれぬ、たまらぬ、自分でも怖ろしかった、故郷に居た折のような病いが出ぬかと——それでも歯をくいしばり……さよう、詩がわしの心の支えでもあったな、わしのことを蘇東坡と綽名しよった、それほど詩にのめりこんでいたのだな。朱子学なるものがどうも素直には受け容れられなくなっていた、わしの考え方とはどうも異っている、と言うても世は寛政異学の禁より朱子学は大御所としての君臨、手も足も出ぬ……面白うない、万事が嫌となる、気は滅入る、心は塞ぐ、どうしろというのか、必死になって喘ぎ蹠いて何ものかを摑もうとしていたな、ところが曙光見出せずにいる、足掻いておる最中に——〉

江戸遊学は一年にして終った。いや、止むなく終止符を打たされたのであった。父春水の命には従わざるを得ぬ。江戸詰めを解かれた杏坪に従って山陽は空しい思いを抱いて江戸を離れた。名残りは尽きぬ、それでいて未練もない複雑な心境であった。とまれ、天下の奇男児を任ぜんとする気慨のみは山陽の心奥に固く凝固してはいたのである。

〈久しぶりで戻った身を待ちうけていたものは何であったか、怖れていたものがわが身に襲うてきたな。自分でもどうしようもない、他者には到底わかりはせぬ、観念の世界は截然としてはいるのだが肉体は意志とは無縁の係累と化してしまう、全く言うことを聞いてはくれぬ……あの焦燥、思

うても耐えられないな。心が二つとなって明と暗の世界を演出する、身は動と静の境を往来する、わが意志は何処にも働くこと叶いはせぬ、その癖こころは在る、天下の奇男児たらねばならぬと思うている。

一年間の江戸遊学はいったい何であったのか、わが志を容るる世は何処にある。悶々とせざるを得ないではないか。この苦悶を家人は宿痾暴発と嘆き鬱症と断ず。わかっている、自分でも為すべきが分ってはいても如何ともし難いのである。一個のいのちある身として斯様の苦痛があろうか。朝、目覚めても蒲団から脱け出ることが出来ぬ、外界はわが志を容れぬ世界、沈黙を守るより仕方がないではないか。父と雖も母といえども所詮わしの心は知っては貰えぬ。自分ですらわからぬこころではないか。母上の気づかいが殊更に心を苛立たせてくる、父上は病者は病者らしくせよと言われる、ああ――。無理やりに連れだされ御供舟を見に出掛けたこともあったな、祭囃子が頭に響いて……昼間の明るさは怖ろしかった、悉く看取られている、それに較べて夜は妙に心が落着いたものだ、忍びかに門を出るや別天地へ踏み出す思いがしたな……友は良きもの、商山の家で深夜気焔をあげたな。古の英偉傑の士　其の常に壱鬱憤悶の想いある所の者は則ち其の才の用いられざるなり――友とあるとき、これぞ真の己れと自覚することが叶うた、爽やかであった、夜のみが生きてある証であったな……何故に斯様昼と夜と異変をきたすのであるか、わかりはせぬ、まこと不思議ですらある。深夜、酔うて我家の敷居を跨ぐや刹那にして憂鬱となり体はもはや思うがごとくはなりはせぬ、心は哀しみつづける……わが才の果は如何、わが生の涯はいずこぞ……朝の訪れが怖ろしくもあった……〉

寛政十一年二月二十二日、山陽は藩医御園道英の娘淳と結婚した。わが子山陽を思う父春水の配慮であった。なんとしても斯かる状態から脱却させねば万事窮すであった。山陽の内に籠りつづけ

る姿を見ての苦肉の策でもあった。嫁でも貰うならば鬱々とした山陽のこころも和むであろう、夜な夜なの外出も避けられもしよう、父と母とは心痛めつつ新しき門出を秘かに期したのである。江戸から引き戻らされたと同じく娶らされたのであった。

〈いかように外飾を施されたとて心は変りはしない、このままでよいのか、天下に名を為す術もなく埋れゆくのではないか、重く垂れこめる暗雲を払い得ぬ焦燥があった。ひとり悶々の情を抱いての天涯孤独であったな。父上の藩儒として頑なにわが門を守らんとされるお気持、大日本史の筆写に専念された苦慮、すべては狭隘のこころ。その枠のなかで息づくことは到底我慢ならぬことであった、大海に舟出したい、楫をとらねばと跪きつづけたな……

嫁が来た、淳を娶った、が、ましてや十六の妻に何がわかろう、所詮はわしひとりであった。小さく一家に籠ろうと努める妻のいたいけな姿も志ある身には重荷となる、肩に荷ある限り足は捗りはせぬ。踏み出さねばならなかった、なんとしても。息がつまった、大きく世の大気が吸いたい、親を逃れ妻を避け家の桎梏から這い出るしかない。と言って藩に縛られての身、のたうちまわり詩会での憂さばらし、厳島の廓での遊興……はては父上からの禁足申し渡し……雁字搦めの日々であった……父上の御顔の怖ろしさ、母上の怯えた目、妻の愚痴、家がますます離れてゆく、哀しいことだった、わびしすぎた……淳には済まぬとは思った、が、それ以上の大きなものに対する抗いがあったな。引き退がるわけにはゆかぬ、目に見えぬ正体不明のなにものかに立ち向わねばならなかったのだ。我武者羅に喚き抗い韋駄天走りするこころのうちは耐えがたき寂寥にうちのめされていた。……わが才を生かさねばならぬ、世に出ねばならぬ、それのみを汲汲と追いつづけていたな〉

〈……あの折は、父上は江戸へ出仕されておいでだったな、ともかく自由に生きねばとの思いを抑えがたくて。あとになって考えてみれば大事件ということにはなるのだが……脱藩することにな

る、死罪になるなどと考えてみるゆとりすらなかったな、今を措いて機はないではないか、京へ出て志を生かさねばならぬ、わしは挙に出てしもうたのだった。あの日は雨であった、もはや後戻りはできぬ、黙々と雨に濡れ足は京へと向っていたな……〉

叔父伝五郎が死んで、その弔慰のため山陽が竹原の地に赴くことになったのである。一家の名代としてである。山陽にしてみれば我が家という桎梏からの解放の旅立ちであった。逡巡すべき手合いは見当らぬ、いざ往かんであった。供に連れた太助は謂わば目付役であった。目付役の目を誤魔化すことは容易ではない。それを可能とするはただ力だけである。途中、松子山にさしかかるや矢庭に山陽は刀を抜いて太助に斬りかかった。怯む太助の手から香奠を奪い取り、そのまま山陽は姿を消したのであった。

山陽自身はよしとしても頼家にとっては浮沈の大事であった。このままでは一家断絶は必定である。春水は江戸である。杏坪は追手を差し向けた。菅茶山も陣頭に立った。探索に一族悉くが立ち上った。一家の心痛嗟惋をよそに山陽は京の友福井新九郎の家で己れの道を模索していたのである。が、この挙も失敗に終った。広島を出奔して二ヶ月足らずのうちに山陽は京から連れ戻されてしまったのである。杏坪のみは豪侠狂妄のしわざとして山陽の心を察してくれたが、待ちうけていたものは座敷牢であった。言うまでもなく廃嫡である。春水の後継は叔父春風の子熊吉と定まった。妻淳とは離縁となる。矢継早に頼家では手を打ち藩に対して身を律したのである。

〈当初三ヶ月というものは随分と辛かったなァ……座敷牢のなかで、もはや志は果し得ずしてこのままわが生を終えるのか、まさに暗闇の日々であった。京へと走ったことが他人事のようであった、志を得ること叶わぬからには天下の奇男児たるもの生きていて何になるか、幾度となく死を思うたものよ。書も繙くこと許されぬ、筆も手には叶わぬ、禁錮の刑は身も心も冷たく凍てつかせ

た、犬死悶死はしとうはない、が、わが運命は涯しなき幽閉であった……同じ座敷内にありながら母上すら顔をお見せにはならぬ、牢内に在って、此の宇宙にあって、わしは唯ひとりであった、淋しい、わびしい、それを支える筈の志ですら姿を消してしまっているではないか。嗚咽は断腸となり、目前の牢の錠前は涙すら流すを拒む、思い返すことも辛いな……

書と筆硯を許された折は、ただもう涙が迸ったな、あの折の感激は……身は牢内にあろうとて筆の世界は無限である、外界との遮断はむしろ僥倖であった、内に籠る、己れの心の世界に沈淪できた……牢に住してはじめて真の己れの心姿を見ることができたのかも知れぬ、ひたすら書を貪り、従横無尽に筆を馳せ、天に向うてわが心を吐露したな、思うてみれば光圀公にもせい、唐の司馬遷にもせよ、司馬光、さては朱子にしてからが満たされぬ志からの真情吐露であったのではないのか。その吐露は形を為さねば世に認められはせぬ、形として世に残さねばならぬ、永劫の過去より永劫のゆくてに流れつづける歴史を此の手でとらえるのだ、修史こそわが事業ぞと興奮を覚えたものだな。おもいを凝らし想を練るには恰好の場所であった、今にし思うと謂わば天恵というべきもの、男児畢生の事業の緒が与えられた、ありがたいな。後の世の人は座敷牢に閉じ込められた身を嘲笑侮蔑もしようが、己れのみの世界に閉じこもり己れのみの心の世界を深め得る喜びは何ものにもかえがたくあった。論語から孟子、大学、小戴、大戴、儀礼、詩、書、周官、春秋、左氏伝、公羊伝、穀梁伝、中庸、そして再び論語へと舞い戻り読破したな。不思議なことに病の発作は影を潜めてくれた、貪慾なまでに書を繙き求めつづけたな。気がつくと足は痺れ強張って言うことをきかぬこと幾度か。精根尽きんばかりの充実せる日々が座敷牢にはあった。

今日に生きる者は従前の喪乱を詳かにせずんば或は自らその生の幸を知らざるなり、この書を読む者、首巻より漸次に覧閲し、もって末編に至らば自ら能くこれを見ん、必ずしも喋喋頌賛せざる

なり――よし、これだな、歴史を語らねばならぬ、武門の歴史の流れに貫かれおるこころを語らねばならぬ、覇道には非ず王道をな。歴史とは勢である、勢をとらえねばならぬ、勢の天下に於けるや、それ猶水のごときか。人、勢に違うこと能わず、わしの道も勢だ……〉

山陽が幽閉から脱し得たのは文化二年五月九日であった。実に四年有半にわたる禁慎生活であった。ながの禁足から自分の足で大地を踏み得たとは言っても、己れの道は然うたやすく歩むことは出来ない。はるか雲のかなたである。白き雲は仰ぐことは出来たとて掌に掴むことは叶いはしない。白雲にあこがれるおもいは此処地上にあっては夢のまた夢にすぎない。惆悵のこころは遊興の巷に霧散させるより他には術がなかった。

〈禁足を解かれて父上と竹原へ赴いた、わしに代って景譲（熊吉）が後継ぎとなったことを御先祖へ報告のためにな。菅茶山先生にお逢いできた、はじめてわしの詩才を認めてくれるお人に出逢うことが叶うた喜び……天地があらたに開けたおもいであった。以来、鬱々とした心は和らぎ詩想はほとばしったものだ、茶山先生にこそわが詩の宝玉を認めて戴くべし、認めて戴かねばならぬと幾度となく書を献じたな……茶山先生の御心が身にしみた、感君回首向耕漁、先生は斯うまで言ってくだされた、田舎者茶山のことを慕うてくれてありがたいとな。励まし、いたわりの御心で包んでくだされた、わしは幾度となく感涙に咽んだな。無性にあの頃がなつかしうなってくる……〉

〈……茶山先生からお叱言頂戴したことがあった、春水どのが嘆いておいでじゃ、浪華の町家の少年輩の情態と。景譲と連れ立ち茶屋遊びに毎夜出掛けた頃のことだ、わしが大豚で景譲が小豚だと父上が嘆いておいでじゃと。そりゃ確かに遊蕩三昧、だが修史の方は豊臣氏あたりまで書き終えていた、つまりは憂悶ばらしのいのちの糧だったな……父上からは二人一緒では不可ん、互いに別居せよとまで言われたが……景譲は遊び好きだった、それを説教する筈のわしが再び遊蕩に足をのめ

らすこととなってしもうていた、可笑しなめぐりあわせよ……〉

「ああ――」思わず山陽は嘆息をついた。先刻来、往にし日の残照に身を委ね、なにとなく涙ぐむ思いで回想に没していたのであった。目覚めたかのように我に戻ったとき透かさず現実の諸相が自分の周辺に甦り息づいて迫ってくるのを覚えた。

「ああ――」再び嘆息が出る。此処黄葉夕陽村舎も黄昏、山陽自身のこころも黄昏であった。沈みゆく陽のごとくもの悲しく、とらえようもない佗しさに全身は包まれている。摑み得たと思った日の光は既にして夕の陽と沈みゆこうとしている。心は重く沈む。賽を振ることは容易に見えて、その実なかなか振りがたいものである。が、賽は振らねばならぬと山陽は思う。この日頃、山陽は賽のことで頭が重いのであった。自分ひとりだけの賽でありながら、その賽の目には他者のこころが宿っている。無下に袖にするわけにもゆかぬ。何処まで行っても己れひとりにはなれぬのかと思うと淋しくもあり苛立たしくもある。ましてや己れの心を知り己れの詩才を認めてくれる大恩人の目の賽は此の掌の上で転すことには躊躇があった。が、それに拘泥する限り己れの道は開けそうもない。右せんか左せんか、山陽のこころは揺れつづけていた。

この黄葉夕陽舎は廉塾と称し福山藩の塾でもあった。茶山にしてみれば山陽を是非とも自分の後継者として手元に置いておきたかった。月日の流れは益々茶山にこの思いを深くさせる。掌中の珠玉を手離すわけにはゆかぬ。藩儒となって廉塾の灯を守って貰いたいと茶山は考えていた。そうなれば安心できる、余生も悠々自適である、茶山は手を拱いてはいられなくなった。

山陽の心に暗い翳りが宿りはじめたのは茶山が山陽を後継者にと決意したころからである。茶山は策を練っていた。その策の端々に触れるたびに山陽は心が重くなるのであった。

桜の花が散りそめる頃であった。

「今日は内藤どの宅にて詩会が催される。一緒に来て貰いたい、天下無双の詩を披露してくれるのじゃぞ。頼みましたぞ」

「それは結構なお誘いで――」山陽は退屈しのぎには打って付けと喜んだ。家老内藤景堅の屋敷ならば不足はない。わが詩才を存分に発揮してみせるぞと意気込んだのである。

一応、藩の御歴歴が顔を揃えている。斯の席は山陽にとっては初めてである。不思議なことに山陽は鹿爪らしい面々を見ると心のなかにムラと敵愾心のようなものが湧きあがってくるのである。いまも勃として気は充実している。

「菅先生のお連れになられたは養子山陽――」世話役が一同に紹介した。

劈頭の此の一語で山陽の折角の詩想は無残にもうち拉がれてしまった。全くやる気を喪失してしまった。

「私めは頼山陽と申すものでございます、茶山先生養子ではございませぬ故――」顔の筋を硬張らせながら言ってのけた。

「いや、然様でござったか、まァよいではないか、御養子同然ではござらぬか」

「廉塾を継ぐお方じゃ、謂わば菅家のお一人じゃ」

「これからが楽しみよ、茶山先生からは色々お聞きしておる、藩のため大いに働いてくだされよ」

「先生のお気に入りだけあって、なかなかの学者のようじゃ、結構至極、藩儒として申し分はない」

俎上の魚であった。山陽には抗うことすらできはしない。ただ黙って煮えくりかえる炎を抑えるのが精一杯であった。

へけしからん、実に怪しからん、第一、わしを養子の山陽じゃと……加之、山陽と呼びすてではな

いか。わしは詩会へ招かれたのだ、招聘されたのだぞ。先生の瘤付ではないのだ、それをなんたる無礼……〉山陽は凝と怺えていた。いま此処で息巻いてはならぬと辛うじて冷静さを持ちつづけていた。

紙上の功名、添足の蛇、漫りに老圃を追いて桑麻を学ぶ――

〈ここ廉塾での日々は愈々おもしろう無うなってきた、くだらぬ、つまらぬ……〉

忍の字で心を抑えて内藤家から戻るや山陽は茶山に食ってかかった。帰り道では二人は無言であった。

「今日の席はいったい何ですか、私の遇し方ときたら憤懣やるかたありませぬ。私はいったい先生の何なのですか」

「……」

「こちらへ参りましたは養子になるためではありません。話が違います。それを――」

「いや、そう怒らんでくれ。そ、それにはいろいろと仔細というものがあってな――」

「謂わば寺の後住のようなものとして世話してやろうと言われたは何処のどなたでございましたか。それにつられた私が愚か者でありました、実に――」

「……」

「私は頼山陽、菅山陽ではありませぬ」

「いやいや、お前さんの言う通りじゃ、誤解もあろう、まァ今日のことは、これこの通りじゃ、勘弁されよ」六十三歳の茶山は三十一歳の山陽に頭を下げた。

「頭をおあげになってください」山陽は斯ういうことには極めて弱い。直ぐに気弱になってしまうのである。

「そこでじゃが、前々から福山藩では召し抱えたいと申しおってな、このあたりで落着いてはくれぬか、お前さんの身の為にもなろうというもの。春水どのも安心くださろうて――」
「父上が安心する筈はありません、私が福山藩に抱えられるは父上の恥辱です。私は仕えるならば芸州藩です。他国に仕官は致しませぬ、たとえ如何なる藩から招かれようとも――」
「お前さん、芸州藩の藩儒になれると思うてか。よう考えてみるのじゃ、そこのところを分別つけんとな」
「芸州藩が駄目ならば私は何処にも仕えは致しませぬ」
「それならば此処で弟子に講じてやってくだされい、それに限る、それでよい」
「……」
「ところで、わしの詩集の校正、だいぶ進捗しておるかな。そのうち京から出そうと思うておるのでな、よろしく頼みますぞ」茶山は話題を変えた。このあたりは老師の人ごころを摑む妙術でもあった。
「九十の村婆なお巧思、機織り出す柳条の奇、故人我に贈る知んぬ何の意ぞ、頽齢の色絲に乏しきを警めんと欲す――父上が先生に衣を送ってこられたときの先生の作、そのあたりを――」
「さようか。思い出すこと多いものじゃ、この齢ともなるとな、それに余生というものを熟考せねばならん、この廉塾の将来のことも……頼みましたぞ」
〈どうも不味い、このままでは身を縛られてしまう〉茶山の低頭する姿を見ていると山陽は気勢が全くあがらない。そうした自分を知るだけに殊更に憂鬱となる。この禿頭め！　と心の中で叫んでいる。せめてもの快哉というところである。
　このところ茶山は常に山陽を同道して家老内藤家の雅会をはじめ、三浦遠江家などへ足を向け

た。月見にも誘う。春のように穏かな茶山であった。

〈禿頭め！　なにか企んでいるな〉山陽は心を引き締めてかかっている。

長崎で医学を学ばんと志を立てた若者が茶山を尋ねて来た。新宮涼庭である。この日、酒を酌み、天下を論じ、詩を作り、山陽と涼庭は肝胆相照らす仲となっていた。久方ぶりで心のおもいを吐露し得て山陽は上機嫌であった。運命とは奇しきものであって二十二年後山陽が病魔で倒れた際、脈をとることとなるのが此の涼庭であろうとは両人の知るところではなかった。

涼庭が廉塾を去り長崎への旅に出たあと、茶山は話を切り出したのである。

「実はな、わしの姪を娶って貰えまいか。前々から考えておったことなのじゃが、なかなか良い娘でな。器量もよし、それに才智もある、斯う申すも手前味噌のようで何じゃが実に良き娘じゃ、三国一の花嫁と思うておる。ひとつ思案して、このへんで身を固めたらいかがなものかな」

「……」山陽は言葉も出なかった。

「藩の方でも此の話には乗り気でな、是非ともにと願うておいでじゃ。あとあとの事は万事安泰というもの。この廉塾も既に数百余の弟子を送り出しておる、いやましての繁栄願おうではないか」

「折角のお話ながら、私は妻をめとる気は毫もございませぬので――」

「いつまでも身を固めぬわけにはゆくまいがな。ひとり身では何かと不便じゃ、それに世の信頼というものも異ってくる、謂わば世を渡る重石というやつじゃぞ」

「いかように不便となろうとも妻はめとらぬつもり、私、生涯妻を持ちはいたしませぬ、それ故、折角なれど御断りいたします」

「まァ、そう言わずに、ゆるりと思案してみてくれることよ、頼みましたぞ」穏やかな表情のうちに一筋のきびしさを残して茶山は自室へと戻って行った。

ぽつねんと後に残された山陽は憤りともならぬ空しさに打ち拉がれていた。

〈……もう我慢できぬな、賽を振らねばならんわい〉それでいて虚ろな山陽であった。

気をとり直して山陽は机に向った。いまの心情を誰かに叩きつけたい、筆は雄渾にとび散る。

名を天下に挙げてこそ天下の奇男児である。思うてもみよ、山崎闇斎にせよ、伊藤仁斎、ひいては荻生徂徠の仕事が何処の地で為されたるかを。ああ、我斯く鄙野に身を置く、なんたる痛恨事ぞ。都に出ねばならぬ。名儒俊才と交りを結び学問研鑽に努めねばならぬ。天下に此の人あり、世に此の書ありと名を為さねばならぬ。わが志は我がためにして、また我が為にはあらず。芸州藩の輝きの為でもある。芸州藩にとり我が存在は不可欠のもの、必ずや曙光たり得る。とは言え、このことを洞見するの人ありや。誰もなきにひとしいではないか。宝は地に埋れたままがよしとするのか。われを鄙野に閉じこめんとするものはあっても、わが志を知るものは無しである。これに耐えよと言うのか。不自由なき安穏の日々を送り得たとて志死しての営みは男児たるものの道ではない。此処廉塾に留り書を講ずるは我が道には非ず。歴史を著述し、詩を賦することこそ我が道、わが勢である。

身を縛らんとするもの、あまりにも多いではないか。福山藩へ仕官せよ、妻帯せよ——これらの声は奈辺より生ずるや、安泰とは何者の境涯なるや、あれを思い、これを思うと孤独ひしと迫りくるではないか。

ためらうなかれ。賽を振るべし。暗闇の野より燈を掲げ踏み出さねばならぬ。己れを殺してはならぬぞ。

筆を擱いて山陽はフウーと息を吐いた。鬱憤を吐いて棄てたようで頭が軽いように感じた。

〈この期に及んで今更ながらに気をつかう要はない……〉

ひとたび決意したとなると猪突せずにはおれぬ山陽である。もはや後を振りかえることはない。ゆくてへの猛進があるだけであった。心頭にかかる月には一点の曇りもない。皎として光輝あらしめねばならないのである。

我、天下に辞あり、天下誰か能くこれを禁ぜん。ここにおいて、朝廷、これに上将の任を授け、もって天下の侯伯を統べしむ——徳川の歴史を考えながら山陽は自らを擬してみるのである。

庭の水竹を隔てて茶山がいる。恩ある人に礼を失してはならぬ。鄭重に書状をしたためて我が意を訴えることにした。面と向っては気勢がそがれるのを山陽は怖れもしたのである。あらたまって物を言うにはこの方法しかない。

私めは生れつき多病の身であります。常に病に苦しみ、その為思うに叶わぬこと多き身であります。到底、仕官の儀叶いはいたしませぬ。よしんば藩に仕えたとしても却って迷惑をかけることと相成りましょう。先生も御存知のごとく、私めの性格は至って粗放にて放縦、他者の言葉には耳かすことなく、全くもっての懶惰であります。あまつさえ、倨傲、礼儀知らずであります。勝手気儘に世を渡るよりは道なき愚者でありますれば御放任くださいますよう。藩へは私めの意、よしなにお伝えください、願いあげます。つらつら思いますに私めは塾にも適してはおりません。どうか厄介者と私めをお思いくだって、快よく御放擲のほどを。三都のいずれかに出遊いたさば心の鬱悶も少しは霽れようかと我が身を思いおります。お怒りなされず万事私めの為したいようにお任せください。国元の親、また叔父にも私めの意を宜しくお話し賜りますよう——

茶山より返信はない。なんとしても承諾をと山陽は二度三度書状をしたためた。同じ屋敷のなかで塾生が飛脚である。事情を知らぬ飛脚は自分の仕事に怪訝である。山陽は黙って手渡し、茶山もまた無言で受け取る。

〈怒っておいでだな……まずい、これはどうもまずい。なにしろ、わしの身は先生が握っておられるのだからな。うっかり国元へでも送りかえされることにでもならば大変だぞ……懐柔策を講ぜんといかんな〉山陽の危惧は広島へ送還されはせぬかの一事であった。父春水が山陽を茶山に預けたのである。いまの山陽の身は完全に茶山の掌中にある。煮ようが焼いて食おうが茶山の思うがままと言ってよい。

〈三十一歳ともなっていながら、斯様に縛られているとは……〉無性に淋しくなるのであった。その思いがまた藩に対し父春水に対しての反抗心となって鎌首をもたげてくる。実に情ないのである。大の男が己れの意のままに行動できない、許されないのである。立ち向かう壁はあまりにも分厚い。壁の割れ目を探り当て忍者よろしく脱出しなければならない。檻のなかで与えられる餌を甘受してはおれない、牙をむいて檻を破らぬ限り自由は掌中に入りはしない。茶山が憤り山陽を国元へ送還する、このような事態ともなれば再度座敷牢へ閉じこめられたも同然である。なにとぞ何卒、山陽は頭を低うするしかなかった。

茶山は腹を立てていた。どうしても腹の虫が治らないでいる。柔和な顔も、いつともなく仏頂面となり独り言をブツブツと言うようになった。羽織袴姿で端座している茶山の口からは今日も愚痴めいた言葉がつぶやかれている。それでいて山陽に返信を書く気にはなれないのである。わしの心を察せずに、この青二才めが、と思うと筆をとる気にもなれない。

「お前さんを苦境より救うたは誰じゃ、この茶山じゃったな。お前さんに此の廉塾を継いで貰うつもりでいたに……お前さんを見込んだのじゃ、この神辺に落着いて貰えさえすればそれで結構。それをな、逃げ出すとは酷いではないか、恩を仇で返すとは許すわけにはゆかん、そうじゃろうが……」

「わしの福山藩に於ける立場はどうなる、面目丸潰れじゃ。折角の良き話であったに……芸州藩でのお前さんの立場をよう考えてみることじゃ。お前さんに仕官の声をかけるような藩はあるまいが……此の地で嫁を貰うて藩に仕えれば、こんな結構なことはないのだぞ、それをな、足蹴にするとは――」

一息ついてまた茶山は独り言をつづける。

「どうあっても三都へ出るというならば、わしにも覚悟はあるぞ。春水どのに引き渡すことにする、わしの責任に於いてな。お前さんは再び国元から出ることは出来はせん、よいのじゃな、よう思案してみることじゃな――」

「だいたい、お前さんは世の中というものを知らなすぎる。よう苦しむがよい。我儘が過ぎるのじゃ、身のほどを考えることだな。わしはお前さんの才に惚れて万事大目に見てきたが、あれやこれや、遊びにもせい金のことにもせい、何ひとつ文句も言わずにおったがな、もう然うはゆかぬ、思い知らせてやらんとな」

「なァ、この地に留ってくれぬか、頼みますぞ。わしも老齢じゃ、安心させてやろうと思ってはくれぬか……」

あとは悄然と肩を落して夕暮のなかに茶山は端座している。いつともなく一筋二筋と涙がこぼれ落ちる。老学者のこころも暗く重く沈んでいたのである。

〈老いとは侘しいものよ……あれを思い、これを思うても……養子の万年は病弱で後を継ぐなど……山陽めが承諾しおれば斯様に苦しまずに済むになァ……奴め！〉無性に淋しく、矢鱈と腹立ってくる茶山であった。

年は明けて文化八年となった。

折しも陰雨にぬれる閏二月六日、山陽は黄葉夕陽舎をあとに旅立った。塾生一人を伴うてである。漸くにして山陽は賽が振れたのである。

茶山は沈鬱であった。が、山陽の門出ともなれば贐なりともと詩を贈ることにした。いまの茶山の心は複雑であった。喜んでやらねばならぬ、それでいて哀しい。癪にもさわる。

〈お前さんは長い柄の傘をかかげて遥るか訪ねては来たが……心はれることは無かったと愚痴りおったな……僻処偏悲歳月移、担簦千里訪親知、都へ行ってもな、お前さんの及ばぬ学者才人は数知れずだぞ、由来上国饒才子、誰伴樊川作水嬉、いったい誰が連立って川遊びをするのか……今迄のようにはゆかんのじゃ……〉詩を詠み終えて茶山は笑みをもらした。

「惜しい、手離すのは実に惜しい」ポソリと茶山は呟いていた。

天馬空をゆく、山陽は岡山から姫路、そして大坂へと入った。大坂では篠崎家に身を寄せる。一安堵というところである。篠崎三島・小竹の父子は学者であり、家は呉服を商っていた。小竹は養子である。

「かなり勉強されているようですな、多々教えて戴かねばなりますまい」

「いや、田舎では何ひとつ思うようには参らず閉口しました。早い話が、この日本外史を草するにも資料が不足でして……」

「外史とな。山陽どの独自の史観が記されているのですな、是非とも拝見させて戴かねば——」

小竹の目は山陽の草稿に吸いつけられていった。いったい此の山陽の何処からこれだけのものが迸り出るのか、小竹はただただ感嘆するばかりであった。うらさびしげな此の男の何処に斯様な情熱が宿るのか不思議ですらある。

「私に写させて戴きたい」斯う言うや小竹は筆を手にしていた。

外史氏曰く、吾れ旧志を読み、鳥羽帝の時、数々制符を下し、諸州の武士の源・平二氏に属するを禁ずるを見て曰く、大権の将門に帰するや、其れこの時に在るかと――

小竹の筆の動き、目の輝きに山陽は感激した。孤独のこころに小竹のこころが食い込んで来た。周囲の誰しもが自分の心を理解してはくれぬ、と言うに小竹だけは無言で山陽の肺腑に迫ってくれる。涙がこぼれ落ちた。

「小竹どのは私の唯一の知己、ありがたい」山陽は畳に手をついていた。

山陽にとっては心さわやかな数日であった。が、外の世界は依然として暗く険しいものがあった。中井履軒を訪ねたが一瞥もなく追い返された。越智高洲の家も同様であった。ここでも山陽は分厚い壁を感じさせられたのであった。

〈これからが思いやられるな、身内の高洲どのですら避けようとする……〉覚悟してかからねばと山陽は思う。

「京へゆかれるのならば小石元瑞どのの所へ行かれるがよい。一筆書いて進ぜましょう。小石家は春水どのとも縁ある家ゆえに万事うまく世話してくれましょう」

嘗て春水が大坂江戸堀に住み青山塾を開いていたとき、小石元俊が身を寄せていたことがあった。元俊の子が元瑞である。大槻玄澤の弟子であり蘭方医である。春水が大坂で片山北海の混沌社に入っていたころ柴野栗山をはじめとし中井竹山、中井履軒、篠崎三島、亀井南溟、尾藤二洲、古賀精里と言った連中が学んでいたのであった。このうちの中井竹山の世話で春水は静子を娶ったのである。そして呱呱の声をあげたのが山陽である。安永九年十二月二十七日のことであった。

「遊蕩されぬようにな」謹厳な友小竹の言葉に送られて文化八年二月二十日、山陽は念願の京入りをしたのである。

その三　めぐりあい

京での山陽の生活は始った。籠の中の鳥は思いのままに自らの羽で天翔(あまが)こうとしている。天下の奇男児は意気衝天、天下に名を為さんと意気込んでいる。

斯うした京での日々を迎えるには余りにも遠いみちのりであった。紆余(うよ)曲折、黄葉夕陽舎を後にしてからが山陽の知らぬところで策動しきりであった。福山藩用達の河相周兵衛は山陽引戻し工作を手がけている。菅茶山の態度に業(ごう)を煮やしての所為である。となると茶山は山陽がいとおしい。然様(さよう)のことさせてなるものかと茶山は筆を執る。周辺の動きは扨置(さてお)いて、山陽自身、いったん入京していながら一ヶ月あまりで大坂の篠崎家へ舞い戻らねばならなかったのである。国元の芸州藩に無届で入京したためである。その一事に依って父春水の身に連累(れんるい)ありと聞かされたのである。そして漸く二ヶ月のちに再び入京という仕儀となった。己れの知らぬところに張りめぐらされた傀儡(かいらい)の糸をまたしても山陽は思い知らされたのであった。父春水からは勘当された状態で音信もない。謂わば四面楚歌のなかでの門出であった。

京の学者連中は山陽に肘鉄砲(ひじ)をくらわした。倨傲(きょごう)にして問題児でもあった山陽を全く鼻先であしらっている。歓迎されざる客人である。そのなかで山陽は塾を開いた。

〈いやはや、生活するとは大変なことだな……銭(ぜに)が無うては碌碌(ろくろく)飯も食えんぞ〉

〈ひるんではいかん、ここが天下の奇男児の見せどころだ〉

「塾生の数も少しは増えてきましたな、結構々々。ひとつ書を揮毫して戴きたい、さるお方から頼まれましたのでな」　小石元瑞が様子をうかがいにやって来た。

入京以来、山陽は元瑞の世話になっている。塾を開くことが出来たのも偏に元瑞の御陰である。大坂の篠崎小竹は謹厳である。それに較べて元瑞は遊びを心得ている。酸いも甘いもかみわけている。山陽にとっては恰好の話し相手であつた。厳格な古武士的な父親元俊の酒脱さと磊落さの側面をたっぷりと受けついだ元瑞は京に於ける蘭方医として既に名あり、こよなく風雅を愛する通人である。

〈ありがたいことだ、実にありがたい……〉　山陽は小竹と元瑞との友を得て心底から嬉しかった。

日の経つのは早かった。都での生活にも慣れた、そんな或る日、北條霞亭が姿を見せた。

「江戸では貴殿の父君春水先生に随分と御指導いただいたものです。斯う申しては何ですが聖堂で頼りになったのは春水先生おひとりでした」

「……いや、然様でしたか――」いささか山陽は面喰っている。

「どうもいけませんな、この京は。もっともらしい顔をして踏ん反り返った学者ばかりで。全く腹が立つ……」　霞亭は眉間に皺を寄せる。

「詩文にしてからが、なんと軽薄でありましょうか。いずこの地も心を満たしてはくれませぬ。山陽どのは偉い、実なき虚勢の学者連中を一人で相手しておられる、頭が下がる思いです」

「京の連中には腹が立ちますな。実に鼻持ちならずと言ったところ。乏しき己れの城に籠城して天下を察することが出来ぬ。学問の何たるかを知らぬ連中ですな」俄かに山陽は活気づいてきた。

「村瀬栲亭どのはな、この私を丸めこもうとして手練手管を用いて誘いかけておいででな、閉口し

てますよ。妙に粘っこく恩着せがましうて……」
「然様、あの方は既に還暦も過ぎておられる、お年ですな。古註学者の御老体というものは井の中の蛙と同じこと。山陽どの、たぶらかされてはなりませぬぞ、御要心――」
「京の大御所に頭を下げたとあっては此の山陽、男が廃りますからな、ハハハ……」
二人は意気投合して京の学者達を俎上にのせて散々に料理する。
「茶山先生のところにおいでたとのこと、茶山先生はいかがでしたか」
「私めの才能を認めてくださった方ですよ。廉塾をとび出してきましたが、あらためて先生の偉さを思いますな――」
「お尋ねせぬといけませぬなァ……御尊顔を拝してみたい」
「それはいい折みて神辺へ赴いてみてくだされ。、淋しい山間の地だけに喜ばれること間違いなし、大いに語らうてくだい」
〈ああ、清清した。友の来るはいいものだな……〉あらたに友を得て山陽は御機嫌であった。
「私は至って田舎者でして、どうも世の中とは肌が合わず……いや、世の中が間違っている、徒らに沽券にこだわって才ある者を蔑ろにしている。江戸の昌平黌にしても然り……俗塵に身を汚さず気儘に暮らすに越したことはありませんなァ……」
「全く霞亭どのと同じですぞ、能ある鷹は爪を隠す、せいぜい互いに爪と牙を磨くことですな」
ふたりの気焔は止むところを知らず友情の絆はいっしか固く結ばれてゆくのであった。
貧乏暇なし、とにかく慌しく月日は流れて文化十年は晩春となった。
「少し体を休めようと思うてのう、京の眺めでも見てな」春水がやって来た。
「父上に挨拶するのじゃ、余一よ」

「父上さま、余一でございます。御壮健の御顔を拝しまして嬉しうございます」
「オオ――」久方ぶりで見る我が子余一の姿に山陽は凝と目を奪われていた。離縁となった淳の産んだ長男坊である。
〈随分と成人しおったなァ……もう十三になる筈だな……〉父親としての山陽は妙に面映ゆい気持である。余一の面倒は悉く春水がしていた。謂うなれば腑甲斐無い父親山陽でもあった。
〈倅の余一も苦労しておる、それに父親のわしも……〉先年脱藩した折のこと、別れた妻淳の哀しげな顔が甦えって来た。
〈それにしても父上の御顔色がよいな。このぶんなれば説教されずに済みそうだ……〉山陽はやおら春水の顔を見上げる。この日まで春水とは全くの音信不通なのであった。茶山のもとを去って京へとび出したことが春水の勘気に触れていたのである。それがである、久しぶりでの春水は温容であり、余一まで同道して来てくれた。正直なところ、山陽は安堵の息をもらす。
「塾生もかなり集っておるようで結構なことじゃ。お前のことは篠崎どのに頼んである、謂わば監視役じゃな……」春水は苦笑しながら言った。
「いやもう忝ないことで……」山陽は頭を掻いた。元瑞と自分との間柄を見抜いているようでどうも間が悪い。
「昔のような、遊蕩はしてはいかんぞ。京にはな。著名の学者がおる、みなわしの知己じゃからのう……」
「舞蹈知らず幾旬か過ぐるを　三千里外再生の身　登々一たび金雞を拝する後　命は君恩に答えまつり　骸は親に奉ぜん――これが私の気持です。過ぐる年の弥生に詠みましたが今もなお変りは致しません、此の真塾の火の燃えるかぎり――」

「花また吾を知るや否や　白頭はもとの吾にあらざるを――わしも老いたものじゃ。京で学ぶもよいがのう、国元へ戻ってくれるのじゃぞ、そのうちにな」春水は淋しそうに言った。

「……」

「父上、一緒に暮しとうございます」余一は涙ぐんで言う。

「……」無言で山陽は余一を抱きしめていた。忘れはてていた父と子との血が改めて全身に奔流となって滾るのであった。しみじみとした情感であった。思わずに涙がこぼれ落ちた。

山陽にとって此の数日ほど心あたたまる折はなかった。父春水の怒りは解けた、わが子余一とも語らうことができた。無意識のうちに怖れ気にしていたことごとが霧散した。まさに春風、いや醇風駘蕩あでる。春水と山陽、山陽と余一の二組の父子は宇治へも足をのばして清遊に心なごめたのである。

帰国する春水と余一を見送ったあと、山陽は俄かに全身の力が抜けてしまったようであった。平素は忘却のかなたへと押しやり、いや無視すらしていた筈の肉親の情が、とっぷりと山陽を包んでいる。あたかも飢えた狼のように掌の熱いものを握りしめている。凍える孤独の寂しさが襲いかかってくる。

〈天下の奇男児、天涯孤独、いざ往かん――〉自らを叱咤激励、山陽は気を取り戻す。それでも去りゆく春の疼きは癒すことはできないでいる。

「どうも元気がないな。所詮人間というものはいくら力んでみたとて淋しがり屋なのだ……このあたりで妻を貰ってはどうかな……」山陽の心の底を見知ってか元瑞は言った。と言うより元瑞は世に容れられぬこの詩人に家庭を持たしてやりたい、このままでは何をしでかすやも知れぬ危懼もあってのことである。

「ありがたい。是非お願い申したいな。妻は……然様、目立たぬ地味な女、清楚な女ですぞ、化粧こってりは不可ませんぞ」
「ホホウ、厚化粧はいけませんか……いや山陽どのは厚化粧の女をお好みとお見受けしているのだが……ハハハッ」元瑞は含み笑いをして悦に入っている。
「よもや廓の女を身受けさせるおつもりではないでしょうな、元瑞どの」
「御懸念無用。春水どのにも喜んで戴けるよう心がけますからな。そうだ、篠崎どのも気にされておいでのようですぞ、そのうちに山陽どのに適わしき妻女を——」
「清楚な、飾り気なき女ですぞ、よろしいな」元瑞の意味ありげな顔に対して山陽は真顔で言った。
「ところでひとつ、遊びに出掛けますかな、山陽どの」
「大いに結構、参りましょう」
「女伴あい呼び袂を聯ねて去り——」山陽は口遊ぶ。
「紅裙なかば湿りて落花の泥、でしたな、嵐山での詩は——」
けんもほろろに山陽を全く無視してかかる京の学者たちのなかに在っては、斯うした友との日々が心の救いでもあり唯一の支えでもあった。
秋になって山陽は旅を思い立った。
〈何処でもよい、旅に出よう。……神辺へ赴いて茶山先生にお目にかかりたい、いろいろお話しせねばならぬなァ……と言うても足が重うて不可ん、敷居が高すぎる……ならば東向いて旅に出るか——〉一途に旅に出たい気持もあったが、癪にさわること多い京を離れて詩も詠みたい、それに暮らしのこともあり筆を揮うて稼ぎもしたいという魂胆もあってのことである。
「春琴どの、旅に出ますかな」真先に山陽は浦上春琴に誘いをかけた。

「それは結構ですな。ところで何処の地へ――」
「……美濃、尾張、それに遠江、伊勢の方へでも――」
「ならば願ったり叶ったりですな。私も何かものに出来そうです、よき絵が」
「然様、父君を凌ぐ絵が出来ますぞ、必ずや」
「世俗の垢でも落しに行きますかな」
「自然山水には偽りがない。春琴どのに御教授いただいて私も山水画を描きましょう、これでも絵には自信がありますからな」
〈春琴どのに心惹かれるのは、その父君玉堂どの所為かも知れんなァ……玉堂どのは天下の画人、留まるを潔しとせず藩を脱け出て修業された、その心意気に感ずるのだな……名を世に為すには停滞していては不可ん、脱藩もよし、大海に乗り出さねば……〉玉堂にことよせて我が志を思う山陽なのである。

十月になって愈々旅立つことが出来た。
〈有象無象の顔を見ないですむとは有難いものだ……〉京に在っては嫌応なしに学者連中のことが気にかかるが、いまの山陽は大自然のふところに居る。まさに浩然である。
〈さがなき輩は、山陽め、金に困って稼ぎの旅に出よったと笑っておろう……勝手に罵るがよいぞ、筆をふるうて稼げることは結構ではないか〉山陽は笑い返している。

大垣では江馬蘭斎の家を訪ねた。
「春水の伜山陽でございます。なにぶんにもよろしく――」相手は大垣藩の藩医であるだけに山陽は真面目に挨拶をした。
「なかなかの御活躍ぶり、日頃よりお聞きいたしおります」

「いや、お恥かしいことで――」斯う答えはしたが、山陽は蘭斎の含みある語調に気付きはしなかった。
蘭斎にしてみれば春水の倅山陽の風評を耳にしていただけに、唐突に姿を見せた山陽には好奇心も働いて関心を持っていたのである。いかなる人物であるのか、その男が今、目の前に端座している。いささか滑稽ですらある。なかなか律義そうで、畏まっている。
「して、このたびの御出ましは何か……」
「いえ、なにの狙いもございません、ただ気まぐれの道中と申すもので……」
「ならば、拙宅で気楽に御逗留くだされ。離れをお使いください」
蘭斎は手元の鈴を振った。鈴の音に誘われるようにして一人の女が姿を見せた。
「おそい、おそいではないか。茶というものはな、ころあいが大切じゃぞ――それはそうと御紹介申しましょう、これが私の娘で……いささか詩文にも心を寄せておるようで……」蘭斎は機嫌がいい。
「それはそれは……」山陽は蘭斎の後に端座して手をついている娘に目を遣った。やおら視線が合った刹那、山陽は目がくらむように全身に熱いものが沸るのを覚えた。
〈ウム……〉山陽は言葉にもならないでいた。
「折角の機会じゃ、すこし詩文を見て戴くとよいな」蘭斎は座をとりもって言う。
「是非ともお見せください。多少はお役にも立ちましょう、それに私の無聊も慰むというもので……」
「よろしくお願いいたします」顔を幾分あからめて言う。
娘は多保と言う。父の蘭斎とはちがって山陽についての噂などは毫も知りはしない。目の前の詩人にただもう身を縮めている。

〈ああ、うれしい、わたしの詩が見て戴ける、京の偉いお方に――〉多保は胸がわくわくする。

自分の部屋へ戻ってからも多保は興奮気味であった。なんの変貌も見せぬ田舎での生活に一筋の光が射したように妙に眩しいのであった。斯んな思いになるとは考えてもみなかったことである。妙に面映ゆい、不思議ですらある。

〈いったい、どうなったのかしら……おかしなこと――〉多保は自分の心を掴みかねるのである。ともあれ、詩を見せねばならぬ、うれしいのである。それでいて妙に怖ろしいのである。

いままでに詠んだ詩数篇を机の上に並べ置いて多保は凝と目を細めている。もうこれ以上、推敲の仕様はない。自信がある。過去の作品というものを見ては多保は常にすばらしいなと悦に入ってしまう。よくもあのような詩が詠めたものと自讃するのであった。それだけに新らしく詩を詠むことが怖ろしくもあった。

いま、多保はまんじりともせずに机に向っている。が、一向に詩想がまとまりはしないで、ただ筆を手にしたままである。

〈こんなことでは……あの方にお見せする詩が……〉多保は苛立って来ては筆の軸を噛んでいる。竹軸の歯ざわりが妙に冷たい。

山陽は旅の疲れのこころよさに浸りながら、先刻の多保の姿態を思いうかべていた。

〈よう似ている、あの女に――〉山陽の頭中に平田玉蘊の姿が甦って来た。玉蘊なればこそ恋慕の情を燃した。そしていま、多保なればこそ恋ごころを覚える。理屈ではない、一目惚れなのであった。目には見えぬ糸が此の世の男と女とを惹き寄せる、その糸のもつれに身を委ねて人は葛藤する。山陽の心には蟠りがない。過ぎし日に未練がましさを振りつけはしない。常に明日がある、ゆくてへと向うのである。

山陽は筆を取り上げた。
〈……淡粧素服――いや、これはあの折の詩句ではないか……斯様の句が筆を馳せしめるとは――〉我ながら不思議でもあり、まさしく我が本心なるぞと自らの心に偽りなきを喜んでいる。
〈つまりは、この山陽、多保どのに一目惚れしてしもうたのだな――〉ひとり北叟笑むのである。
翌日からの山陽は、まるで人が変ったように快活であり饒舌となった。天下の奇男児の気概である、いざ往かん、ふとした契機が山陽を山陽たらしめてくる。生きる道標が立てられた。凝としてはおれぬ。
「この句はいけませんな、韻にこだわって艶麗さを損ってしまいましたぞ」手にとるごとく山陽は多保の詩に筆を入れる。
「ハイ――」食い入るように多保は山陽の筆尖に見とれている。それでいて妙にはしゃいでいる。
〈元瑞どのに手紙を出さねばならぬ、先達っての依頼の件、その要なしとな。もう既にして妻となるべき人を見つけました故にとな〉朱を入れる筆に力が籠って字が躍る。実のところ、京で山陽は元瑞に稼の世話を頼んでいたのである。多勢の学者連中を敵としての日々は淋しくもあったし、廓に遊んだとても空しさが宿る、せめて妻女が我が居に座していてくれればと思いもしたのである。
滞在数日にして山陽は蘭斎に思いきって切り出した。
「単刀直入に申します。御子女多保どのを妻として戴きとうございます」
「……」あまりにも唐突のことで蘭斎は面喰って言葉が出ては来ないでいる。
〈慮外というものじゃ、よう身のほどを考えてから申すことよのう……〉蘭斎は山陽の過去を耳にしているだけに娘をやる意志はさらさら無い。考えてもみなかったことである。いや、考えられぬことであった。それにしても山陽なる男が蘭斎には未だ掴めていない。

「折角なれど、この儀は……」蘭斎はもの静かな口調で撥付けた。
「なにとぞ御考慮のほどを……」
「いや、然様申されても江馬家としては御断り申すより致し方がないので……御賢察願います」
山陽は黙って部屋へ引きさがるしかなかった。
〈諦らめはせぬぞ、どうあっても蘭斎どのに承知して戴かねば……〉この折、山陽の頭にフッと元瑞の姿が浮かんだ。同じ蘭医であるからには万事うまくゆくと考えたのであった。暫時、この話は伏せて置こう。妙な横槍が入ってはまずいと思う。多保にも言うまいと山陽は考えていた。
「多保どの、あなたに号を贈らせて貰いますぞ、お受け下さるでしょうな」
「光栄でございますわ、山陽さまに号を頂戴できますとは……それで、その号は――」
「細香、細香という名です。考えに考えての挙句で、これ以上のものなしと――」筆をとって山陽は細香と書いて手渡した。
「わたしが細香、細香ですのね、うれしうございます」
斯くして師と弟子との門出は為され、しかもそれは生涯を通じての相聞の賦への序章となったのである。めぐり逢いとは喜ばしくもあり哀しいものである。蘭斎に認めては貰えず傷心の山陽は京への草鞋を履く。
再び京での生活である。相変らず意気衝天の山陽ではあったが、皮衣のうちの心気は凋残の花ごころである。口惜しい、無念である、あの折の江馬蘭斎の言葉が山陽の脳裏に焼きついて片時も離れはしない。恋しい、慕わしい、細香の姿を思うと書を手にする心もうつろである。机に向かっていても、いつのまにか筆は細香と走り書き、果ては頼細香と書きつけてしまう。満たされぬ佗しさが山陽の心に堰きって襲いかかってくる。如何ともしがたい、それ故に京の学者への挑戦状となっ

ていきりたつ。
「どうかなされたかな、近頃の山陽どのは荒んでおいでじゃ。ようわかる、書ひとつにしてからが筆勢の乱れ、不可んな。旅というものは人間をひとまわり大きうするものだというに――」
「然様言われても、こればかりは如何んとも為し難うて――」
元瑞は山陽の身を案じていた。案ずればこそ江馬蘭斎に書を送って高配の儀を懇望したのであった。矢張り返書は意に添いがたしであった。元瑞には蘭斎の気持もよくわかる。いざ娘婿として山陽なる男を選ぶともなれば元瑞自身いさゝか逡巡を覚えてくる。それだけにまた山陽のため一肌ぬいでやりたい。
〈正直に言って此の男、このままでは何をしでかすやらわからん。妙に胸さわぎがする……〉元瑞はハタと考えこんでしまう。
「なんとかしてやらねばいかん、なんとかな」元瑞はひとり呟いている。
山陽と別れて邸に戻ると、過般、話のあった行儀見習の女が伴われて来ていた。例の近江から出て来た梨枝という娘である。このところ小石家では人手不足である、と言うよりは蘭医としての小石家に馴染めぬ者が多いということであった。きびしい家であった。いや、きびしくなければならぬ医家の宿命とでもいうべきものであった。いやしくも人の命を預る天職である、その姿勢は日常の些細な挙動ひとつにも要求される。家のなかに在っては厳しさが張りつめる小石家である。茶碗ひとつ箸一本の扱いですら作法がある。足音にしてからが常に静かさを事としなければならぬ。小石家という名に惹かれての奉公など勤まる筈がない。そうした具合で、なかなか元瑞の気に入る娘は得難い。
〈しっかりしたいい娘だな〉一目みて元瑞は安心した。

その頃、大垣の地では多保すなわち細香はひとり物思いに耽っていた。いまの思いを詩にうたおうとはするのだが筆が動いてはくれない。

〈山陽さまが、わたしを――〉

父の蘭斎から縁談の申入れがあったことを聞かされたのは後日になってからである。それも辞退したと聞かされただけに細香はやりきれぬ気持である。山陽の詩才を高く評価している父も娘婿としては断々乎として拒絶であった。

「おまえをやるわけにはゆかぬ、誰がなんと言おうともな」

父の言葉は重い。それに逆らうなど考えられぬことである。ただ細香は黙って頭をうなだれているしかなかったのである。

父の拒絶にあってみて細香は改めて山陽への思慕の情を確かめることが出来た。逢いたい、お逢いしてのただ一念であった。日々の流れは深く思いを募らせる。

〈きっと……京へ上ってみよう、それくらいは父も許してくださろう〉細香は、いつの日か京へと秘かに心したのである。

大文字山の頂きは、まだら雪。謂うなれば枯山水のたたずまいであった。

〈世も太平、儂のこころも太平だな、その癖、妙に心ときめく、年甲斐もないと笑われるかも知れぬが……待つ身の辛さとは、うまく言っておるわい、まさに心もとなしだな……〉先刻来、山陽の心は妙に落着かなかった。

「山陽どの、いったい、貴殿どうなされたかな、じっくり腰を据えてお待ちなされよ。そのうち必ずや、お気に召す才女が参りましょうほどにな」山陽の焦燥の色を見てとってか元瑞は、いささか揶揄気味で言った。

「いや、何事も自然の時の舞。妙に気になることがありましてな、京の儒官たちの私を見る目つきが、どうも癪にさわります、そうなればそれで、この私めも対抗して喧嘩の一つでもしてやろうかと……」
「もっともなこと。だがな、人は人、我は我、それでよろしかろうが……。世の中とは然うしたものですわい、妬まれ憎悪される、そのことは、つまり貴殿の存在価値を認めている証拠ですぞ」
「……」山陽は心もうつろに、あらぬ方を見つづけている。
「それにしてもおそい。いったい、どうしたことやら？　ちと、使いの者を出してみましょう」元瑞は、つと座を立った。
　元瑞は、この日、山陽に見合いをさせる手筈を組んでいた。
〈あの折は全く唐突のことだった、この儂も面喰ってしもうたわい、あとで判明したのだが、あの大垣藩医江馬蘭斎の娘に一目惚れし一人合点して、妻は細香に決ったかのように思い込んでしもうて……この儂に縁談の世話は不要じゃとな。縁談を頼まれたのは儂だけではない、大坂の篠崎小竹どのもその一人。あの折、山陽の細香評は今でも覚えている、淡粧柔服、風韻清秀、才情掬すべきや――挙句は不憫じゃった、所詮結ばれぬ縁であったわ。それだけに今回の見合いを成功させてやりたいのじゃが……〉元瑞は、いらだちを覚えて玄関に立ちつくしていた。
「おそい、おそすぎる、どうしたことじゃ、折角の見合いにおくれるとは……」
　元瑞は京の商家の娘を見込んで、山陽の妻にしようと事を進めていた。山陽の注文は仲々難しい条件付き、賢明なる才女でなければならなかった。通り一遍の女では承知できぬと言うのである。漸くにして見付けた女性、それが未だ姿を見せないのである。元瑞の心は焦燥が憤怒の心に変貌しかけていた。

一方、山陽は元瑞邸の奥座敷に凝と目を閉じて坐ったままである。

「まことに粗茶でございますが……」

元瑞家の女中の声に、不図、我に戻った山陽は「いやはや恐縮……」と言いかけ、その女中の顔を見た。

「なにとぞ、ごゆるりとおくつろぎくださいますよう……」両の指先を揃えて畳につき、静かな物腰で言う。

「あなたは此家の御方かな？　初めて御目にかかるようだが……」

「ハ、ハイ、わたくしは小石家の召使いでございます、誠にふつつか者で、常々御迷惑ばかりおかけいたして居り恥しゅう身の置きどころもございません」

「お国はどちらじゃな？」

「近江の仁正寺でございます」

「近江とな、近江はよいところですぞ、歴史を顧みても近江は天下の中心。卓越した詩人墨客は、たんとおいでで」

「わたくし、むつかしいことは存じませぬが……わたくしの生れ在所は藩主さまの御城下。智閑入道さまとやらは秀れた歌人でいらっしゃったとお聞きいたしております」

「オオ、然様。新選菟玖波集で智閑入道の名は見た覚えがある、なんと申したか……木の葉散る浅芽が原に宿古りて……あとがどうも思い出せんのだが……」

「……露さえやらぬ老の松風、ではなかったかと……」

「よう覚えておいでだ、感心感心」

「お恥しゅうございます」女中は顔を赤らめて、しずしずと引き下っていった。

〈なんと物腰の優しい女だ、これでよい。儂の生涯の伴侶は決ったぞ〉山陽はひとり悦に入っている。

悄然とした恰好で戻って坐に着いた元瑞に対坐する山陽は滅法明るい表情であった。

「申しわけない、未だ見合いの相手が参らぬのでな……」

「なんの、なんの、然様の御懸念御無用です。この山陽、ただいま、しかと妻を決めました、私の良き伴侶となってくれるは必定と存じます」

「……」

「いぶかしゅうお思いも御尤ものこと。此の御邸の、それ、先刻、お茶を持って来てくだされた御女中、名は何と申しますか？」

「うん、あれは梨枝という女じゃが……それが、何か不始末でもしでかしましたか？　なにぶん、奥深い近江の田舎で育った女で……」

「いや、然様ではありません、そ、その御女中、欲しいのです、貰いたいのです、私の妻に」

「……」元瑞は唖然として口をつむんでしまった。

〈また、例の病気が始ったのではないのかな？〉元瑞の心中穏かではない。と言うのも、山陽の過去を知る元瑞にしてみれば当然のこと。なかなかどうしても一筋縄ではゆかぬ山陽の行跡数々であった。

〈所詮、此の儂とは生き方が違っておる、儂は杉田玄白どの・大槻玄沢どの、それに宇田川玄随どのから厳しう医の道を教えて貰うた、ただ医の道一筋じゃったに……成程、山陽は確かに才がある、たしかに十四の折とか申し居ったな、十有春秋　逝く者は已に水のごとし　天地始終無く人生死あり　安んぞ古人に類して千載青史に列するを得む――とか詠んでおるが、医者としての儂の目

から見ればどうも不可ん。不図、常人とは思えぬ節が感じられてならん。先の結婚にしてからが然うじゃった、藩医の御園道英どのの息女淳どのを迎えながら、広島でのあの放蕩ぶり、それでも飽きたりずか他の女に子供を産ませている、それにしても、あの岡田嘉祐という御仁もどんなものかのう……その子の処置を山陽にたのまれて取りはからってござるわ……哀れなのは妻女淳どのじゃ、泣きじゃくっておいでだったとやら……妻としては然あろう。ところが、どうじゃったか、山陽は翌年には家人の目を盗んで逐電しよった、この京の福井榕亭どのの家へ転りこんで来よったことがあったな……そして連れ戻されて座敷牢入りじゃ。いやはや、とかく厄介な才人じゃわい……〉当惑の情抑えがたい癖に元瑞は妙に山陽の人なつこさに無性に心惹かれるのである。

「元瑞どの、どんなものでしょうか？　その梨枝とやら申される御女中、私のところへ来てくれましょうか？」

「そりゃ、本人に聞いてみねば、なんとも申されぬがな……それにしても、あまりにも唐突なことで、いささか面喰っとるところじゃがな……」元瑞は苦笑する。

「よき御女中ですなァ……ほとほと感心、いや、一目惚れいたしました、この山陽」

「あの女はな、なかなか良うできた人間、しっかりしておる、情も深いし、ともかく気立ての良い女じゃ。よう働いてくれおる。お蔭で此の小石家も大助かりというものよ」

「……なんとか、御手をお貸し下さい」

「いや、それよりもな、約束の見合いの女の方はどうするつもりじゃな？　儂もホトホト困るわい」

「……約束の刻限に来ないというのは先方の身勝手、いや、先方に見合いの意志なしと判じてよろしいのではありませぬか。よしんば今日、此の場で見合いしたとて、この山陽の気持は毫も動きは致しませぬ。梨枝とやら申す御女中に決ってしまったのです」

〈ハテサテ、どうしたものやら？　山陽の言うのも尤もなこと。と言うて先方の親御に対しても妙に気まずう思えるしのう……〉

元瑞は困りはててい た。

「善は急げと申します。なにとぞ、早急にお取りはからい御願い致します」山陽は、矢鱈とはやりたって言う。

「なにかお困りになることでもあるのですか？」

「いや、別に……と言うてもな、そなたの御両親が承知されるかどうか、その事を元瑞は気にしておるのですぞ。なんというても、そなたの御父上は頼春水先生、それに、そなたの叔父上の越智高州どのは殊更目をむかれるであろうなァ……」

「いや、然様のこと、一向にお気になさらないで下さい。越智の叔父御は形式主義一点張りの頑固者、相手にする方がおかしいのです。それに、両親も屹度、私の気持、わかってくれると信じています故に……」

「然様申さるるからには、二心ありますまいな、念を押しておきますぞ」

「神明にかけてもと、お誓い申します、一日も早う、話を進めてください」

「おわかり申した、万事、この元瑞に御任せあれ」

〈…とは申せ、春水どのには何と申さるるや？　然うじゃ、梨枝を儂の養女にすればよい、さすれば何の文句も出はすまい、我ながら妙案が浮んだものじゃ……〉

小石元瑞は、早急に飛脚を走らせた。目指すは近江国仁正寺、たばこ商の家であった。

下女奉公の身でございますのに過分の思しめしにあずかり、ただただ恐縮いたし喜びおりますふつつかものの娘ではございますがよろしくお願い申しあげます――との返信を手にして、元瑞は

梨枝を小石家の養女とした。一旦、養女としてしまうと、妙に梨枝を手放すのが惜しく思われてならない。全く利発で才量もあり、田舎育ちとは思われぬくらいの礼節もわきまえた娘。

〈惜しい、いつまでも手元に置いておきたいが……〉元瑞は、時として、やるせないまでの淋しさを覚えるのである。

〈まァ、春水どのには後日、お知らせするとして、とにかく、山陽と梨枝を娶わしてやることじゃな。万事、時の流れに逆らえぬものよ、この事は医者としての儂が一番よう知っとるわい〉

珍しく北條霞亭から手紙が来た。目を馳せているうち、山陽は思わず吹き出した。自分の逃げ出した黄葉夕陽舎の後釜に霞亭がなってしまっている。

〈まんまと茶山先生の術中に陥ったようだわい……茶山先生の魂胆、よう見え透いている、その罠にかかって霞亭どのはズルズル引き摺りこまれてゆく、もはや逃げ出すこと叶わずだな。あの御仁、どうも不可んな、のらりくらりで己れを強う打ち出せないでおる。と言うて茶山先生も安心はなるまいぞ、常に逃げ出すことをのみ考えている霞亭どのが後釜ではな。いやはや、人の世とはおかしなものだわい、本来なれば此の山陽が後釜になっていたものを……霞亭どの、御苦労じゃな……〉過ぐる日、霞亭と語り明かした折のことがなつかしく甦って来る。いつともなく山陽は神辺で過した日々を思い返していた。

〈……読を児童に授けて生字に遇い　行きて籬落に沿いて狂花を見る——退屈しのぎに村の童に教えてやったものよ……それでいて熟知せぬ字にお目にかかって狼狽をしたこともあったな……〉山陽の瞼に黄葉夕陽舎での明け暮れが明滅し、のどけさのなかで呻吟しつづけた我が姿が浮かび上ってくる。

神辺での昔日とはちがって、いまの山陽にはすべてが長閑である。壺底から這い上らねばと喘ぐ

焦燥がない。満ち足りている。吐くは嘆息ではなく祝歌(ほぎうた)である。己れの道を歩んでいる。
「山陽どの、近頃は随分と変られましたな、めっきり学問のみに、学問のみにですぞ、御精が出るようで……」
「揶揄(やゆ)なされては困ります、元来、私の本性は至って実直な方でして……」山陽は真顔で答える。
「許して下され。どうも口の悪いのが癖でしてな。患者相手にしておると、医者の言うことにも耳かさず酒を呑み暴れ廻っている輩(やから)も多いので、つい口が悪うなってしもうてな……」
「ところで、梨枝どのとは、うまくいっているようですな、結構結構。うんと可愛がってやってくださるのですぞ、なにしろ、私の大事な娘なのですから——」
「先日も詩を詠んだのです。ちょっと見てください」山陽は机の上から一篇の詩を元瑞の前に差し出した。
〈朝雲一小片　其痴愁笑うべし——どこまで、のろけるつもりなのじゃ……朝雲といえば蘇東坡(そとうば)の愛人だった筈、いやはや……楚腰纖細　掌中軽し——とはな……〉元瑞は凝(じっ)と山陽の詩を見つづけている。
「いかがです、私の詩？」
「……」
「杜牧、御存知の詩人にあやかりまして僭越ながらも詠んでみたのですが……」
「まるで、のろけられているようですわい、参りましたよ、この元瑞も——」
「いや、正直申して我ながら不思議なのです、梨枝を迎えてからというもの、一向に祇園の方には足が向かないのです。先日も悪友が申すには、お前は妻に足をくくられてしもうたな、と……」
「大いに結構。それでよいのですぞ。この上は、ひたすら学問の御精進を、学問のな」

「大事なことを忘れていました、梨枝という名を改めたのです。梨影というのです。梨影――ですぞ」

「ウム、一字改めれば……確かにちがってくる、これはいい。唐風の女人像が浮かび上ってくる」元瑞は、ちらと梨影に目くばせして、山陽の家を立ち去ってゆく。

ゴロリと横になると山陽は天井を見つめたままの大の字型の恰好で思いに耽りつづけていた。

〈歳月とは怖ろしいものであるなァ……己れが己れを変えるのか、それとも世が人を変貌させるというのか……梨影なしで生きてゆけぬ。夢みた妻は、この儂が竹を写生していると儂の傍で妻は蘭の花を描きつづけている、そんな風雅な才女をこそ妻にと思いつづけては来たのだが……梨影にはそれはない、その癖、梨影に無性に心惹かれる自分が、我ながら解しかねるというもの……この京の、全く儂を敵視し、ないがしろにする輩のなかで、心やさしく素直に此の儂を抱いてくれるからかも知れんな……ふたりして居るときだけが心安らぐ、ありがたいことよ……口さがない輩は、この儂を罵りおる、山陽めは一生妻を娶らずと公言しておきながら妻帯しおった、とな。尤も、あれは菅茶山先生から妻をと勧められたのだったが、それ以上に、福山藩などに召しかかえられることが嫌でたまらなかった、だからこそ、あのような出まかせを言うて逃げたまでじゃに……儂は野人でいたい、野人なればこそ自由にものが言える、それを何だというのじゃい、京の儒官たちは偏屈者ばかしの癖して……儂の一番困るのは、香川景樹どのの一門のなかで、山陽めは放蕩者よと言い立ておること、なにしろ景樹どのは儂の母者の歌の先生なんじゃからなァ……イヤハヤ困ったものよのう、とかく世の中はな――〉

「梨枝は梨影になりおった、儂の梨影になりおった」声ともならず山陽はひとり静かに呟くのであった。

この年、山陽三十五歳、梨影十八歳であった。

その四　女ごころ

「梨影よ、実はな、大垣から江馬蘭斎どのの御息女細香どのが京へ来られるんでな。儂は案内して進ぜねばならんことになってしもうた、今日は戻らぬが、留守の方、しかと頼みましたぞ」山陽は、妙に面はゆげに梨影に向って言う。

「ハ、ハイ……どうぞ、ごゆるりと御案内してあげてくださいませ。わざわざの御越しなのですもの……」

わざわざの御越しという梨影の言葉に、一瞬、山陽はギクリとたじろぎを覚えた。が、素早くも表情を繕い、微かな笑みすら浮かべる。

「ウン、そうなんじゃ、梨影を置いてゆくのは辛いんだがなァ……」

「いえいえ、わたしのような田舎者の出る幕ではございません、わたしは、この私は、お留守番で結構でございます、御安心なされませ」

「すまんなァ、悪いとは思うが仕方がないんだよ」

山陽は這這の体で我が家をとび出した。

正直のところ、細香の京入りは山陽自身が極力勧めたからに他ならなかったのである。桜が咲くようになったら是非とも京へお出で願いたい、嵐山や御室など素晴らしき処に御案内します、どうしても貴女のことが忘れられませぬので——と山陽が手紙を出したからこそ今回、細香が大垣から

上京して来たのであった。
父の蘭斎が山陽の求婚を拒んだことを知ってからというもの、細香はいやまして山陽への恋慕の情をかきたてられた。お逢いしたいの一念であった。山陽から誘いの手紙を受けとると、細香はもう我慢ならなかった。
「お父上さま、わたしを京へ行かせてくださいませ。多保としてではなく細香としてお願い申しあげます」
「ならぬ、それはならぬぞ。なにもわざわざ京へ参る要はあるまい」
「この多保を哀れとお思いくださいませぬのか……このまま埋れとうはございません、わたしに精進させてくださいませ、詩も巧みになりとうございます、それに書の道もきわめとうございます……」
「……」蘭斎には娘が山陽に会いに行きたがっているということが察せられるだけに言葉が出ない。
「娘を山陽さまの弟子にと最初に仰言られたではありませんか。お父上さまと山陽さまとのお約束でございました……多保としてではなく弟子の細香が師にお目にかかり、御教え戴くのです。お許しください、京へ上らせてくださいませ、たってのお願いでございます」
「……才を磨きたいというのじゃな……他意があってはならぬぞ」男の約束と切り口上で迫られては蘭斎も娘の上京を承知するしかない。渋々ながらも、そこはそれ娘かわいさのあまり承諾を与えたのであった。
〈あの男、なかなかの詩才がある〉蘭斎は複雑な心境であった。
父の重い心をあとにして細香は軽やかなおもいで上京して来たのである。ながらく抑えていたお

もいが一挙に迸り、矢鱈と頬は紅潮する。春の蝶のこころであった。そよぐ風に細香のこころは落着きはしないのである。京に足を印して細香は新しい別天地が開かれたようなおもいであった。

梨影に対して、いささか間が悪いと感じて山陽は友達の武元登々庵を誘って細香と行を同じくさせた。

「此処が嵐山、見事な眺望でしょうが……」

「ほんとに、すてきなところですのね、斯うして、再び御目にかかれるなどとは思ってもみませんしたわ……」

「いやいや、此の世とは、然うしたもの。いや、前世からの約束事なんですよ、めぐりあえるという……」

「あの橋は？」

「あれは月を渡る橋、渡月橋と申しましてな、今宵、せせらぎの音、一段と高まっておりますぞ」

「ひこ星と織り姫とにあやかったようですわ……契りけむ昔の今日のゆかしさにあまの川浪うち出でつるかな……」

細香は菅原孝標のむすめの詠んだ歌が今の自分の気持ちのように思うのであった。勿論それは物語の世界に心惹かれ、長恨歌を物語風に書いたものが見たくて切り出したものではあったが、細香は今の気持ちを山陽に打ちあける恰好の歌と思う。

〈たちいづる天の川辺のゆかしさにつねはゆゆしきことも忘れぬ――返歌のすばらしいこと……不吉なことは一切忘れて、あなたのお望みどおりにしてさしあげましょう……山陽さま、お汲みとりになってくださいませ……〉うっとりと細香は頬を赤らめる。

「燭台の灯明滅して、あなたと斯うして再びお逢いできるとは、全く以て幸せと申すもの……山陽

は、まさに天下の幸せ者」
「……わたくしとて同じこと……」
此処、旗亭の一夜は、せせらぎの響きに沈み、山陽と細香とは深々と夜気に包まれていた。
同行の登々庵は気をきかし、いつしか隣室へと姿を消していた。
〈もう六年も前になるわい、脱藩して連れ戻された山陽どのが座敷牢から出されて、あの折じゃった、あの日の舟遊び……平田玉蘊を一目見るや、斯う詠みおったわい、淡粧素服、風神超凡、とな。玉蘊に一目惚れして、縁談をまとめろと頼まれたものの、うまくゆきはせなんだ……いや、あれは玉蘊の方が一目惚れして儂に頼んだ話じゃったわい……思うてみれば山陽好みの女じゃったな……〉こころよい酔いに任せて登々庵は世話っ子山陽のことを思い返しながら眠りに沈んでゆく。
山陽は筆を走らせていた。その筆先に細香の目差しがくい入るように注がれている。
山色稍瞑花尚明　綺羅分路各歸城
詩人故擬落人後　呼燭渓亭聴水聲
「いかがですかな、よう見てくだされ」
「……山色ややくらくして花なお明るし――」細香はそっと口遊んでいた。
〈故らに人後に落つるに擬し――山陽さまは、わざと皆を帰らせて、そして……〉細香の胸は熱くなるのであった。
師と弟子との詩についての語らいは夜の更くるをも知らず微かな燭台の灯に揺れつづけていた。
詩は、一字直すことに依って別天地となる。心は無言のうちに桃源の境を醸しだす。細香の耳には静かな美しい水の響きが満ち足りたおもいで迫って来る。いま京に居る、山陽さまの傍に居る、ただそれだけで細香には無限の天地が勃として湧き出したかのようである。京入りをしたことが斯

程までに心に安らぎをもたらすものとは考えてもみなかった細香であった。それだけに今の充実感はなにものにも変えがたい。

翌朝、山陽は細香を連れて我家へ戻った。

「お帰りなさいませ」

「この御方が大垣の細香どの」

「ハ、ハイ、はじめて御目にかかります、わたくし、山陽の妻梨影と申すふつつかものでございます、よろしくお願い申しあげます」両手をついて梨影は項垂れたままでいる。

「……」一瞬、細香は色を失い、言葉が声とはならなかった。

「サ、サ、早う、お上りください、遠慮は御無用、我家同然と思うてな」山陽は細香をせきたてた。

それでも、細香はつくねんとして、まるで木偶のように無表情に突っ立ったままである。

〈山陽さまに妻女がおありとは……迂闊なこと、どうして気付かなかったのだろう……いいえ、この方が、ほんとに妻女なのかしら？　この方に先を越されたとは、ほんとに口惜しい、なんとも無念なこと……それにしても、どうして山陽さまは、この事を仰言らなかったのかしら……〉細香は、あまりのことに目がくらみ、我が身を支えるのが精一杯であった。

「御遠慮なさらず、お上り下さいませ、むさ苦しいところでございますが……」梨影は細香の手を、そっと執った。

「ハイ、お言葉に甘えて……」と細香は言いはしたが、その手は冷たく梨影の手を払い除けていたのである。

端座しても細香の心は無性に煮えくり返っていた。

「細香どの、まァ、ごゆるりとしてください。昨夜の嵐山の風情、見事でしたな。一つ、詩でもつくることにしましょうかな」
「梨影よ、硯と筆、それに紙を用意してくれるのだぞ」
「すぐに用意いたしますゆえ……」
〈いま、目の前に坐っておいでなさるのが細香さまとやら……わたしとは違って学問もおありの御方、それに較べて、わたしは全くの無学……若しやすると、この梨影は、梨影は、見棄てられるのでは……〉重い心が鬱として梨影の心をかきたててくる。
山陽の傍で墨をすりながら、あらぬ方を見、あれやこれやと思いめぐらしていた梨影は、思わず指を滑らし墨を畳に落してしまっていた。
「梨影さまとやら、畳が汚れましてよ」
細香の言葉は妙に優しげであった。
「粗相いたしまして……」梨影は泣きたかった。いや、目の前の女に墨を投げつけてやりたくさえ思う。
「ちょっと拝借」筆を手にして細香は流麗に筆を走らせていた。
「ホウ、もう、出来ましたかな。さすがは細香どのだけのことはありますな」
この山陽の言葉が、梨影の心には錐を突きたてられたように痛く感じられた。
「御覧になって戴けますかしら……ほんの即興で……」細香は淡淡として山陽に向って言う。
「ウム……雨止み春園、しずく未だ乾かず——翠炉烟冷えて夜気残る……烟冷えて、とな」くちずさみながら山陽は考えこんでいた。
〈ひょっとすると、梨影のことで、細香どの御冠なのかな……〉

「最後まで御覧になってくださいませ」
「暫雲月をさえぎり、花梢暗く　燭をかりて簷頭に自在に見る――お見事、お見事です」山陽は、ハタと膝をのり出して賞讃していた。
「どのあたりが一番よろしゅうございましょうかしら……」
「一篇の詩悉く。この詩は、今日の結構な戴きもの、山陽、うれしく拝受いたしますぞ」
〈山陽さまは、お気付きになっておいでではないらしい、わたくしには仰言らずに梨影さまを娶られた癖に……梨影さまとやらは私をさえぎった雲だと詠んでいるのに……だのに、あのように嬉々としておいでの山陽さまを見ていると妙に焦立ってきてしまって……〉細香は佗しい気持である。
〈山陽さまには、わたしの気持、おわかりになって戴けないのかしら……昨年の秋、初めてお目にかかり、あれほどまでにお慕い申していたのに……山陽さまだって、身を以て漢詩を御導き申しまするぞと仰言られた癖に……〉
台所に戻った梨影は梨影なりに心乱しつづけていた。
〈細香さまのお鼻が高過ぎる、これみよがしに、わたしに当てつけておいでのよう……いいえ、人を恨んではいけない、そんなことより、わたしも細香さまに負けぬくらいの学問を此の身につけなければ……なんとしても……〉涙をこらえながら梨影はキリと歯を食いしばっていた。
〈細香さまは、夫の学問を通じてのお知合い、わたしは山陽どのの妻、これを忘れてはいけないのに……妙な勘ぐりばかりしてしまって……〉梨影は思い直してみる。
不図、近江の綿向山のみどり、細々と長く続いた故郷の道が、一木一草の香りが、なつかしく甦って来、ほんまに故郷はよいものやなァ、と梨影は無性に望郷の念に駆り立てられた。
〈女というものはな、優しさがいのちや、やさしさを失うたら女ではない。道ばたの石ころとおん

なじや、血も情も通うとらんのや――〉耳にたこができるほどに聞かされた母親の口癖を、いま梨影は一粒一粒嚙みしめるように呟いてみるのである。

猫が嫁入りすりゃ　いたちがなこんど　二十日ねずみが五升樽さげて　裏の細道しょろしょろしょろ――子守り唄が聞えて梨影は幼ない日々の回想にふくよかに身を埋めつくしている。ひとときき、梨影のこころはのどかであった。

「梨影さま、それでは、わたくし、これで失礼いたしますので……」

細香の声で、ハッと我に戻って梨影は思わず襟元を正して玄関へ駆けつけた。

「梨影、なにを呆然としているんだ、いつもの梨影ではないみたいぞ」と言いながら山陽は細香を見送りに出る。

「……」ただ黙って深々と頭をさげて梨影は見送っていた。

江馬家の屋敷は京にも別邸を構えていたので、山陽が送ってゆくのである。

「山陽さま、どうして梨影さまのこと、お隠しになっておいでしたの？」

「別に隠すなどとは……とんでもない言いがかりと申すもの。……それ、それは仔細あっての事、そなたも良う御存知の筈」

「……と申されますと？……矢張り、わたくしの父のことなのですね」

「御父上のお許しがないからには、この山陽、いかんともしがたうて――お分りでしょうがな」

「父は山陽さまの学才を大層賞讃いたして居ります、けれど……」

「……けれど、とは？」

「……」

「いや、細香どのにお尋ねする方が無態というもの、この山陽ごとき放蕩者には娘はやれぬ、と」

「いえ、父は大垣藩医、わたくしを大垣に置いておきたかったまでのことです」
「……」
「もう、そんなお話、止しましょう、それより、梨影さまとやらとは仲良くいっていらっしゃいますの？」
「世間では、そう申し居りますがな、イヤハヤ、困った質問、そう苛(いじ)めるものではありませんぞ」
「そう仰言るところを見ると、およろしいようですのね、わたくし、癪(しゃく)にさわりましてよ。山陽さまは、わたくしのこと、なんと思し召してか、わかりかねます」
「そなたの御上京を待ちわびる心、満懐の喜気、眠りつきがたき思いでしたよ」
「ほんとうですの？」
「なんで嘘偽りなど申しましょうぞ」
「それなら先ずは一安心ですわ」
山陽と細香とのふたりが江馬別邸へと歩みつづけている折しも、梨影は、唯ひとり台所に坐したまま、あらたな覚悟をきめていたのである。
〈わたしの道は唯一つ、夫に仕えることだけ。そのために、わたしの身が如何様になろうとも、八ツ裂きされようとて何の悔もしないこと、ただ、まごころ一筋に夫に仕える山陽の妻梨影であろう、そうならねば……なんとしてでも……〉
〈細香さまとて同じ人間、この梨影とて必死に精進すれば、いつの日かは屹度(きっと)、細香さまに負けぬ才芸を身につけることもできるというもの……〉梨影は、フウと大きく息を吐いた。
昼餉(ひるげ)まえ、いささか恰好(かっこう)つけて山陽が戻って来た。
「ハイハイ、ただいま戻りましたぞ」

「それはそれは早うお戻りで……」思わず梨影はクスリと笑ってしまう。
「わたし、決意したのです」
「……」山陽は一瞬顔を硬ばらせた。
〈細香の事だな、これは形勢不利じゃわい……〉山陽は矢継早に口実いくつかを用意したのである。
「学問の手ほどきを教えていただこうと決意したのです、真似事でもしてみようかと……わたしごときものでも叶いましょうか？」
「なんの、なんの、叶わいでか。殊勝な心掛け、この山陽にして此の妻ありじゃ」山陽は緊張がほぐれて満悦の態で言った。
「さて、何から手始めにするかな。どれどれ……」
「ほんの真似事なのです、やさしいお話から始めてくださいませ、でないと、わたし……」
「わかった、わかった。……これはどうじゃな、儂が心惹かれた女の伝記をまとめたものじゃよ」机の上から幾枚かの草稿を取り上げて梨影に手渡した。
「むつかしい漢字ばかりで……」梨影は顔を赤らめて項垂れている。
「いや、初めのうちはな、儂が読んであげよう。そのうちに読めるようになる、心配しなくともよい」
「さァ、講義を始めるぞ。和文調で講じて進ぜる」山陽の顔は厳しくなった。
「京の東山は最もすばらしき地、花の季毎に綺羅雑遝、五彩のいろどりで人の群れ、歌や鳴物大騒ぎ、耳飾り玉落ちる、かんざし忘れる、細道からもよく見える。葛原は歌吹之海、歌によし笛もよき地よ。わしは慈鎮の真葛原に風騒ぐの歌を口遊み今昔の感にたえぬものがある。また、どうも解

せぬは、すばらしさを集めたところに、才色全くなく、いたずらに化粧女が列をなし、衣香扇影影與霞彩相乱而已、扇子ゆらりと化粧の香り。わしは老人に聞いたことがあるが、葛原に芸者屋舞台が道をはさんで並ぶに至ったは四・五十年前のこと、斯んなまでとは思わなんだ。宝永年間に、お穀という女が茶店を祇園の表南側に出しておった。彼女、和歌をよくし、ものずきが歌をまとめて穀葉集と名付けた。お穀に百合なる娘がおり、この二人とも秀れた才の持主、その名は公卿にも知られ、冷泉黄門はとりわけ彼女を目にかけ、お召しになられたので、百合のこと良う知っておいでじゃ、と。」得得と山陽は語りつづけた。

「この調子なればよいじゃろ」

「ハイ、ようわかります」梨影は山陽の口元を凝とみつめている。

「では続けるぞ。百合は江戸とも言うが何処の人かよくはわからぬ。たいへん賢く音楽・裁縫手にとるごとき態。母親お穀に似て歌よむこと大好き。毎日あかい襟して、お客に茶だし、暇をみては筆覩離さず花であれ鳥であれ思うがままにありのまんまを。天姿娟秀潔白淡粧常服楚楚動人、人の心をとらえ皆の足をとめてしまう。京の金持息子は心を寄せる。惚れた若者は白粉手渡し後追いまわして気をそそるが、彼女てんで気にもとめはせぬ。百合は前から徳山さんと馴染んでいる。この人、幕府の武士ですてきな御仁。ある事件のせいで東ほとりに落ちぶれ其の日の飯にも事欠く始末。彼女、為之傾竭心力因得不乏、献身の御世話ぶり、斯くして二人の仲に女の子は誕生、情好益篤。たまたま徳山さんの宗家で世継ぎが絶えて一族相談、百合の御主人に白羽の矢。早速使者がやって来た。『それがしは百合とともに帰国するぞよ』『いえ、なりませぬ。まとわりついて御一緒十年、未練がましい別れ方は困るのです。あなたは晴れての御帰国、女をお連れになっては人目が……』『そなたと一緒じゃ。それがし流れついての此の地で野垂れ死もせず今日あるは、すべて

百合よ、そなたの御蔭。栄達の道がひらけたからとて糟糠の妻を棄てるなど到底できぬぞ』『過分に可愛がっていただいた身、どうして御同道嫌でございましょうか。御言葉に背きますわけは、あなたは御本家をお継ぎになり御先祖さまのみたまやをお祀りなさらねばなりませぬ。よき奥方様をおめとりください。路傍花柳何堪攀折、わたしごときものは取るにも足らぬ女。わたしがまとわりつくは、あなたの恥のみならず御先祖さまにも申しわけありませぬ。わたし、不躾の身、びくびくです、憐れんで側室にされたら風波が立ちます、あなたに御迷惑、それを心配するのです。わたし日夜、考えぬいたのです。一日之訣離所以十年之恩情、いさぎよくお別れすることが御恩返しと。あなたは大切な御方、さようなら、わたし今から此の世のものではなくなります。どうかわたしのこと二度とお思いくださいますな』『無理にとは申すまい、が、女の子だけは連れてゆきたい』『あなたはお若いのです、これから先、子供はつくれます。わたしは二度と男を近づけませぬ。ただひとり、この子を光ともなして、あなたを見る思いで過せばたえられましょう、この娘ある限り――』徳山さんは帰国に踏みきった。彼女、いやまして身を清くして娘の養育に専念する。さびしき思いで母娘は生き抜き、娘成長してはなかなかの才女ぶり。この娘お町に百合は口癖のごと諭した――おまえの父上は武士。女の身であることを大切にしなされ、女からとて軽う考えてはいけませぬ。わが娘によき婿をと思うのだが、これはと思う男が見付からない。ちょうど池先生が葛原に住んでいたが、この人、書や画を売っての生活貧しくて世間の輩に馬鹿にされている。百合は此の人物に心寄せ、娘お町を嫁にした。お町は夫に教わって絵の勉強、夫婦ともども明け暮れ紙をひろげ墨をなめ、琴つまびいて酒を酌み炊事の道具は塵だらけ、といった安らかな日々。これ見て百合は大喜び、『わたしとはちがう、これでよかった、よかったわ』ほどなく百合は病死した。」フウと山陽は息を吐く。いやましての語り口調は淀みなく尽くることを知らないでいる。

「数十年のちのこと、池先生を尋ねて一人の武士が関東からやって来たが先生あいにくと留守、妻お町が応対に出た。『池先生の妻室ですか』『ハイ』『それならば私とは同父異母のきょうだい。私は徳山の息子です。久しい間、あなたに逢いたく思うていましたぞ。山河にへだてられ遠く離れていても逢いたいの一念。ちょうど公務出張にて此の地へ参り、長年の願いを果すこと叶いました。これからは屢々往き来し、きょうだいとして心通わしましょうぞ』『わたしは此のこと亡き母から聞いてはおります。けれど、亡き母は厳しう誡めました――互いに往き来してはならぬ、いかに厚き情をかけられようとて遺言に背いてはなりませぬ』と、お町は追い返した。お町の夫池先生は後に書画の道で名を挙げ大雅先生として天下に知られた。先生の妻玉蘭の名は大雅先生の名声と同様に。世の人は伯鸞之孟光（後漢の梁鴻の妻）になぞらえた。これぞ百合の生んだ娘お町であった。百合には穀葉集なる遺集あり。わしの友人奥道逸が百合の自筆の稿を手に入れ、その書の、なんとさっぱりと力強きことよ、と言いおった。」

「お茶をお入れしましょうか」そっと梨影が言う。

「いや、続けよう。茶はそのあとじゃ」

「わしは屢々東山に遊び僧月峰が百合のこと詳しう話してくれた。わしは初めて百合のこと知り、才智あり文藻ある女と感じた。知もあれば礼節わきまえた彼女は人の鏡であるよ。今の世の金持のぐうたらが、大雅の名に惹かれて大雅の書画を我がちに大金払うて手に入れ、大雅大人をまのあたりにしたように思うておるが、とんでもないこと。誰もくだらなさに気付いてはおらぬ、肝心のことを忘れておるわい。百合なる女は変った女と言わずにはおれぬ。わしは心配じゃ――後の世の人達が百合をば門前にたたずみ笑みを売る女と辛らさは同じと語るのを。それが心配で百合のこと書いたまで。……サァ、茶をくれ、喉がかわいてしもうたわい、早う早うな」

「ハ、ハイ」梨影はいそいそと茶を入れる。手は心なしか感動でうち震えている。
〈百合というお人の死に顔は美しかったにちがいない……〉梨影は心底から羨しく思った。近江に居た日々、母から聞かされた仁正寺藩の女の人びとの姿と、この百合の姿が重なっては離れ、遠ざかっては近寄ってくるのである。美しさでは一つとなるが何処か違うのである。藩という武家の世の中と町なかとの違いなのかと梨影は思いもする。それにしても、烏滸がましい決意をして良かったと心から喜びが溢れでてくるのである。自分にも美しい死に顔ができるのかと思いつづけた近江路が目前にゆれているような気がした。
〈美しい女、優しい女、正しい女〉梨影は幾たびとなく心のなかで呼びかけていた。
気付いて山陽はと見ると、山陽は机の前でゴロリと大の字型に寝そべり、微かな鼾すら立てはじめていた。梨影は夜着をそっと覆った。梨影には新しい世の中が自分に開かれたように思えて来た。俄かに覇気が湧いて来たようであった。
〈いろいろと教えていただかねば……美しい女になりたい……〉いまの梨影には細香のことなど毫も翳りを宿してはいない。
翌朝、目覚めるや山陽は妙に梨影の御機嫌うかがいをする。
〈細香さまのところへお出掛けなのだわ〉梨影はおかしくてたまらないのである。
「細香さまを御案内してあげなさいませ、折角の御上京なのですもの……」
「然様、さようでな。他に知己のお方もおありでないのでな、此の儂が行ってあげねば御気の毒じゃ」
「お戻りになられましたら、お教えくださいませよ、きっと――」
「儂も弟子ひとり増えて嬉しうてならん、よき妻女どの――」

「はよう、いえ、ごゆるりと……」梨影は笑顔で山陽を門から送り出していた。
〈儂は良き妻を持ったものよ〉山陽のこころは軽らかに宙をとんでゆく。
「もうお見えにはならぬかと、わたくし、案じて居りましたの……梨影さまに妬いていました、あれからずっと……」細香は目を見据えて山陽に話しかける。
「御懸念御無用に願いますぞ、あれは、なかなか物わかりの良い女で――」
「それ御覧なさいませ、梨影さまに首ったけではございませんか。わたくし、ほんとに口惜しうございますわ」細香は口を尖らかせて言った。
「いや、あれはあれ。細香どのは心の――」
「こころの――なになのでございますのかしら……」
「言わぬは言うに勝ると申しますな。敷島の大和の国は言霊の国、なにも申しますまいぞ」山陽は器用に体をかわす。
「わたくし、怒りましてよ」わざと細香は仏頂面をした。
「今日は御室へでも参りますかな」
「いずこへなりともお連れくださいませ、わたくし、山陽さまのお傍に居れますだけで幸せでございます……」
〈元瑞どのを誘った方がよいかも知れぬな、万事好都合のようじゃ〉梨影への言いわけにもなる、それに小石元瑞に細香なる女を見せびらかしたいという稚気も手伝ったのであった。元瑞に叱られるという怖れはあるのだが、一旦こころに決めてしまうと凝としてはおれぬ山陽なのであった。
　この日、元瑞を無理やりに誘い出して御室へ出掛け、上機嫌で山陽は夕闇に沈む我家の門をくぐったのである。

「元瑞どのも御一緒でな、細香どのも喜んでくだされた」
「それは良うございました、細香さま、お疲れでは……」
「なかなか達者なお人じゃ。御室では詩もできたよ」
「……」咄嗟、梨影は細香への嫉妬心が顔を出すのを感じた。
〈やはり、細香さまは才女なのだわ。その詩才に山陽さまのお心が惹かれておいでのよう……わたしは駄目、詩などとてものこと……〉梨影は思わずポロリと涙を落した。
「どうしたのじゃ、涙など――」
「虫が、虫が入ったのです、目に」
「夕餉のあとで講じて進ぜよう、お弟子どの」
「酒は伊丹の泉川に限るな、京で此の名を知らぬものはおらぬ」知人より贈られた酒を嗜んで御満悦の山陽である。
夜は深閑の住居であった。
「よいかな、始めるぞ。九州に旅し数十軒の瓦・茅屋が山麗に散在、樹々の傍に煙さびしげな赤間駅を通り過ぎたことがある。博多で松永子登の口から赤間駅の節女の話を聞いた。この節女お正の父は農業と醸造業とを営み豊かな暮らしであったが、妻に先立たれること二度。夫々に一女を設けたが、お正は後妻の生んだ子である。父親七兵は五十歳になるや家を甥の七左に譲り別棟に住みおった。老いて病篤き折、一族を集めて言うには『儂の命も長うはない。儂には男の子なく女の子ふたり。長女を嘉右の嫁に、次女を長二の嫁にして本家を継いでくれい』嘉右は後妻の弟、長二とは七左の子である。そこで親族相談、長女を嘉右の嫁にして、お正を育てさせることにした。お正はよい子で嘉右夫妻に良う仕えたが、嘉右は不良で仕事もせず、村の馬医者万助と酒を飲んでばか

し。貰った田地もみんな消えてしもうた。親族いくら説教しても嘉右は耳かさぬ始末。お正も大きくなり長二は二十歳。この長二、極めて真面目なる人柄、いろいろ災難つづき経済行き詰り、結婚も叶わぬ。隣村の村長半五はお正の秀れたるを耳にして自分の伜源五の嫁にと考えた。これを馬医者万助に言うや『あなたほどの権力者で、なんでうまくゆかんわけがありましょうぞ』万助から此の話を聞き喜んだは嘉右じゃ。親族とも相談せずして勝手に此の話に承諾した嘉右を親族一同責めたてた。苦しまぎれに嘉右は万助に相談しおった。万助は兄の道全と画策。当村長の善次と勝浦村の村長半五とは親密ゆえに彼に仲人口をきいて貰おうという事に相成った。みなは、お正に説いた『お前が嫁にゆけば此の家の暮らしも良うなる。何も彼もが良うなるぞ』。お正はただ黙ったまま。ややあって言う『皆さんがあたしの為に考えてくだされることで何で背けましょう。ただ父親が死ぬ前に、あたしの頭を撫で、長二さんと一緒になれ、背いたらいかん、と言い残されましたゆえ、あたしは父の遺言に背くことができぬのです』。涙ながらのお正を道全らは怒鳴りつける『みんなに良かれと思うての事じゃぞ。幸せが目の前というに、落ちぶれた長二を慕うとは、とんでもないぞ』。嘉右も罵言を浴びせかける『長二との結婚は許さん。お前たち、こっそり通じ合っておったな、お前たち二人を追い出してやる』。お正は項垂(うなだ)れたままである。万助は言う『斯くなるからには話しても無駄じゃ。吉日を選んで結納を納めてしまうべし』片隅で泣きじゃくるお正を他目(よそめ)に、みなはワッと歓声あげての大酒盛り。此の日以来、お正は髪梳(す)かず化粧せず、その変りように家の者は心配した。が、数日後、涙を抑(おさ)えて髪も結い顔も洗ってお正は言った『あたし、考え改め隣村へ嫁に参ります』。ヤレヤレ、家の者は安心してぐっすり寝込んでしもうた。その隙を狙い、お正は水浴び身を浄め庭の炭小屋へ入り、包丁(ほうちょう)で咽喉元を一突き、膝を両手でしっかと抱えこんで死んでいった。お正十八歳。義母はお正の姿の見当らぬに気付いて隣りに聞くが、とんと見かけま

せなんだとの返事。家に戻ってあちこち探すや炭小屋から流れ出る血の海。うろたえて義母、嘉右は外出先から駆け戻った。お正の遺書二通。」

「……今夜はどうも気が沈んでいかんわい、調子が乗って来ぬ」山陽は目をしばたたいた。

「どこまで講じたかな、……遺書二通じゃったな。『父母ニ死ナレテカラ養ッテイタダイタ御恩、海山ドコロノ比デハアリマセン。今度ノ婚事ハ皆サンニ利益ヲモタラスモノダケニ、アタシハ仰セノ通リニ早クシナケレバナリマセン。アタシノ許嫁ノ長二サンハ仕事ガウマクユカズ落チブレテオラレマス。コノトキニ心ヲ変エテ他ニ嫁ニユキ楽ナ暮ラシヲスルノハ遺言ニモ背クコト、長二サンニモ背クコト。背クマイトスレバ、養父母ヘノ不孝ノ道。アタシハ死ヌシカ方法ガアリマセン。言イツケニモ従ワナイアタシノ罪、オ許シクダサイ』とは養父母宛。『勝浦ヘ嫁ニユケト勧メラレ結納ノ日マデ定ッテイマス。アタシ、悲シウテナリマセン。アタシヲ措イテ他ニ貴男ノトコヘ嫁ニユク人イナイト思イマス。ソレダケニ貴男ノ御気持ヲ思ウト……。アタシガ不義ノ結婚ヲシテ贅沢ナ毎日ガ過セタトテ、ドウシテ人サマニ顔ヲアワセラレマショウカ。義父ハ貴男トアタシノ仲ヲ疑ッテイマス。アタシタチノ身ノ潔サ、貴男モ御存知ノコト。アタシハ義ヲ重ンジマス。死ニユクニ当ッテ言イタイコトガアレヤコレヤト心ニ浮ンデキテ……貴男ノコトガ気ガカリデス』とは長二宛。嘉右はがっくりとし、万助はお正の亡骸を見て『しぶとい女め、どうして成仏できるものか』と屍に鞭を打つ。村長の善次は、お正狂疾のためと郡役人を巧く買収して事なきを得た。享和元年十一月のことであった。其後十八年、儒臣竹田器甫が節女の詩を賦したが、それが藩侯の目にとまり、藩侯の生母付の侍女が赤間出の者であったので、近くに召して事の次第を明らかにすることができた。藩侯は役人を派遣して赤間・勝浦の両村長を馘にし当時の郡役人たちを追放した。節女の家には白金を賜り、姓を許した。」

語り終え、山陽は筆を手にした。稿の余白に一気に記していた、其生長荒山破駅間何所聞見而其栄辱之分如是其明何哉。さらに一筆、嗚呼烈矣哉。

梨影は傍でただ黙って心を痛めていた。

〈お正さんも美しく優しく、正しい女。……それにしても何故女は哀しいのかしら……〉梨影の頬にも心にも冷たい涙が走っていた。

「今日の話はしんみりしすぎたな。……次にはなにぞ威勢のよい講義をして進ぜようわい」ボソリと山陽は言った。

あわただしく日は流れた。

大垣の江馬蘭斎から細香のもとに書状が届いた。即刻戻って来いとの早飛脚であった。いかな細香と雖も帰郷しないわけにはゆかなかった。万感のおもいを抱いて細香は京をあとに大垣へと旅立っていった。

この日頃、山陽は悄然としている。それが何故であるのか梨影にはわかっている。それだけに梨影は言葉のかけようがない。

「講義してくださいませな」

「ウム、然うだな」山陽は生気が甦ったように言う。

「お雪は義侠いさみはだ大坂の女。そも大坂は太閤殿下名残りの地として気風雄々しく心のびやか、仁侠をたっとぶの土地柄である。おとこだて数多きは大坂の地、女にして義侠の仁はお雪ただひとりのみ。お雪は長堀の豪商めかけ腹のむすめ、幼きより三好氏に養われたが、この家跡継なくて養子を迎え、この男とお雪を夫婦にしようとの思惑。わが背の君たらん男のひ弱さに我慢できなんだはお雪。と言うて恩儀に背くわけにもゆかぬ、そこでお雪は誓った。わたしは決して決して再

び婿は迎えはいたしませぬ。そうこうするうち育ての義父はみまかった。お雪、家の仕事一切処理、采配ふったが、なにぶんいさみはだの女とて商いはそっちのけと相成る。柳淇園翁に師事して書の道、絵の道を、してまた撃剣、手搏の術も学んだという仕儀。肌色白く、ふくよかに肥えて、腕力つよい。お亀、お品なる二人の女を常にお供にひきつれていたが、これまた二女子ともに腕っぷし強い。お雪十六歳、お亀、お品も花ざかり年頃。ゴロツキ若者は彼女たちに道で出くわすや色ごと悪ふざけ。咄嗟お雪は二人に目くばせ、若者を再起不能に叩きのめすこと再々。南の町はずれの嫌われ者の横行すさまじく、昼間とて道ゆく人は誰もなかったが、あるとき、お雪が此の道をゆくと二人の盗っ人が威しをかけて腰の飾り玉を奪おうとした。お雪、すかさず殴り倒して平然と通り過ぐ。この事あってからというもの、噂ひろまり、人びと、お雪の姿を避けるようになった次第。」山陽の語り口調は調子づいて来た。

「お雪には夫なく、宮仕えして御所の内を観察したいと考え、ちょうど書道に通じていたゆえに長橋局の記録係の女官となって五年間、官中の故事を学んだという。出仕を終えて舞い戻り、髪を剃って尼となり天王寺の傍、月江寺に落着いた。生みの母親の衣号が菊水であったによって、お雪着るところすべて菊水を用い、はては楠公正成の遠き子孫なりと言いはった。また養われての三好氏、この家よりは長慶あり、そこで撰んで法名を正慶とした。常に白い法衣、輿を二人の女がかついで歩きまわる。かつて寺で塔びらき、善男善女多く詣でておったが、たまたま俄雨、正慶(お雪)は傘千本余を買って皆に手渡したが瞬時にして尽きた。また法会を営み楽人を呼び音楽、盛り沢山のお供えを。ある人は問うた、何故そのようにする？　そこで答えたものである、わが家は関白秀次二百年の命日を迎えたからなんですよ。また、方広寺に密かに千金を喜捨し、わたしのため太閤を弔うて、と。斯くほしいままに言ってのけたのであった。歳月流れて財産も無うなり、難波村に

部屋を建てて老後の日々。棺桶一つを買うて門につりさげた。客人と酒を飲んだ日、暑いにも拘らず町へ出かけて道端でバッタリ死んだ。町の人々は皆これは正慶（お雪）だと知らぬものはない。即刻この旨知らせに走って亡骸は常日頃馴染みであった酒屋に運び、自ら用意しおった棺に納め幽泉寺に埋めたのである。年七十五歳。墓石には雪、亀、嵒の行状刻まれ、いまも存在するが、思うに二女もまた合葬されたものならん。」

「梨影、茶じゃ、茶を一服――」山陽は自らの稿を凝とみつめている。

「わしは言いたい。世間で言うお雪は小萬のこと。同じ頃、南に芸者あり尺八うまく、声がかかれば遊女姿で腰には笛さしお出掛けなさる。お雪の男だて評判高きが故に、はなはだしきはお雪の名で舞うた。その母の名が萬なる故に小萬と称し南の遊女のいでたちで着飾っておった。斯様なわけで誤り伝えられ、絵師は真にうけて描き、口の端にも乗ってしもうた。ああ、お雪は尋常ただの婦女ではないに、ましてや人に媚びる遊女と名を混同し、評判ひろめおる。わしの目は怒り、唾かけ罵らねばならぬ。世間で真なるものと偽なるものとが乱れおること斯様な具合が多いぞよ。茶山翁、梁蛻嵒先生のお雪に贈られし詩稿を手に入れ、珍重がり、わしにお雪の伝を書かせなされた。依ってお雪のことを調べた次第。そもそも、お雪の行状は教訓とするわけにはゆかぬが、その時に当り婦女にしてますらおなるものあり、今はと言うに男子にして婦女なるものあり、これじゃ、わしの言いたきは。時勢の盛衰を判断するに、ただ慨嘆あるのみじゃ。」フウと大きく息を吐いて山陽は稿を机の上に置いた。

「どうじゃな、お雪なる女は？」

「ハイ、……」梨影は目がくらむようなおもいで、言葉にはならないでいた。

〈世には、さまざまの方がおいでになられたのだわ……〉

「細香どのはどうしておられるかな――」
「お便りなされたらおよろしいのに」
「ウム、詩一篇届けるとするか――」
「そうなさいませ、きっと、お喜びになりますわ」
いま、梨影のこころはうち震えていた。言い表わしがたい感動が全身に走っている。細香のことではなかった。お雪の話を聞き、さまざまの女の生き方を知り、名は知られずとも何かひとつのものを摑み得た女として美しく死ぬことができれば、と思いつづけている。そして、山陽を夫として持った身を肺腑にしみて有難いことだと喜ぶのである。

その五　男ごころ

山陽の塾、真塾なるものは依然として京の他の儒者たちの敵視もあって、渉々しくはなかったが、山陽の心意気だけは将に天を衝かんとするものがあった。

とは言え、家計は極めて逼迫、万事梨影まかせであった。

「拮据して、髪、蓬麻のごとし。梨影よ、おまえのことだよ、働きどおしで髪の手入れすらできないでいる梨影よ、すまんなァ……」

「そんなこと、お気になさらないでくださいませ、わたしは、これで幸せなのですから」

「すまん、すまん」

「それより、先日の日野大納言さまからの御招待のこと、どうなされますの？　」

「いや、儂は出掛けはせんぞ」

「それでは、あまりにも御無礼に当りましょうに……」

「いやいや、それ以上にな、京の儒者たちの態度が気にくわんのだ、上に諂い阿る輩を見ていると、どうも一緒の席に座る気にはなれんのだ。奴らと同席しなければならぬというなら、むしろ死んだ方がましなくらいに思われる」

「……」

「心配しなくてもいいのだぞ、まァ、成りゆきに任せておけばよい」山陽は悠然と構えている。

日野大納言資愛と言えば京では時めく御仁にも拘らず山陽は、にべもなく、その招待を断りつづけた。

〈糞面白くないな、儂を馬鹿にしおる学者たちと同席するとはな。だいたい、奴らの態度、全く以て怪しからん。尤も、奴らの御蔭もあるな、梨影にばかり苦労かけてはと思い、画を描いて少し稼ぐようになれたのも、もとはと言えば奴らの邪魔立てで塾生が集らなかったからだからな……妙なめぐり合わせだわい……〉山陽は苦笑する。

日野大納言からは再三の懇望があった。

書状には、貴殿の申出 なになりとも聞き入れに及び候、と記されてあった。

此の書状を見て山陽は北叟笑み、早速、返信をしたためた。

あなた様が大納言としての地位をお忘れになり、この山陽めと全く同じ学問風雅の道を愛する同志として、お招き下さいますなれば喜んで参上致します。但し、一対一でございますれば——。

大納言からは直ぐに返事が来た、貴殿の申出どおりにする、是非とも遊びに来てほしいのじゃ、と。

「それみい、梨影よ、心配しなくても良かったじゃろうが……大納言様は心ある御方であったわ、ハッハハ……」山陽はいかにも得意気である。

腰に、ふくべをぶら下げて山陽は普段着のままで大納言邸に出入りする。両者は肝胆相照らす仲となってゆき、大納言自身も飄然として山陽宅に姿を見せる。

これが京の町の噂にならぬ筈がない。切歯扼腕したのは、言うまでもなく京の儒者連中であった。

ここに至って山陽は京へ出て以来、初めての心の底から快哉を叫んだのである。

＜ザマア見ヤガレ！　口惜しかろうが、これが人間、まことの姿というものよ、虚飾はいかんと身にしみて感じられるがよいわい――＞

此頃から山陽の門下生も日毎増えはじめ、幾多の文士学者が往来しはじめた。梨影は寸暇を見付けだしては、こっそりと画の稽古をしたり、書道の嗜みを身につけようと懸命に努めていた。

＜夫に恥をかかせては申しわけが立ちはしない、妻として適わしい才芸を身につけねば……＞梨影の腕は、めきめき上達してゆく。

文化十三年二月のことであった。姫路藩の仁寿山学問所に招かれて山陽は荘子の講義をしていた。

野馬也、塵埃也、生物之以息相吹也、天之蒼蒼、其正色邪、其遠而無所至極邪。其視下也、亦若是則已矣。

陽炎がゆれる、塵埃がたちこむる、万物は生くる、これが天地でありますな。よう仰いで見なされい、天空の蒼さ。あの蒼さは天そのものの持つ蒼さでござろうか、それとも、天と地との遠き無限さの然らしむるものでござろうか。限りなき、その道のり、涯しなき姿のもつ蒼さでありまするぞ。小さき己れの殻に閉じこもりおっては物の真姿をとらえること叶いはいたしませぬぞ。大鵬（おおとり）が此の下界を見下すや、その目にも蒼き色どりがひろごるでありましような。大鵬は天空を羽ばたく。飛翔するがゆえに此の下界の醜悪を見ず虚偽に目を汚すこともござらぬ。よう思うてみなされい、俗界の権勢に蠢く獅子身中の虫をな。羽ばたかねばなりますまいぞ、大鵬にはなれずとも、大鵬の懐に抱かれねばなりませぬな。下界の醜き壷中に蠢くことを避け、俗塵よりの超越を心せねばなりませぬぞ。いやしくも人の身と生れたるからには仰いで天空の大鵬たらねばな。

「山陽殿、御使者でございます。火急の――」

講筵を離れて門前で飛脚の手から一通の書状を受けとり、それを見るや山陽の顔は硬ばってしまった。父春水の危篤を告ぐる母からの書状であった。

「それがしの講義はこれにて――」席に戻った山陽は此の語を言うのが精一杯であった。

とるものもとりあえず山陽は広島へと駕籠を走らせつづけた。

山陽が国秦寺裏門の自邸に帰りついたとき、それは父の葬儀後三日目であった。

「御父上……」山陽は父の霊前で慟哭した。

「御父上の死にも間に合わず、なんたる不孝者、お許し下さい……」身を投げだして泣きじゃくる山陽であった。

父春水が山陽を預けた菅茶山、その茶山のところから逃げるがごとく出奔したのであったが、その菅茶山から亡き春水を悼む詩が届けられた。

時賢相つぎて北邙の塵　知己乾坤に一人を餘す　玉樹今朝また零落す　此の身ありと雖も誰ありてか親しまん

（今の世の賢人は次々とあの世へと旅立ち、私の友は此の世に唯一人であったに、その偉大なる友も今朝は冥途へと――むなしく生きながらえている私は、此の世で語り親しむものとて誰ひとりとしていなくなってしもうたわい）

山陽は目頭が熱くなった。思えば思うほどに父の心が、嘗て背いた師菅茶山の心が、肺腑にしみてくる。

〈昨年、お前は帰って来ずともよいと言っておられた父上、その父上が、広島に見舞いに戻った私の顔を見て一夜中語り明かされたに……思うてみれば、父上には随分と御苦労おかけしつづけたものだった。後継ぎたるべき道楽息子を持たれたために、父上の藩内での立場も嘸や辛かったことだ

ろうに……せめても父上の残された業績をまとめて世に残さねば子としても、これ以上の不孝はない、先ずは遺稿の整理にかからねばいけない。……それにしても世の定めとは酷すぎる、葬儀にすら間に合わせてくれなかったとはな……儂は、あの折、ちょうど、荘子の逍遙遊のところを講じておった、そこへ危篤の知らせ……もう儂は、この山陽めは二度と荘子を講じはすまい、荘子を講じては父上に相済まぬことになる……〉

一ヶ月ほど広島の地に留っていたが、再び山陽は京へと戻った。その相貌は、いたく窶れ果て、みるからに痛ましいまでであった。

〈不孝者、親不孝者山陽……〉京への旅道中、山陽は駕籠の中で呟きつづけていたのである。

迎えた梨影は山陽の傷つき果てた哀しみの顔を見て声も出なかった。

「梨影よ、父上の葬儀にすら儂は間に合わなかった、父上の日記にはな、儂のことを次のように書いておいでだった、久太郎、つまり儂のことだ、病気暴発し狼狽なすところを知らず昼夜にわたり看護するも此の間の事、茫然として記し得ず――とな。病気のこと、脱藩のこと、後継ぎのこと……数えれば限りなく父上には心労ばかりおかけして来た儂だった、それだけにな、いざ父上の死を、まのあたりにして、あまりにもこの心には痛手が大きすぎる。……この山陽も儒者、儒の道に則って三年の喪に服することに決意したよ、これについても世間では、とやかく言うだろうが、気にするではないぞ」

「ハ、ハイ、よう分っております」

「儂の服喪は世の儒者たちのとは違うぞ、要するに心喪に服することなんだからな」

「心喪でございますな」

「そうなんだ、形式ではない心の喪が人間にとって一番大切なんだからな」

山陽が心喪に服すると言うのは仔細がある。成程、古来、中国での先王喪制どおりに服喪したとすれば、三年を待たずして自らの死を招く怖れが多分にある、それでは父上に申し開きが立たない。だからこそ、心喪を決意したのである。

此の日以来、山陽は朝夕父の霊前に供花し、読経し、只管、父の冥福を念じつづけた。髭は伸び放題、月代は剃ることもなく、菜食だけの日々に山陽の顔は日増しに峻厳をきわめていく。妻も近付けず、外出することもせず山陽は一室に蹋蹐しつづけていた。

斯くして歳月は流れた。

「もう一周忌も過ぎましたゆえ、魚などはお召し上りになりませんと折角の心喪が果されないのではないかと案じ居りますが……」

「そうか、それも道理だな、それでは魚ぐらいは食べることにするか。それはそうと、世間では言っとるそうだな、山陽め、百日過ぎると平然と外出しておる、あれが服喪か、とな。梨影、おまえだけは分ってくれようが、この心喪をな」

「ハ、ハイ、世の人は世の人、勝手に言わせておけばよろしうございます。あなたさまの御父上への御気持、世の人に分ってたまりましょうか」

「嬉しいこと言うてくれた、ありがたい、礼を言うぞ」山陽の頬には、ハラと涙がこぼれ落ちた。

「なにを、そんな、もったいない御言葉を……」梨影もまた涙ぐんでしまった。

文政元年二月、山陽は広島の地を踏み、父春水の三回忌法要に参列した。山陽にとって一番最初の弟子となった後藤松陰が伴をした。その足で山陽は九州へ出掛けたのだが、ちょうど京へ出て来た折と同じように、至るところで冷たくあしらわれなければならなかったのである。

父春水の友、樟島石梁を訪ねた際には、さすがの山陽も我身のほどを哀しまずにはいられなかっ

た。

〈父上の友ですら、この儂を斯様にまで冷眼視なされ相手にはして下さらぬ……恨んでみても、それは身勝手というもの、昔の道楽、親不孝のなせる仕業、その報いなのだからなァ……儂の今の心を知っていてくれる者は、此の世の中で、亡き父上と妻の梨影だけじゃ……それでよい、それでよいのだ〉

豊前国に入って雲華上人を訪ねたとき、これまでの酷い仕打ちの九州路の辛らさが一瞬にして霧散するのを覚えた。

「よき眺めでござろうがのう、是非とも、そなただけには見せとうてのう……」上人は、ひとり肯き、凝と山陽の顔を見詰める。

「……」山陽は半かば陶酔の境に溺れでもしているかのように黙りこくっている。

〈造物奇怪、畫手また写すに到らざるものあるを知る……ウム、すばらしいわい……天真幽淡というもの、まさに元の倪黄の筆法じゃ……〉筆を口にくわえて絶景を見つづけている。

暫くするや、矢庭に山陽はすらすらと南画風に筆を走らせていた。くい入るように雲華の目が山陽の筆先にそそがれる。

ふたりは無言であった。ただ時だけが流れる。

「ウム、なかなか御見事。その画、拙僧へ下さるであろうのう」

「勿論です、私も、あちこち歩き廻り、妙義山こそが天下無双と思いこんでいたのですが、今、ここに斯うして見て居りますと、妙義山のようなもの幾十峰あるか測り知ることもできぬくらいです、まさしく此処は天下第一……この奇勝にして耶馬渓なり」

「そうじゃろうて。君の高眼の名山を品せざれば　誰か此の渓を以て第一となさん、じゃわい」上

人はニコリ微笑んでいる。
〈ああ、これで九州くんだりまで来た甲斐があったというもの、天下第一の絶景を見出した喜び、何にたとえればよいのじゃ……この感激、ひろく世に伝えねば……〉山陽の心は無性にはしゃぐのである。
〈余嘗て昔人の書を読みて其の山貌はなはだ奇峭なるを疑う――〉山陽は頭のなかで、この耶馬渓の図の書出しの語句を考えていた。
〈畫人一時の興にいたり、其の筆墨を鼓舞せるのみ――ところがじゃ、まのあたり此の耶馬渓を眺めてみるに……〉山陽はひとり頷いている。
〈大自然には偽りがない、世の儒者たちなど糞喰えだな――〉これまでの辛酸が一挙にして吹きとんでゆくのを覚える。
「暫く当地に滞在されることじゃ。何事も忘れはててな」
「いえ、然うも参りませんので――」
「無理にとは申さぬがのう……成程、広島で母者が、そなたの帰りを門に倚りかかって首を長うしてお待ちじゃからのう……母者思いのそなた故にな。……雪路の旅は辛いとは思うがのう……」
山陽は上人の厚志に感謝しながら九州路を立ち去り、広島に辿りついた。
上人の言のとおり、母梅颸（静子）は首を長くして山陽を待ち構えていてくれた。
〈心喪も明けた。長崎の丸山での遊びも、孤衾水の如く已に三年、と詠んで追い返し、宿らずにすましたな……とにかくサバサバした心境だな……〉
くつろぎと安らぎのあと、山陽のこころは妙に淋しかった。
〈父上がおわしまさぬ……〉何故か山陽の瞼には三十年も昔の父春水の姿が浮んできた。悲憤でも

なく、哀訴でもなく、ただ黙して語らぬ父の顔がである。春水は鑑古録の執筆に取り組んでいたのであったが、それが突如として藩より執筆まかりならぬと言い渡されたのである。鑑古録は焼かれた。春水の国史編述大事業は煙霧と化してしまったのである。あの折の父春水の顔が、いま山陽の眼前に浮かび上っている。

〈あの折の父上の御気持、いまにしてわかってくるな……世には目に見えぬ糸がある、その糸をあやつるものに抗うこと叶いはせぬ、その悲しみがな……藩と雖も所詮は幕府の傀儡、して父上はその藩儒であった……〉

「どうかしましたか？」

母の声で山陽は我にかえったが、心のなかの淋しさだけは余韻をとどめて消し難い。

「京へ御一緒ください、嵐山へ御案内いたしましょう」

「と言われても……」

「問答無用でございますぞ。妻の梨影も見て戴きたい、なかなかの世話女房でしてな……」

「世話のやけた伜殿の世話女房であってみれば是非にも逢わねばなりますまいな……」

「揶揄なされますな、身の縮むおもいですぞ」山陽は昔日の行状を思い返して恐縮するのであった。

「まこと、おまえさまには身の縮むおもいをさせられましたぞ、幾たびとなく……」

「申しわけありませぬ、これ、この通りで――」山陽は赤面して平伏する。

〈この世で儂の頭のあがらぬ御方は母上だけじゃな……〉面映ゆくも淋しくもある。

小さくなっている山陽を見て母の梅颸は微笑んでいる。

〈あの久太郎が……大きゅうなってくれて……〉母にとっては四十歳の山陽も昔のままの久太郎で

しかなかった。
「なるべく早う旅立ちの御用意を――」
「なにも然う急かずともよいに」
「いや、吉野の花も見ごろというものがありますゆえに――」山陽のこころは逸っていた。
「花よりも嫁御の顔が気になるのでしょうが……」
「……」見透かされて山陽は言葉に窮した。正直のところ、山陽は一日も早く梨影に逢いたかった。なにしろ一年にわたる長途の旅であった。帰心矢の如しである。旅先へ送られて来た梨影の手紙を折にふれ読みかえす山陽であった。
旅立ちの日が来た。母も子も、まるで幼な子のようにはしゃいでいる。
「さァ、輿の用意ができましたぞ、早う、はよう――」
「あわてるでない、落着かねば……母が歌を一首――行くかたの花におくれし春雨に　しいて出たつ旅ごろもかな」
「……しいて、とは。強いての旅でございますのかな」山陽は苦笑いをした。それにつられて梅颸も笑う。
道すがら山陽は筆を馳せる。一気呵成、詩は出来る。山陽は上機嫌である。

輿行吾亦行　輿止吾亦止
輿中道上語不輟　歴指某山輿某水
有時俯理襪結解　母呼兒前兒曰唯
山陽一路十往還　省郷毎計瞬息裡
二毛侍輿敢言労　山駅水程皆郷里

於兒熟路母生路　双眸常嚮母所視

母と子は睦まじく旅をゆく。輿に乗った梅颸に道を歩みながら山陽は絶え間なく話しかけている。草鞋のひもが解けて山陽は立ち止り結び直す。

「どうしましたか？　早うおいでなさい」

「ハイ、直ぐ参ります」あたふたと山陽は母の輿を追う。

〈この道は幾度となく往き来したものだが……今の儂は若き頃とは違うわい、頭にも白髪がのぞいておる、この苦しみも母上と一緒なれば霧散してしもうわい。儂のこの今の喜びは――〉

梅颸にとっては、あたりの風景は目新しい。あれよこれよと道中の景を賞で歌を詠もうとする。そのたびに山陽は梅颸の眺める景を同じように見つめ母の心に合わせるのであった。

〈これまた生きてある喜びというものじゃ〉山陽は疲れた足に快感を覚える。旅は常に山陽にとっては一つの門出の意味を持つ。心は、志は、大きく行手に向って息巻いている。

今日も旅はつづく。

「母上、あれが黄葉夕陽村舎ですぞ」

山陽にとっては此処神辺の地は感慨一入である。先年、此の地を飛び出した折の様々の経緯が甦って来る。心は重苦しい、それでいて無性になつかしいのである。

「ようお出でくだされた」にこやかに菅茶山は迎える。

福山藩へ仕官せよ、妻帯せよと迫って廉塾の後継者にしようとする茶山を足蹴にして神辺の地を去った山陽であった。禿頭め！　と憎悪すらした身には今日の茶山のこころがありがたい。昔日のことには茶山は一切触れはしない。今日の邂逅を心から喜んでいてくれる。

〈ああ、これで救われた思いがする……これもまた父上の御心づかいの賜物だな……〉父春水の偉

大さを山陽は改めて感じている。
「ところで霞亭どのは？」
「残念じゃな、いま国元へ帰っておるのでのう……霞亭が居れば嘸かし喜んだじゃろうに――」
北條霞亭が京の山陽宅を訪ねた折のことが甦ってくる。ふたりで思う存分に世を痛罵した宵がなつかしい。神辺へ行けと勧めたのは山陽であった。茶山の思う壺にはまってか霞亭は茶山の姪御と一緒になって廉塾の後継者に据えられてしまっている。そのことが妙に気になる、と言うより山陽には擽ったいのであった。
〈あのまま儂が神辺の地に留っておれば、儂が茶山先生の姪御と一緒にさせられて……霞亭どの、すまぬなァ……〉然もありなんと霞亭の人柄を思い浮かべて山陽は含み笑いをした。
「九州の旅はどうじゃったな」殊の外に茶山は九州に関心を示していた。
柔和な目を細めて、フンフンと頷き聞き入る茶山を前にして山陽は得得と弁舌をふるっていた。
「旅道中、折にふれ、先生を思うてはお話したくて……春燭を剪り尽して余焔あり　憶い起す阿蘇の烟空に騰りしを」
「君に逢うて　宿恨半ば空となる……わしの心も清清した、よかった、よかった」茶山は目を細める。
この二日間の滞在は山陽にとって心底から嬉しかった。茶山は宿恨と言ったが、それだけに山陽とて心重い歳月でもあったのである。倨傲と言われもするが内心は繊弱である。茶山のことを気にしていなかったと言えば嘘になる。
〈半ば空と成る、と詠まれたが……余程、儂のことは癇に触っておいでだったのじゃなァ……すべてとは詠まれなんだが、ともあれ先生の御気持が解れたことが有難い〉

「梅颸どの、お気をつけてな。せいぜい親孝行をして貰いなされ。帰りにも是非立ち寄ってくだされることじゃ。旅ごろもたちないそぎそ老が身は又あふことも未しらぬよに――名残惜しうてなりませんわい」

神辺をあとに京へ立とうとしている折、霞亭が姿を見せた。

「間に合いましたな。貴殿がお出でとは知らず御無礼つかまつりました、よんどころなき些事にて帰国いたしおりました。それにしても良かった。斯くお目にかかれて……」

「間一髪というところでしたな。ありがたい、実にありがたい、縁ですな。先年のごとく夜を徹して語り合いたい、それが叶わぬとは実に無念……」

〈霞亭よ、うまくやってくれよ。万事頼みますぞ……〉

茶山の心も知り、霞亭の顔も見ることができ、山陽は安らかなおもいで神辺をあとにしたのである。

〈梨影の顔が見たい〉草鞋も軽らかに道を急ぐ。それに旅道中つねに筆を馳せつづけてきた日本外史を落着いた場で仕上げもしたかった。

京に近づくにつれ、山陽の心は妙に落着きを失っている。

〈近家情郤怕、家に近うして情かえって怕る……〉なにしろ一年ちかく京を離れていた山陽である。梨影はどうしているか、わが家は……と草鞋が重くて痛い。

「母上、着きましたぞ」山陽の此の一言葉には万感のおもいが籠っていた。

「戻ったぞ……」

「……」梨影は繁々と山陽の顔を見つめていた。いつともなく頬を涙が走っていた。

「おかえりなさいませ……」漸くにして言葉が出た。梨影のこころに喜びと安堵のおもいが勃とし

て湧き出して来た。
「伴どのが、いろいろと苦労かけておりましょう、相済まぬこと……」
「いえ、もったいないお言葉……わたくし、梨影でございます。不束ものでは……」
「堅固しい挨拶はそれまでじゃ」
〈ああ、戻って来たぞ、戻ってきたわい……〉山陽は大きく息を吸い、畳一枚大の字に寝そべっている。
「母上を存分に饗応してくれるのじゃぞ、万事、任せたぞ——」
「それからな、母上の夜具は極上ものをな……と言うても有る筈もなしじゃ……ともかく柔らかく暖かなものを頼みますぞ」
寝そべったままで山陽は梨影に指図をする。
「燗もしてな、熱うしてくれるのじゃぞ」
満ち足りた思いが山陽のこころを占めている。旅の疲れのこころよさが全身に漂う。その快さが安らぎのなかでたゆとうている。
「よい嫁御ですな」
「久太郎も、やっと落着いてくれて安心いたしました、随分と心配させられたものですが——」
「山陽さまには、これから活躍して戴かねばなりませぬ。春水さまのような立派な学者として」
「子供の頃の久太郎を思うと、いまがまるで夢のようでさえありますな……」
梅颸は連れ立ってきた映雪尼と静かに話し合っている。
「母上、ところで子供の頃のわたしめは如何ようの御仁でありましたかな」横になった山陽が不意に口をさしはさんだ。

「山陽さまと言ったら……おやすみなされていたのではありませんなんだか……」映雪尼は梅颸と顔を見合わせて笑った。

「それはもう……よう出来た御仁でしたぞ、親にも心配はかけぬな――」

「お戯れを――」山陽は半ば詰る口調で言った。が、その瞬時、母の目に白光る涙があるのを見逃しはしなかった。過ぎし日を想うと山陽の心は慚愧で心が痛む。そのことが己れに投げかけられた宿命の業であったにもせよ、今にし思えば安閑とはしておれぬ思いがする。昔日は帳消しにしなければならぬ。山陽此処にありと胸張らぬばならぬ。その意味でも今回母を京へ誘うたのでもあった。歳月の跫音は遠い日の傷の疼きを駘蕩と風に舞わせ回顧の情に忍び泣かしめる。母も子も心に忍び寄る跫音に今ひととき耳傾け、時の流れに身を委ねている。

〈やっと、お戻りになった……〉梨影は娘のように弾むこころで厨で立ち働いていた。時折、聞えてくる山陽の変らぬ声に不思議と安堵感を覚えるのであった。

「苦労かけたことじゃ」山陽は酒を注ぐ梨影に声をかけた。

「……」梨影は梅颸の傍に端座して、あれこれと給仕に努めている。にこやかに笑みながら、それでいて心のなかでは泣いていた。苦労かけたことじゃ、この一言が肺腑にしみる。今迄の辛さも一瞬にして消えたようで思わずに喚きたいほどの喜びにふるえるのであった。

〈お待ちしていた甲斐があった……これでよかったのだわ……〉梨影は、しみじみと幸せを嚙みしめていた。昨年の正月に山陽を見送ってから一年余、淋しくも耐えがたい日々の営みであった。エゲレスの船が浦賀の港にやって来たとか、有名な絵師の司馬江漢が亡くなったとか、あれやこれやと話題を弟子たちが持ち込んで来てはくれた。が、梨影は心和みはしなかった。そんな折であった、大石元瑞が一言つぶやいた。山陽どのは一目惚れであったなァ。この一言は梨影の心の支えと

なった。山陽さまは必ず戻って来てくださる、この梨影のところに――あれこれ疑念を抱いた自分自身が恥ずかしくさえあった。なにも思うまい、考えるまい、努めて梨影は自らに言い聞かせたのであった。近くの子供たち相手に御手玉をして遊んでいると、無性に近江での日々がなつかしく蘇えってきて涙がこぼれ落ちるのであった。

女というものはな、やさしさがいのちや、と話してくれた母の姿が甦って来た。

〈あの日頃、美しい女、やさしい女、それでいて正しい女……そんな姿に無性に心惹かれて――〉

梨影は近江での日々を思い返すのである。

〈いまは、山陽さまの妻なんだわ……山陽さまの御母上さまも、わたしをお認めくだされたし……〉梨影は涙ぐんでくる。

ささやかながら歴史が築き上げられている、娘のころから心に描きつづけた私というひとりの女の歴史が此処に今あるのだと梨影は確めるのであった。もはや引き返すことは出来はしない、ただ一筋に歩みゆくばかりである。根性にかけては決して人後に落ちないと自負する梨影のこころは行手のみを見つづけている。

〈――杖やったな、女というものは杖をつかんといかんのや〉幾たびとなく繰り返し呟いてみる。杖、杖……と梨影は自分の心のうちにある杖を見つめていた。確かに杖はある、が、それが何ものであるのか梨影自身にも摑めてはいない。とは言え、杖があると思えることで充分であった。

「円山の桜もお見せ申さねばいかぬな……それに壬生狂言、これは是非とも見て戴かねば……母上も必ずや御満足なされよう……」

「ゆっくりと寛いでくださいませ。京には随分と楽しいところがあります」

「そうじゃ、その通りじゃ。あそこへ御案内致そう、ウン、然うじゃったわい」山陽は一人悦に入

っている。
梅颸も心から寛いでいた。
〈春水どの、久太郎めもやっと落着いてくれたようで……御安心なされませ〉梅颸は亡き夫に語りかけていた。
翌々日、山陽は母を連れ島原へ来ていた。
「此処が天下に名高き島原でありますぞ」
「いちどは来てみたいと思うておりましたが……」
「女の身母上でさえ然様に思われる、ましてや男児たるものは――」
「この酒樓は何と言いましたか」
「三文字屋と申します、いや、三文ではなうて三両屋、いやいや、三万両屋。母上、今宵は思いきり散財つかまつりますぞ」
「花魁総挙げしますぞ」山陽は上機嫌である。
「山海の珍味ですぞ。これぞ我が心意気、思いきり召し上ってくだされ」
母と子は盃を酌み交わす。
「無礼講ですぞ、ソレソレ」母もまた子に調子を合わせて春の一夜を楽しんでいる。
「心は大海のごとくあらねばなりませぬな、母上！」
「そうじゃ、そのとおりじゃ」梅颸は斯う言いながら涙ぐんでいた。
〈あの久太郎が……斯くまで心の成長を遂げてくれた、心を病んでいた久太郎の心が大海のこころを……春水どのが御存命ならばいかばかり……〉夢見る思いでもあった。往昔のわが子からは想像もし得ぬ今日の山陽の心姿なのであった。

「雲か山か呉か越か、水天髣髴、青一髪、万里舟を宿す天草洋――キラリ、月光のごとく大きな魚が波間にはね躍っておりましたな――」山陽は九州の旅を思うては回顧談に座を賑わす。
花魁たちの物珍らしげに輝く目が殊更に山陽の話をはずませる。
春の夜は妖艶、酒肴妙趣、揺れる灯下に母は子を、子は母を見て心楽しむのであった。
山陽が厠に立ったとき、供人があとをつけてきて山陽の袖を引っ張った。
「先生、大丈夫なのですか、懐具合の方は。ほどほどになされませぬと――」
「なあに、心配いらぬわ。山陽の全財産叩き出して母上を歓迎しておるのじゃ。些事に拘わるでない。金というものはな、天下のまわりものと言うではないか、わしの懐には天下の財が集っておる、顔色をかえるでないぞ」山陽は言下に一蹴して取り合わない。
「これぞ男の意気地、男の本懐じゃ」山陽は大声で叫びながら席へ戻った。
「母上、いかがですかな、島原の夜は」
「結構ですぞ。うれしき一夜が持てました、よい冥土土産にもなりましょう」
「まだ物足りませぬな」
「もうひとしきり騒いでくだされい」斯う言い終えて梅颸は不意に笑いがこみあげてきた。
〈久太郎が遊び好きなのは、この母の血が流れているせいじゃ……血とは争えぬものよのう……〉
「母上、なにも然様喜んでおられますかな」
「いやいや、ともかく可笑しうて――」
噴き出して笑う母の顔を見ながら山陽も笑って言った、
「母上の、この喜びよう、伴山陽、冥利に尽きます」
「親のこころ、子知らずとは、よう言うたものじゃ」またしても梅颸は笑う。

「なんと仰言られましたか――」

母と子は顔を見合わせ、またしても笑いこけるのであった。

木屋町の家では梨影ひとり静かに留守を守っていた。

〈いまごろ、嘸おさわぎになっておいでで――〉梨影は酒宴の模様をあれこれと思いうかべてみる。ありったけの金子を用意してくれと両手を合わせて出掛けて行った夫山陽の姿を思いだしては梨影の顔は綻ぶのである。

傍若無人、飄として旅に出、忽として舞い戻る夫ではあるが、梨影には山陽の心のあたたかさが嬉しいのである。世の人は傲慢なりと蠻蹙もするが、それは山陽の心奥の琴の音に触れていないからであると梨影は思っている。誰がなんと言おうとて構いはせぬ、わたしの背の君なのだから……と思う。

いま、母を迎えての散財ぶりも、父春水を失ったあとの心喪の折の山陽の心姿を思うと素直に頷けるのであった。さびしさが一挙に炎となって燃えあがる。

〈母上さまに甘えておいでなのだわ……〉子供のような夫を思うて梨影はそっと笑ってみる。

なんの屈託もない、天真爛漫なのである。明日の家計など意にも介さず思う存分の孝養に心を投げだす夫山陽である。梨影にしてみれば無用の出資の快い筈はない。が、夫の散財が無性に快いのである。

〈明日のこと、考えてみても仕方がない……それよりも今宵は存分楽しん戴かねば……〉

春の宵風は戸の隙間を縫うて梨影のこころを和ませる。こまごまと、それでいて大様に片付けをすると夜具を敷いた。

サラサラと鴨川の水の流れが音を立てている。二条通りの家から引越して来てから未だ日は浅

く、妙に落着かぬ思いもするのだが、川越しに眺める春のたたずまいは実にすばらしい。夕暮に沈みゆく眺望を堪らないほどに梨影は感じる。夕靄の彼方に人の世の幸せを感じるように思う。そんなとき、梨影は、わたしは田舎者なのだと思ってしまう。鈴鹿の山脈を仰ぎ、日野川の水音を耳にして育っただけに、町なかの家にはどうも馴染めない。その意味でも、窮屈さを伴うとはいえ、移ってきた此の借家はありがたかった。山陽の帰京の前に既にして手配して移ったのであった。

〈母上さまと映雪尼さま……いえ、母上さまと――〉梨影は山陽の臥所を母の傍に整えた。

〈お二人で、ごゆるりと喋っていただかなくては……〉梨影には夫のこころがわかっていた。

台風のような唐突の歓迎準備あれこれで、いささかの疲れのせいか梨影がうつらとまどろみかけたころ、俄かに門口が賑やかな声で揺れた。

「御帰宅でございますぞ、なにとぞ御出迎えを――」

山陽の一段高い声がひびく。

「然様に大きな声を出さずともよいに――」梅颸の声も冴えて鳴る。

「極楽、ごくらくでした、花魁の美しい姿も目の保養になりました――」

「花魁の総あげ、実にすがすがしき思いでしたな。この山陽、一世一代の晴舞台というやつで。父上、今宵は母上に喜んで戴きましたぞ――」

二人のやりとりを聞きながら梨影は真実うれしいと思った。斯うした母と子の関係が不思議にも思える。それほどに美しい繋がりなのだと思う。近江の片田舎での日々には想像もつかぬ世界なのであった。きょとんとしながら、それでいて心はほのぼのとする。

夜具に身を横たえてからも二人の話は尽きそうもなかった。

「やっと、お休みになられましたな」

映雪尼の声で梨影は我に返った。それまで梨影は想念の世界に戯れていた。山陽さまは甘えん坊であったに違いない、母君も随分と甘やかされていたに違いない……父君は、そう、春水さまは厳しいお躾を仕込まれたに違いない……幼ない日々はどのようにしてお過しであったろう……わたしとは全く別世界の日々とは如何様のものかしら……不思議なことに、見知らぬ昔の山陽親子の姿が、幼な顔の夫の姿が浮かび上ってくる。随分と我侭な……と腕白ぶりに苦笑してしまう。話に聞いた安芸の国竹原あたりの、塩田の光景が梨影の瞼に映し出されてくる。わしの幼名は久太郎じゃった、祖父がな、名づけける久太郎とも呼びかはす千代をこめたる鶴のもろ声——と言うて名付けられたものじゃ、わしは、わしの声は鶴じゃぞ、笑いながらの夫の顔も入りこんでくる。母君の懐に抱かれた夫の甘えた姿が目前にある。今が昔となり、昔は今となる、そうした想念の世界で梨影はまどろんでいたのであった。

〈明日は何処へお出掛けなさるのかしら……〉フウと息を吐き、梨影は静かに眠りに落ちていた。

山陽は母の傍に臥して眠りのなかで呟いていた。

——蓋し我が朝の初め国を建つるや、政体簡易、文武一途、海内を挙げて皆兵にして、天子これが元帥となり、大臣・大連これが偏裨（補佐）となる。未だ嘗て別に将帥を置かざるなり。豈に復た所謂る武門・武士なる者あらんや。故に天下事なければ則ち已む。事あれば則ち天子必ず征伐の労を親らす。否ざれば、則ち皇子・皇后これに代り、敢てこれを臣下に委ねざるなり。

眠りのなかで山陽は筆を馳せている。時折、司馬遷の顔が浮かび上る。「史記」の世界が明滅する。わしなりに史書を編まねばならぬ、父上の遺志を継がねばならぬ、なんとしてもな……大事業じゃわい、これから先、何年かかることかわからぬがな、わしの信ずるところを世にのこさねばならぬ。筆は山陽の意をたいして一瀉千里に走りつづける。

目覚めると山陽は言った、
「さァ、今日は何処へ御案内つかまつりますかな、祇園がよろしいな、祇園へ参りましょうぞ。明日は瑳珂野、嵐山ですな」
「梨影、それでは出掛けてくるぞ」山陽の此の言葉は、このところの口癖のようなものとなっていた。数日後、この言葉を残して山陽は母を伴って吉野へと向った。
四月四日、折しも雨であった。花は既に散っての新緑の吉野山であった。
「母上、花はなくとも、これ、この筍を召しあがれ、蕨もございますぞ」山陽は酒を注ぐ。
箸をとり、盃を酌む母の姿を見ているうちに山陽は涙を落とす。
〈慈眼自ら十分の春あり……花なくとも、喜んでくだされる母上のお顔にこそ真の春がある、ありがたいことじゃ、吉野まで御案内した甲斐があったというものじゃ〉
その足で当麻寺、法隆寺へも参詣した。大坂へ出て芝居も見て京へ舞い戻って来た。
「京へ来てよかった、梨影どのにも逢えた、久太郎もよう尽くしてくれた。……随分と楽しい目にあわせて貰いました」
「いやいや、これからですぞ。近江の琵琶の湖をお見せ致しますほどに――」
近江と聞いて梨影は不図姉のことを思った、無性に逢いたいと思う。心に杖をつかないかんなァと教えてくれたのも姉であった。姉の一言で小石家奉公にあがる踏切りがついた。そして小石家の養女となり、いま山陽の妻としての私が存在する。この世は目には見えぬ不思議な糸が繋がっていると梨影はしみじみと覚えるのである。
山陽の母案内は毎日続く。そのことのみしか山陽の頭のなかにはないかのようである。いまのところ、書も筆も忘れられたままである。それでいて、いつのまに書くのか机の上には稿が置いてあ

る。

「梨影、わしは母上を送って安芸の国まで出掛けるぞ、留守居を頼む」

下旬、この一語をあとに嬉々として山陽は旅立って行った。

母を乗せた輿の傍に寄りそうようにして山陽は歩いてゆく。

そうした母子の姿を見送っていると梨影は思わず熱いものが込み上ってくるのであった。

山陽の脳裡に思わずに二十二年前、江戸へ向った折のことが甦って来た。道がある、その一筋の道を叔父の杏坪に伴われて江戸へと向った。あの折の心意気が、あの節の表し難い思いが、まるで昨日のごとく甦ってきた。ひしと歳月の流れというものを覚える。あの旅立ち途上で詠んだ詩句が思い出される。

刀折矢尽臣事畢、北向再拝天日陰、七生人間滅此賊……七たび人間に生れ此の賊を滅さん、碧血痕化し五百歳、茫々春蕪れて大麦を長ず……幾たびとなく山陽は口遊んでいた。自然のたたずまいのなかに歩をあゆませながら山陽のこころは楠公のことを思っていた。

道をゆかねばならぬ、己れの道を儂自らの足で辿らねばならぬ、千古青史に列せん、為さねばならぬのじゃ、畢生の大業を――踏む足取りも力が籠り、清清しいおもいで山陽は足を早めるのであった。

その六　京のひと日

鴨川の水波の美しさを眼下にして、仰ぐと三十六峰がまのあたりに迫ってくる此処山陽の書斎であった。

儂の終焉の場所じゃぞ、山陽は今の住まいが大いに気に入っていた。花に佳し、月に良し、雪にもよきで、もはや引越しなどの要はないと山陽は満悦であった。文政五年秋に京で六回目の引越しという仕儀で此の家に落着いたのである。しかもこれは今迄のような借家ではない、自分の家なのである。山陽は鼻たかだかといったところである。

春は去り、夏は来り、幾たびかの歳月は流れた。

ひとり筆を執りながら、目にうつる花雲を眺めていると妙に淋しい思いがしてならないのである。

「梨影！　お茶を持って来てくれんかな」

山陽は大声で叫ぶ。

背後の棟の建物、水西荘と名付けていたが、そこまで声を届かせるには可成り大声で叫ばなければならなかった。

「ハーイ、ただいま――」梨影もまた大きな声で応える。

「あなたさまは、この山紫水明処に、おひとりなので、お淋しいのでしょう？　きっと――」梨影は茶を注ぎながら山陽を揶揄する。

「いや、別に。ただ、なんとなく筆が運ばぬのでな、なんとなくな――」
「いまは何をお書きに？」
「ウム、八大家文評語は先年仕上げてしもうたしな、目下、ホラ、以前の住居の薔薇園小稿、あれを見直しているところだよ。あの薔薇は見事だったな、儂の自慢の一つだった、荒れたるを鋤き、樹を植えて汗衣をぬらす、やや覚ゆ園容緑よもにめぐるを、更におもう南籬の春寂莫たるを、また疎雨に乗じて薔薇を挿しはさむ――あの頃、吟じた詩だったが……」
両替町に住んでいた折、山陽は薔薇を育てた。疲れた頭を癒すには花づくりは打って付け、これぞ我が薔薇園と自慢であった。
〈棘でよう指を突いたものじゃった……美しき花は棘で人を寄せつけはせぬ、この儂にも世人は棘ありと顔顰めよるが……わしには不滅の花が咲いておるということよ〉ニヤリと山陽はひとり笑いをする。
「今年は細香さまは、お見えになりませんの？」含み笑いを抑えながら梨影は尋ねた。
「そうだよ、どうしたことか、一向にな……」
「だから、この春に格別おさびしいのでは？」
「……」
「お便りでもお出しになられましては？」
「ウム……」
「そうなさいませ」
「せっかくの春が泣きますわ」
梨影は矢継早に話しかける。

さしもの山陽も、些か梨影の前ではたじたじの態になってしまう。
「……」山陽は黙りこくっている。
〈また、お困りなっておいで……細香さまとは絶ちきれぬ前世からの御因縁らしくて、わたしに内緒で度々お便り、それも恋文を書き送っておいでになる、それがわたしの背の君山陽どの。……でも、思い返してみると、細香さまの存在には随分と泣かされてきたもの、でも、もう今は何の屈託もない、わたしには、復蔵もいる、それに昨年には三樹三郎が生れたし……長男の辰蔵が死んだのが昨年の三月……〉思わず梨影は涙ぐんでしまった。
まだ五歳の可愛い盛りであった。梨影は叩きのめされて人の世の儚さを思った。母親となって初めて失うわが子であった。復蔵がおる、それに間もなく児が生まれる、気を落してはならぬと励ましてくれた夫の目に涙がうるんでいたのを梨影は覚えている。その淋しさを紛らわせでもするかのように山陽は紀州へと旅立って行き、それだけに殊更ましての哀しみに沈んでいた日々が思い出される。山陽が紀州から舞い戻るや、五月に三樹三郎が生まれたのであった。哀しみと喜びとが織りなして人の世を身近かに色彩どる。
〈秋には安芸へ旅立ちなされたのだったなァ……〉あわただしかった昨年のことを梨影は噛みしめて思い出していた。
「どうした？　また辰蔵のこと思い出しているんだな、諦めなさい、此処には二人の男の子が、ちゃんと居てくれるではないか、後顧の憂いなしというところだぞ」
「ハ、ハイ……」袖で涙を拭いながら梨影は、いそいそと別棟の水西荘へと戻っていった。
そのあと、山陽は机の抽出から、そっと桜の押花を取り出し、最も愛すべきは風流江馬細香云々としたためて、こっそり書生に細香宛で便を托した。

〈世間では色々と取沙汰しているそうだな、儂が梨影を連れて出掛けるようになって以来というもの、皆が駱駝と笑うとる由。うがったことを言うものだわい、梨影と細香を背負うた山陽というわけか……〉苦笑しながら山陽は再び机に向う。

机の傍には昨年書きあげたばかりの日本外史の新稿本が置いたままである。

何気なしに、つと手を伸ばして稿を繰る。

余、しばしば摂播の間を往来し、謂ゆる桜井の駅を訪い、これを山崎の路に得たり。一小村なるのみ。過ぐる者、或は其の駅址なるを省みず。蓋し、足利・織・豊の数氏を経て、世故変移し、道里駅程、従いて輒ち改まれるのみ。余、是に於て低回、去ること能わず。金剛山の雲際に嶷立するを願望し、公の義を挙げし秋、及び、其の子孫の拠りて以て王室を扞護せしことを想見せり。公の行在に詣りて、天子に対えしを観るに、曰く、臣の未だ死せざるときは、賊の滅びざるを患えざれと。夫れ一の兵衛尉を以てして、居然として天下の重きを以て自任す。豈、値遇に感激して、身を以て国に許すに非ざらんや。故に能く赤手を以て江河を障え、天日の既に堕ちたるを回えす。何ぞ其れ壮なるや――

〈奇しくも楠公のくだりが目をとらえるわい……〉山陽は、一小村なるのみ、一小村なるのみ……と無意識のうちに口遊んでいた。

歴史を回顧しながら山陽は憤りに似た哀しみを覚える。その哀しみが山陽に筆を執らせるのでもあった。忘れられてはならぬ、埋れてはならぬ歴史の足音を世の人は耳かそうともせぬではないか。

「どうも今日は筆が運ばぬわい」山陽はゴロリと横になった。

〈世の中も目新しい事態が起って来ておるらしい、エゲレスの船が陸奥沖に姿を見せおるというこ

とだが……今の儂にあるのは学問のみ。それもな、君子の儒学、君子の儒学でなければいけないのだ、門下の連中にも、この事だけは、しかと叩き込んでおるのだが……〉

ハタと立ち上ると山陽は下駄を履き、水西荘の方へ向っていた。

一昨年にはエゲレスの船は常陸に姿を見せ、薩摩にも出現していた。足立左内が露西亜学筌とやらを幕府に献上したという噂も山陽の耳に入っていた。

わが敵は正に本能寺に在り、敵は備中に在り、汝能く備えよ――なんとなく山陽は口遊んだ。

〈敵とは何ぞや、これを見定めねばならぬわい……〉

「お仕事の方は？」

「今日は疲れてしもうてな、まァ、三樹でも抱いてやろうわい」

山陽は梨影の手から三樹三郎を抱きとって「オオ、よし、よし」と、あやしはじめた。

「赤子は無心であどけないな、世の汚れを何ひとつ知らずにいるからな」顔ほころばせ三樹三郎を抱く山陽の袖へ復蔵が縋りつく。

「オオ、おまえも此処にか――」山陽はニコニコと笑う。

〈全く、なにもかもを忘れさせてくれるな……〉ひととき、山陽も無心になって相手をつとめている。

そんな姿を見ていると、梨影は、ほんとに幸せだと思うのである。

「そうだ、近江の理山法師、ちかごろ香川景樹どのの処へ見えはせぬのかな、京へ来られたら我家へも来られるよう頼んでおいてくれるのだぞ」

「ハイ、それはもう――」

理山法師は近江蓮光寺の住職である。歌道に熱心であって、四条小春亭で香川景樹の門に入って

いたのである。山陽の母梅颸もまた景樹の門下であった。梅颸の里である飯岡家の祖は近江の佐々木家である。思わぬところ、目には見えぬところで人と人とは繋がっているものだと今更ながらに梨影は思う。

「この子たちも、理山法師のような御仁に可愛がって貰うとよい、おおらかな心が肝心だからな」

「理山法師さまは昨年奥方さまをお迎えになられましたとか……」

「そうだったな、景樹どのが申されていた、理山法師の熱心さには頭が下るとな。いや、歌だけではないぞ、学僧としてもな」

山陽は二十七歳の学僧理山の将来を頼もしく思っていた。謹厳であり、気骨あり、節操高い理山の並々ならぬ資質を見抜いていたのである。この御仁は必ずや大物になるにちがいと洞察をする。それよりも理山の人柄に魅せられていたとも言える。

「広島のお母様は今度は、いつ御上京なさいますかしら？」

「来春にでもなれば、また出て来られよう、あの齢で、なかなか遊び好きだからな……」

「あなたさまは、その御感化をお受けになられましたのかしら……」

「なんの、なんの、あれは七年前の折だったかな、島原の廓で花魁を総あげして遊んだのは……母上は大喜び、だいたい、母上は遊び好きなんだな。しかし、あの折は、おまえにも苦労かけてしもうた、我家の財産悉く投げ出したような散財ぶりだったからなァ……」

「お喜びになられた、そのことだけで、わたしは嬉しゅうございました。お金は天下の回りものとやら、なんとかなるものですもの」

「母上はな、あれでなかなか厳しい躾を受けておいでなのだな。飯岡の父上からは、静子よ、これは母上の本名じゃったな、未練なこと言うてはならぬ、泣いてはいかぬ、秋の霜のごとく厳しくあ

れと叩き込まれておいでじゃ。さればこそ常にあのように健気に振舞うておられるのだな。……歌を詠まれるのも気をはらしておいでなのだ、ともかく、沈むことがお嫌いなのだな」

斯う言い終えて刹那、山陽は冷水を浴びたように我身のことが思い出された。

〈……昔の儂は随分と母上に気苦労をおかけしたものじゃ……昔の事を知る御仁から話を聞けば聞くほどに、まさに慙愧、いや、それどころではない、己が罪は死に値する……然様な儂を抱えて母上は……沈んではおれぬ、凛然と起ち居振舞、育ててくだされたのだなァ……明るく、陽気にと言う御姿はその辺から生じたのではないか〉

〈母上の遊び好きも、謂うなれば、この山陽めの為せる技かも知れぬ……〉身勝手な解釈をして山陽はクスリと辛笑いをした。が、今の山陽には、それも許して貰えるとの自負もある。

「梨影、今日は、ふたりして画でも描いてみないか、どうかな」

「ハイ、早速、支度いたしますから――」

山陽の胸から三樹を抱きとり、蒲団に寝かせ、「復蔵も、ねんねしなさいよ」と其の傍へ横に伏せさせると、梨影はあたりをこまめに取り片付けた。

「儂はな、三十六峯だな、梨影よ、おまえは何を描くつもりだ」

「わたしは花、それも蘭が大好きなので……」

「きまった、今日ひと日、ゆるりと画を描くことにするかな」

山陽と梨影は黙って筆を走らせている。

〈竹のことは竹にならえ、松のことは松にならえ、蘭のことは蘭にならえ……〉梨影は、そっと口遊さんだ。

梨影が山陽から画の手ほどきを受けてからどれほどになるだろうか。筆は幼く、心は拈れている

なと幾たびとなく山陽に笑われたことか。それがもう今は山陽の傍で、ともどもに絵筆を運ばせている。

山陽には一つの夢があった。青史に列せんとの大きな志とは別に、家に在って妻とともに画を描きたいもの、世の俗塵から逃れ何の蟠りもなく妻と画の世界に浸りたいもの、妻と一緒に絵筆を持つ、山陽は昔から頭に描き心におもいつづけていたのであった。それだけに、梨影が画を習いたいと言った折の山陽の喜びようは一通りではなかった。儂の些かな、いや、大きな夢が叶えられる、それこそ児の手をとるように山陽は梨影を仕込んだのである。およそ風雅とは縁遠い妻がひたむきに風雅のこころをとらえようとする、それが無性に嬉しかったのである。過ぐる年に描いた耶馬渓の図巻を梨影が山陽の思うとおりに評したときには、天下一品の図と当代一流の大家が評した以上の喜びを覚えたものである。倨傲を装う心の奥底に潜むさびしさを和めるものへの希求があった。学問の世界では常に敵が在る、儒者たちの白眼視がある。山陽にとって敵ごときはなにものでもない。むしろ、それは快感ですらあった。が、山陽もまた人の子、ホッと一息したい、心の救いが欲しかったのである。妻と静かに絵筆を馳せる、斯様の長閑な安らぎが他にあるだろうか。

多年描きつづけた夢の世界に、いま山陽は陶然としている。梨影は懸命に蘭を描いている。

「そうだ、そのうちにな、梁川星巌どの、紅蘭どのが見えられるかも知れんぞ。その折にはな、斯うして二人で画を描いて贈物にして進ぜようではないか、名案だろうがな……」

「ハ、ハイ。それまでにもっと上達しておかねば……」筆を走らせながら梨影は言う。

「あの夫妻はな……」山陽は四年前に初めて出逢った日のことを想い出していた。

〈紅蘭どのは着飾っていたな……それを、さも得得と星巌どのが見守っていた……あれは、うら若い女房を儂に見せつけに来たようなものじゃったわ……〉

〈儂は話して進ぜた、筑紫路の旅をな。雲か山か呉か越か、水天髣髴青一色――儂の話にのせられて、二人は旅に出てしもうたわい。こたびは儂が土産話を聞く番じゃ。それにしても長い旅よ、新妻を伴うて四年もの旅をつづけるとはな……江戸での放蕩三昧も噂に聞いてはおったが、二人揃うての旅で星巌どのも身を落着かれたことじゃろうわい……〉　旅と聞き、旅と思うと山陽は心が躍る。この一年は山陽は草鞋を履いていないのであった。

「それはそうと、ただひとつだけ、お尋ねしたいことが……およろしゅうございますかしら……」

「なんの遠慮がいるものか、言ってみなさい」

「……細香さまと、この梨影と、どちらをお思いになっていらっしゃるのでしょうかしら……」

「そ、それはだな、つまり、この山陽に惚れているのだよ、細香どのがな。ただ、それだけのことだぞ」

「あなたさまの方は如何なものでございましょうかしら?」

「つまりはだ、梨影と細香どのとの両者の橋渡し役をしているようなものだな、両者が喧嘩をしてはいかん、万事うまくゆくようにとな」

「まァ、身勝手なこと仰言って……ホホホ……」　梨影は思わず声を出して笑った。

細香と名を聞くや、目の色を変え、そわそわとする夫山陽なのである。自分が妻の座に納まる以前から細香と夫との深い繋がりがあったことを梨影は充分知りつくしている。当初、細香を恨みはしないまでも梨影にとっては心の重荷であった。才智ひらめく細香に較べて私は……と幾たびとなく泣き濡れもした。そのたびごとに、負けてなるものかと歯を食いしばり、そして今日がある。いまとなっては梨影にとって細香は恩人ですらある。いまの梨影を創りだしてくれた契機は細香の存在であった。複雑な心でないと言えば嘘になろう。が、それを乗り越えたところに今の梨影の心は

ある。わたしの背の君は山陽さま、ただそれだけで充分である。細香さまは細香さま、梨影は梨影なのだと思う。そうした心でいて狼狽する夫の姿を見ていると子供のように思えてくるのである。幼な子であった、それ故に邪心がない、偽りがない、赤裸なこころである、そんな夫山陽をいとおしく思うのでもあった。

〈細香さまはどうなさっておいでかしら……〉心から梨影は細香の身を案じる。

「儂の詩にもあるだろうが。復蔵の生れた年、除夜の鐘に耳傾けながら吟じた詩、覚えておるかな？　妻は旧債（借金）を償い了し、児は新衣を著し成る、合家（一家）あい喚びて坐り、杯を煖めていささか相傾けり――あれが儂の心なんだよ、梨影だけは分ってくれような、必ずな。儂には、おまえが居てくれなくては何も出来はしないのだぞ、梨影あっての山陽だ、この事は、この山陽が身にしみて一番よう知っていることだ、なァ梨影よ」

「杯を煖めて、いささか相傾けり……あい傾けり……」くちずさみながら梨影は、あの除夜の鐘に耳そばだてながら、夫山陽と盃を酌み交わした夜のことを思い出していると、広い天下に山陽と自分だけしか居ないような気持が湧いて来、夫に仕える誠心一筋に生き抜いて来た日々が嬉しく甦ってくるのであった。

「いったい、儂はいくつになったのかな？」

「御自分の御年、お忘れになるなんて……梨影の御主人さまは四十七歳でいらっしゃいますの……」

「そういう梨影は？」

「わたしは三十歳の……」

二人は黙って再び筆を走らせる。ひそまりかえったひとときが流れた。山陽も梨影も絵筆に心を

凝らせている。

暫らくして山陽はやおら筆を擱いて、フウと息を吐いた。

「青山一座翠沈沈、萬態浮雲自古今、美しくひそまりかえる山の峯はなんとも言えんわい、自然は悠久じゃ、不滅じゃな。斯うして眺めていると山の無心がわかるような気がしてくる、無心が不滅の命を宿すのじゃな」

「どうだな、蘭は……」

「ハイ、もう少しで……」

「ウム、なかなかよう描けておる、蘭のいのちが内に秘められておる——」

「……」

「そのうち、蘭を求めて山へでも出掛けることとするか。駱駝、らくだと皆に揶揄されながらな、そもまた一興だわい」

〈余一も藩の学問所に仕えておる、頼聿庵としてな。郷里のことは、もはや心配せずともよい、ありがたいことじゃ〉

六年前、余一が妻と別れたことを知った折の山陽は肺腑を抉られるように心を痛めた。昔日の苦渋が山陽の身を嘖んだのであった。国を出奔して京へ出、連れ戻されて座敷牢、そして妻淳との離婚。その淳の産んだのが余一である。不幸な翳りを背負わした余一のことを山陽は人知れず心に病んでいた。養育はすべて母梅颸の手に委ねられていたとは言え、山頼の長男であった。余一が妻を棄てたとき、山陽は淳を棄てた我が身を思ったのであった。その余一も翌年にはあらたに娶ってくれた。郷里の頼家の跡を継いでいる。近頃は、なかなか学問の方も進んでいるようである。忘れていたのではないが吾が掌を離れての余一のことも一応安堵の態である。

「唐の国ではな、蘭を正月に飾るのだよ、報歳の蘭と言ってな。……蘭は清らじゃ、犯し難い美しさがある、俗塵を避けて、ひとり静かに佇まう……無言の啓示があるな」

〈蘭のことは蘭にならえ……〉梨影は心のなかで繰り返した。

「蘭のような女に……」

「なに、蘭のような女とな、ウム、梨影よ、よう思うてみれば、おまえは蘭の花じゃ、蘭女と名付けようわい」

「からかわないでくださいな、わたしが蘭女だなどと……」

「いや、まことじゃ。この山陽、嘘は言わぬ」

「心にもないこと仰言るものではありませんわ、あなたさまの煽てには梨影はのりは致しません」

二人は顔を見合わせ、ひとしきり笑った。

文政九年の、あたたかな京のひと日であった。

この年、山陽は精魂傾けて日本外史の最後の仕上げに毎日を費していた。思えば筆を執ってより二十余年の歳月が経っている。余生いくばくもなし、なんとしても千載に残さねばならぬ、あの折の父春水の無念さが我が心に甦ってくる、春水の鑑古録が何故に焼かれねばならなかったのか、幼なき日に垣間見た父の苦渋苦悶の顔が今なお焼きついていてる。幕府に阿る藩の力に依って春水の修史事業は瓦解させられた、その無念。それを思うと山陽の筆は力が籠る。推敲、一字一句練りに練り珠玉と開花させて文を整える。幾たびか読み返し筆を入れる。雄渾流麗に筆は躍る。

源氏・新田氏・足利氏・徳川氏と武家時代を論述して二十二巻となった。

〈これで死んだとて、もはや悔いはないな……〉

束の間に日々は流れた。山陽の眼窩には一際の凹みが目立っている。

「すこしはお休みにならないと……」
「是が非でも此の年末までには仕上げたいのだ、猶予できぬ、多々思うところあってな」筆を執ったままで山陽は茶を服んだ。
梨影は黙って山陽の背に羽織りを掛けた。いまは何も言っても無駄だと梨影は知っている。
〈はよう御仕事が完成しますように――〉そっと梨影は席をはずした。
「コレコレ、そんな悪戯をして――」
復蔵が三樹を相手にふざけている。見ていても危かしい。幼な子たちは無心の技、無心のこころである。
「サア、こちらへ来なさい、御仕事の邪魔になってはいけないから……」梨影は子供たちの嬉声を嗜める。
師走に入って間もない日であった。深閑とした山陽の部屋から突如高い声がした。
「梨影、酒、酒じゃ。酒を持ってきてくれい――」
何事かと駆けつけた梨影の前に山陽は一詩を示した。
「これじゃ、これをな――」
「……」
「出来たのじゃ、外史が仕上ったのだよ」
「よいかな、二十餘年成我書、書前酹酒一掀鬚、此中幾個英雄漢、諒得吾無曲筆無。二十余年、我が書を成す、わが人生の大半をかけての日本外史が完成したのじゃ。書前、酒を酹いで一たび鬚をあぐ、この外史を机上に置き、地の神に酒をそそぐべし、そして大いに盃を傾けるべし。このうち幾個の英雄漢、儂の論述した外史のなかの英雄諸氏よ、儂の偽りなき筆を、然り然りと悟って戴け

るかな、わが曲筆なきを諒得するやいなや。梨影よ、喜んでくれ、仕上ったのじゃぞ、日本外史がな」

「おめでとうございます」あとは言葉にはならなかった。

山陽と梨影は凝と机の上の日本外史の稿を見詰めている。

「アッ、お酒を――」思い出したように梨影は立ち上った。

「復蔵も三樹もこちらへおいで――お祝いなのよ」梨影の声は華やいでいた。

「自ら覚ゆ　筆辺に瑞雲の生ずるを――めでたい雲が湧きあがっておるぞ、必ずや此の仕事は千載に光を放つ――」山陽は満悦の笑みを浮かべる。

「あァ――」　一息つくと矢庭に全身の力が抜け出るように思われた。味わうように酒を飲む。

「滅法うまい、此の酒の銘柄は？」

「剣稜ではないのです、京のお酒なのですが――」

「ウム、酒は伊丹に限る。だが、今日は京のがうまい、結構々々」

「サァ、梨影、おまえも――」山陽は梨影の手に盃を差し出す。

「いいお正月が迎えられますわ」

「来春からが勝負だぞ、やらねばのう」

「……」

「儂の仕事を世に出さねばならんのじゃ、広く、のちのちの世までな……世に出すということは、なかなか難しいことよ」　山陽は腕を組み天井を睨みつけた。

「然うじゃ、復蔵、おまえも飲むか」

「困った父上さま。復蔵はお酒など飲みは致しません。悪い父上さまですこと」梨影は山陽を睨み

つける。
「またお小言を頂戴してしもうたわい。おまえの母上は怖い御仁ですぞ、まことに」
「それはそれは怖い母上さまなのですよ、おいたは出来ませんよ――」　梨影はもう一度、山陽を睨んでみせる。
「オオ怖い、怖いぞ」　山陽は巫山戯る。
〈年があけたらば工作をせねばならぬな……すべては来春のことじゃ、今日はしたたかに酔うことじゃ〉
暮れなずむ水西荘には、ほのかな燈火が揺れていた。
明けて文政十年、山陽は頻りと智謀をめぐらしていた。心血を注いだ労作が世に出るか否かの瀬戸際でもある。処世の術を嫌う山陽ではあったが、いまは、なんとしても処世の巧みを身に備えねばならない。なまじ京に蠢く儒者たち相手の巧みではない。世を動かす大きな権勢の相手のそれである。
〈ウム、術はある。あの御仁を動かさねばいかんな、先ずは御墨付なるものを戴くことじゃ〉
〈山陽ここに在りと儂の真価を世に問わねば……〉
「えろう御思案のようでは……」
「目処はついたぞ、心配はいらぬ。儂の日本外史、日の目を見せねばのう――」
〈一つの賭じゃな、白と出るか、黒と出るか――〉
山陽が一つの賭に挑もうとしている頃、俄かに山陽の周辺はあわただしくなった。母が叔父の杏坪を伴って姿を見せたのである。迎えにやらせた弟子の宮原士淵を含めて七名の入京であった。母梅颸の入京は三度目である。賑やか好きの山陽である。梨影は接待これ努める。と言っても母は家

のなかに席をあたためはしない。連日、花を賞で、能を見物しといった具合で山陽と出掛けている。

「細香さまがお見えですわ、大槻さまと御一緒に――」　梨影の声が弾んでいた。

「オオ、これはこれは――」山陽は嬉々として迎え入れた。

〈大槻磐渓ごときには用はないわ〉山陽の心は磐渓を撥ね付けていた。

「小石元瑞どのにもお逢いして参りました。今日は細香どのに案内して戴きました」

「それはそれは――」山陽は磐渓の父と細香の父と細香の父とが知己であることは知っていても、どうも気に食わぬのである。青二才が儂に何の用あってと不機嫌であった。

「大槻さまが詩を見ていただきたいと申されまして――」細香は山陽の心のなかを見て取って傍から言葉を添えた。

「それでは一応拝見致そう」

磐渓の詩を眺める山陽の表情が急に明るくなった。

〈これはよいものじゃ、なかなかの資質がある〉磐渓に詩文の才ありと見届けると山陽は掌をかえしたように心がやわらいでいた。

「細香どの、よき御仁を連れて来てくだされたな」

細香は、にっこりと笑った。気に入るや直ぐさまに仲間とする山陽の性質を細香は知っていた。これでよかったのだわと細香は安心した。

「お客さまが多勢お見えのようでございますのね」

「相変らず書を揮うていましてな、なかなか繁盛しておりますぞ」

「あッ、母上さまもお出でございましたか――」細香は顔をのぞかせた梅颸に一瞬表情を改めて挨

拶をした。
「先年京へ来ました折には随分と世話になりました」梅颸は淡淡と言う。
皆は寄り集って話がはずむ。杏坪と細香は妙に馬が合う。
「叔父上、七十のお年とは見えませぬな、なかなかのお達者ぶりで――」
「ウム、儂はな、心も若い。じゃに依って細香どのとも気がよう合うわい」
「細香どの、この叔父上はな、郡奉行をもなされたが、全くもって役人づらが無い。そもそもが詩人として名を為さるべき御仁であった……」
「これこれ、儂は藩の仕事に身を粉にして仕えたのじゃぞ」
「御尤も御尤も、よう承知致しおります。叔父上は、ともかく新しい、どう申せばよいか……」山陽は杏坪の詩に感化されている自身のことを思った。それだけに今日まで山陽は格別の親しみを杏坪には覚えて気楽に接して来たのであった。
「そうじゃ、梨影どのもこちらへお出でなされ」杏坪は梨影を叫び寄せた。
「斯うして二人を眺めおると気持がなごむわい」杏坪は細香と梨影を交々に見詰めている。
「よき女ふたり、山陽めも幸せじゃわい……」
「世上では、駱駝と呼びおります、山陽の駱駝と……」
「駱駝とは至言、まさに然りじゃ」杏坪は呵呵大笑した。
「山陽さまと梨影さまとの仲がおよろしいので世間では噂しておりますのよ、山陽さま在るところには常に梨影さま在りなのでしょう……」細香は弁解めいて説明する。
〈世間では細香どのの言うとおりに評してはおるが……儂にとっては二人が駱駝の瘤ふたつじゃな……〉くすぐったい思いの山陽ではあった。

山陽にとって細香は詩会を含め外交の場での妻であった。そして梨影は心癒やす家庭の妻なのであった。宜なる哉、駱駝である。

先日、嵐山へは二つの瘤を背に揺すりながら花見に出掛けた。

〈儂は駱駝なのじゃ〉山陽は呟く。

「こたびは満開の吉野山をお見せ致しますぞ」山陽の一声で皆は揃うて京を出た。

「母上、いかがでございますな、この眺望――」

「命こみうれしかりけれ老てのち　ふたたび見つるみ吉野の花――これですよ、母の心境は」

〈母上は六十七歳におなりじゃ……此山重到定何時、……重ねて到る、定めていずれの時ぞ、次はいつ訪れ得ることか――〉無性に山陽は淋しくなって来た。

「御陵の上には花が舞い散っておる、散りおるわ……延元陵上落花の風、落花の風じゃ、哀しいのう……」杏坪は南朝を慕って詩を口遊ぶ。

「南朝こそ正統ですぞ……可愛萬樹香雲暖、曽護南朝五十年、この芳しい花々こそが南朝を、吉野朝を暖かく護ったのですぞ」山陽は叔父と歩を同じうして山路を辿ってゆく。

〈対花重酔知何日、花に対して重ねて酔うはいずれの日なるかを知る……このような思いは果して再びはめぐって来ないのではないかしら……〉細香は細香なりに淋しい思いであった。

〈山陽さまと斯うして御一緒できて……でも……〉いまが幸せであるだけに一瞬心に翳りがさす細香なのであった。

京へ舞い戻ってからも細香は妙に心がやすまらないでいた。美濃から京までの道を幾たび往き来したことだろう。江馬家の別邸が京にあったからではない。ただ山陽に逢いたい、慕わしい心からのみであった。詩は山陽に逢うための手だてに過ぎないと細香自身思いさえする。頼細香と矢鱈と

書きしるした折の自分は何処へ行ってしまったのか、何故このように哀しくなってしまうのか、歳月は人のこころに翳りの足音のみを落すものであるのか、いまの細香は妙に佗しいのであった。その佗しさが思慕の情を殊更にかきたてる。花が散る、凋落、ふと、細香はわが身を思った。

〈梨影さまは三十一歳におなりの筈……わたしはもう姥桜……四十一……〉

〈意地悪、いじわる……山陽さまの意地悪……わたしだけの山陽さまでなくては嫌……〉細香は美濃の江馬家を訪れた折の山陽との出逢いを思い浮かべていた。

「必ず、また出て来てくだされよ」との山陽の言葉を嚙みしめるようにして細香は美濃へと帰って行った。

「面を輿窓に露わし阿爺を喚ぶ――わが子に父上と呼ばれるのは嬉しいものじゃな……」

「梨影よ、この石山寺でな、源氏物語の筆を執りはじめたのだ。紫式部がな。あれほどの大著をな、女の身で――。たいしたものじゃ」

「……」

梨影は、いつであったか元瑞に真顔で言われたことを思い出していた。おまえさんは謂うなれば源氏物語の明石の上だよ、己が身を犠牲にして生きる、献身的な女なのだな――あの折も梨影には唐突に明石の上と聞いても不得要領ですませてしまった。後日、紫式部が源氏物語を書いたこと知ったのであった。

「静女高風冠内家、何唯彤管逞才華、相公百事原無欲、不折一枝深紫花――正しく操だかい秀れた人柄は我が国第一じゃ、紫式部はな。静女高風内家に冠す。なんぞただ彤管才華を逞しうするや、紫式部は己が身の才智を筆を執り誇ったりはせぬ、朝廷貴族のこと悉く知っておったのじゃ、相公百事もとより欠くることなし。折らず、一枝深紫の花、紫式部の筆は生きつづける、とこしえに

な」

今回の旅は家族揃っての、梨影にとっては嬉しい近江路であった。常に留守居を守りつづける梨影の心は幼な子のようである。夫山陽と並んで歩いている。母上と子供たちは輿に揺られている。肺腑にしみて幸せを味っていた。

「細香さまはもう美濃にお帰りになられましたかしら……」

「もう帰っているじゃろうな……」山陽は感慨ぶかげである。

「それはそうと、京をお立ちなさる折の細香さま、なんだかお淋しそうでしたわ……」

「そんなことあるまい、喜び勇んで旅立ったようじゃがな」

〈なにかあったのだわ――〉女の直感で梨影は感じ取っていた。

〈ひょっとすると母上さまが何か仰言られたのかも……〉

叔父の杏坪は山陽の二人妻の態を、むしろ喜んでさえいた。が、梅颸の内心では孫たちの顔を見ればみるほどに細香の存在を疎ましく思えたのであるまいか。よしんば然うであったにせよ、母上が然様のことを口に出される筈はないと梨影は思い直した。

旅を終えると山陽は動き出した。男児の意気地いまぞとばかりに奔走する。返書を待ちわび山陽は苛立っている。書状を手にしては北叟笑む。そうした日々が流れた。

〈儂の論述せしところ、後の世に心留めて深う考えてくれよう――が、いまの世、果して……〉

〈大義名分なるものを明らかにと筆を執った。専横きわまりなきが失政を生ず。藤原氏をとくと見よじゃ。上古にては天子が親政であった、ところが今は武家権力と成り果ててしもうているではないか――〉

山陽にしてみれば、日本外史の行間を読みとることなく徒らなる言辞の挙げ足取りを怖れるので

あった。
〈新田氏は徳川氏の祖ではないか。天子への忠誠の臣こそ真の臣じゃ。ここのところをな、よう察知して貰わねばならぬ〉
なにはともあれ、日本外史を幕府に認めさせなければならない。
官学の総師たる大学頭林述斎の線は未だ結果が知れないでいる。江戸の市川米庵、それに昌平黌の儒官田辺石庵に依頼してあるのだが今もって定かではない。大学頭に認めさせれば天下を取ったも同然となる筈である。ここでも山陽は一線は崩しはせぬ。辞を低うして述斎に見て戴くのではなく、述斎に、外史を見せろと言わしめようと話を進めたのであった。
他は桑名藩への働きかけである。京の桑名の藩邸には不破右門が居た。田内月堂も居る。山陽は松平定信ならば外史の真価がわかって貰えようと考えていた。
山陽の苛立つ姿は梨影には辛かった。
「何をしておるのじゃ、石庵どのは何をしている――」
「桑名の藩邸からは何か言うて来てもよかろうに――」
此の日頃、山陽の独り言が頻りとなった。
〈こんな苦しみようをお見せになられたことは無かったのに――〉梨影は錐で心を突かれる思いである。心を癒すべく酒を勧めれば野放図に飲んでしまう。
「何故、わからぬ、儂の真価が……いや、わからろう筈はないのじゃ、木偶の坊にはな」
復蔵も三樹三郎も山陽を敬遠気味である。とにかく山陽は落着かない。梨影は梨影でぎくしゃくしている。
〈細香さまなら、こうした折、どうなさるかしら……〉ふと梨影は細香のことを思った。割り切っ

たつもりではいても矢張り梨影にとっては細香は恋敵なのである。ああ、梨影は溜息をついてしまう。

山陽の異常さは、いつまでも続きはしなかった。待ち望む吉報がもたらされたのである。それも山陽の思惑どおりに。

〈ああ、よかった――〉梨影は其の場に坐り込んでしまった。

松平定信が日本外史を読みたいと申出てきたのである。

「月堂どのをはじめ藩邸の方々、忝ない、かたじけない」山陽はひとり頭をさげていた。

はればれとした山陽の顔であった。目はゆくてを見て輝いている。唇をキッと噛みしめている。昨日までの山陽の片鱗すら見当りはしない。まさに男児の意気地ここに在りの感であった。

〈本意至極に候、至極に候――〉山陽は繰り返し呟いている。

「梨影よ、喜んでくれ。老公がな、松平定信どのがな、日本外史を読みたいとのことじゃ」こころなし涙ぐむ山陽の声である。

「……」　梨影は言葉が言葉とならないでいる。

思えば実にあわただしい日々の流れであった。梨影にとっては、確かにあわただしかった。近江への旅を終えて戻るや、山陽は叔父の杏坪と日野大納言資愛邸に招待され、五月には母、叔父の帰国、山陽は有馬温泉まで見送ってゆく。ともあれ、日々の営みは新たであった。このところ、山陽の口からは細香の名すら出ないでいる。山陽にしても狂躁であったのである。

机に向って筆を執る山陽の表情は厳峻である。いま目の前には畢生の著述たる日本外史二十二巻が置かれている。

〈長い歳月であったな……〉

山陽は巻頭に飾るべく一文を考えている。

布衣頼襄謹み再拝して少将楽翁公閣下に白す。嘗て宋の蘇轍の韓魏公に上る書を読みて、これを愛す。以為へらく、昔より言を当世の王侯に進むる者は、大抵求むるありて自ら售る。識者の醜とする所なり。独り轍は魏公の人物を偉とし、これを名山大川に比しその言貌に接して以て己が作文の気を養はんと欲す。言、狂に近しと雖も、其の澹泊求むるなきこと知るべきなりと。然りと雖も……

筆は止むことを知らず墨を含む。上楽翁公書、松平定信に奉る一文を山陽は書いている。

「復蔵も三樹もこちらへおいで。川原へおりて遊んで来ましょう」

山陽の部屋を振りかえりながら梨影は二人の子供の手をとって庭を出てゆく。山の緑も、川の碧りも今日の梨影の目には一段と冴えて明るい。

その七　水　　仙

「どうなさいました――」
梨影が気付いたとき、口元を覆うた山陽の掌からは赤く血が滴り落ち、机の上の稿を染めていた。
「な、なんともない。気にするな」凭つく調子で山陽は言った。
梨影のさしのべた手を払い除けて山陽は自分で口の周りを拭うた。
「おやすみになられては――」梨影は布団を敷きはじめた。
「その用はない、それよりも……こ、ここを――」山陽の左手は自分の背のあたりを抑えていた。
それと悟って梨影は山陽の背を摩った。
〈大事でなければいいのに……〉梨影は不安に襲われていた。血を吐くなどとは思ってもみないことであつた。先月、彦根まで梁川星巌とともに出掛け、御機嫌で戻って来た折、心なしか憔悴しているとは思ったが、それはそれでさして気にも留まらなかった。
梨影は使いの者を走らせた。
「あなたは小石元瑞さま、あなたは新宮涼庭さまのところへ、いそいで――」
「医者を呼びに行かせたのか――」ボソリと呟くように山陽は言って再び筆を取りあげた。
〈これだけはな、なんとしても仕上げねばならぬのじゃ……〉日本政記を自らの手で成し遂げねば

ならない。斃(たお)れるわけにはゆかぬのである。外史を書き終えてからは神武天皇以来の天子の事蹟を筆にしつづけて来た。未だしである。いま筆を折るわけにはゆかぬ。挫折は男児の恥でる。儂は死にはせぬと山陽は机に向っている。

元瑞も駆けつけてくれた。涼庭も蒼惶(そうこう)として診(み)に来てくれた。ふたりの親しい医者の顔を見て梨影は咄嗟(とっさ)に山陽の病(やま)いただならぬを察した。

「梨影どの、これは……むずかしいことです、まことに……必死の症です——」涼庭が唇をふるわせるようにして言った。

「……」

「むずかしい……」漢方・蘭方の両道を修めている涼庭には手の施しようのないことが分っていた。

「無理されぬことです、食べ物にも気をつけて——」

「治りませんのか」

「……さようです。とは言え、まだまだ生きておれます」

静かに話す涼庭であった。梨影が元瑞の方に目を移すと、元瑞も黙って頷(うなず)いている。

〈まだまだ生きて……〉梨影は涼庭の言葉を嚙みしめていた。どのように解釈すればいいのか今の梨影にはわからない。ただ、重い言葉が伸し掛かっている。

座をはずしていた三人が元の座に戻ったとき、山陽は再び机に向っていた。

「気やすめは言うてくれるな、正直なところ儂の病いは——」くるりと後向きに坐り直し山陽は言った。その表情は厳しく犯し難い。

元瑞は涼庭と目を交わしたあと、徐(おもむ)ろに口を開いた。

「死は免れがたいな……積年の疲れが嵩じ病いを招いたのだよ。残された道は、養生次第、節制を保つこと、これしかない」

元瑞は山陽に向って言うべき言葉を友として、医者として知っていた。

「あと幾許の寿命かな、儂の命は――」山陽は表情を綻ばせた。

「貴殿の心がけ次第だな、万事、梨影どのの言い付けをよう守ること、これしかないな」元瑞は笑いながら言った。

梨影は元瑞の養女である。元瑞は山陽の保護者でもあった。それだけに山陽の病状を考えると心が痛んでくる。

〈肺血疾とはな……余命いくばくもないか……〉紅燈の巷に山陽と足を運んだ日々のことを元瑞は思いうかべていた。

〈死なせとうはない――〉元瑞は繰り返し呟いていた。

しきりと乾咳をするようになった。

「少しはお休みになられないと……」梨影は咳こむ山陽を見ていると自分までもが苦しくなってくる。しずかに山陽の背を摩る。これほどまでにして仕事をしなければならぬものか、今更ながらに学者の凄まじさに梨影は驚きもする。学者の夫を誇りにも思い、また恨めしくも思うのであった。

〈復蔵もいる、三樹もいる……それに陽子はまだ三歳というのに……〉

今になって思うと、かなり前から咳をしていたようである。時折の咳ぐらいは誰しもある。別段気にもとめないでいた。発病からは相当の月日が経ってしまっているのであろうか。気付かなかったことが矢鱈と悔まれるのである。

旬日は流れた。

「だいぶ御顔色もようなられました」
「然う何時までも病人面しておれんからな、……あれから既に二ヶ月も経つのじゃな、大塩どのとの約束も果さねばならん……」
二ヶ月前、山陽は大坂へ出て大塩平八郎の古本大学刮目の稿を見て、その序文を書くことを約束していた。このところ、山陽の脳裡には過去の幾多の人びととの出逢いが妙に甦ってくるのである。が、それも束の間のことで、綿雲のように立ち去ってゆく。
「昨日外湖に遊び、今日裏湖に遊ぶ、両湖城を夾みて舟を放つに好し——星巌どのと琵琶の湖に舟を浮かべた、あれは一ヶ月も前になるのか——」
「昨日のことのように思えますわ、あの折——」梨影は山陽の顔を見て笑った。
「とび出しおったな、土産の魚がな」山陽は楽しげに笑う。
「十日ぶりで我が家へ戻ると筍も青い皮が、それに蓮の葉をのびておったな……酒も用意させて樹陰に皆は集った、その折じゃったな、土産の竹筒から湖の魚がとび出しおった……」
キラと白光る小魚の鱗の輝きが梨影の目によみがえってきた。庭に躍り出た魚を、あわてて皆で捕えたあの折の模様が鮮かに甦る。
〈あの折は達者でおられたのに——〉梨影には今が嘘のように思えてならない。僅か一月足らずのうちに人間の心とは斯程までに変容しなければならぬものなのか、さだめとは言え、あまりにも酷薄だと思えてくる。
山陽は、あの折詠んだ詩を思い返している。薄游十日到吾廬、新笋成筠荷葉舒、命酒緑陰呼婦子、箸包半脱出湖魚——一字一字一字、躍り出るように眼を彩る。
「薄游十日わが廬に到る、新笋筠成り荷葉舒ぶ、酒を命じ緑陰に婦子を呼ぶ、箸包半ば脱ち湖魚を

出づ――もう彦根へは行けまいな」ゆえなしか山陽の声は淋しげであった。
「酒を命じ――もう儂は二度と酒を命じはせぬぞ。酒を飲むわけにはゆかん、煙草も吸はぬ。いま、儂は死ぬわけにはゆかぬからな……」
「節制なされば、きっと良くなられます、うんと養生なさってください。母上さまを安心させておあげになって――」
「ところで三樹はどうじゃな」
「相変らず……やんちゃで」
「困ったことじゃ、腕白も結構とは言え、三樹は過ぎておるわ」
「いまも何処かへ遊びに――」
山陽と梨影は寄り添うて窓辺に立った。
「アッ、あれは――」思わず梨影は声をあげた。
「三樹じゃ――」山陽は呆気にとられていた。
折しも梅雨時で鴨川は水嵩が増し激しく音たて流れている。水は澄明ではなく濁っている。その川へ一人の子が飛び込んだ。と見るや、その裸の子は我武者羅に水の流れを横切ってゆく。水の沫で幾たびとなく姿は消える。
二人は、ただ見詰めているしかない。
「無暴なことを――」ボソリと山陽は呟いた。
「……」
再び向岸から此方を目指して泳いでくる。
梨影は心配することも忘れて呆気にとられ三樹の姿を追いつづけていた。

川岸から庭は真近かであった。此方に辿り着いた三樹三郎は全身びしょ濡れのままで帰って来た。唇は蒼白で、体はガタガタ震えている。着物は岸に投げ棄てたままであった。そのまま家のなかへ上がりこんでくる。

「三樹！」山陽は怒鳴りつけたが、俄かに頭が熱ぽくなって其の場に坐り込んでしまった。

「大事ありませんか」梨影が山陽に声をかけると、その隙を縫って三樹三郎は庭へ駆け出した。

「待ちなさい！」梨影も庭へ下りて三樹三郎の後を追う。

「着物を取って来なさい！」

着物を抱えて舞い戻ってきたのを漸くにして摑まえ、体を拭いてやり、着衣させると、そのまま山陽の前へ連れて来た。

「きちんと、お坐りなさい」

もぞもぞと三樹三郎は山陽の前に端座した。

「おまえも八歳じゃぞ、物事の分別を弁えねばならん。目の前の水流を見、渡って可か、否か、そのくらいの分別はあって当然のことじゃ。おまえのは勇気ではない、無暴というものじゃぞ」

「……」

「よいか、二度と斯様なこと、してはならぬぞ、わかったな」

「……」三樹三郎は畳を指先で擦っている。

「真夏ではないのですよ、こんな梅雨どきに裸になって泳ぐなど……病いになったらどうします、二度としませぬと返事をなさい、はっきりと」梨影は三樹三郎の頭を抑えた。

「……」口を尖らせて三樹三郎は落着かないでいる。

つと山陽は立ち上って箪笥の袖から艾を取り出した。

「サア、裸になれ！おまえには、これしかないようじゃ」山陽は三樹三郎の着物を剝ぎ取った。
「熱うても声を出しては不可ん。じっと耐えてみよ」
艾に火をつける。熱さはじわじわと強まる。それも一つではない、山陽は唾で濡らした艾を幾つも丸めて肩と言わず尻と言わず置いてゆく。俯せた裸身の上に煙が立ちこめた。
「あつい、やいとは嫌や――」さしもの三樹三郎も音をあげて叫んだ。
「無暴なこと、してはならぬぞ」言い終えると山陽は急に疲労を感じていた。
その夜も山陽は筆を執り、塾生の関藤藤陰に写しとらせていた。此日頃、藤陰は山陽の片腕となって日本政記に取り組んでいる。
人君に貴ぶ所は、剛なり、健なり。剛ならざれば則ち懦れ、健ならざれば懈る。紀綱日に懐れて民軽がろしく法を犯す所以、怪しむに足らざるなり。
見直しては筆を加えてゆく。燈火のまばたきのなかに山陽と藤陰との姿がある。二つ姿は一つの影となって動いている。
〈死ぬわけにはゆかぬ、死ぬわけにはな〉山陽は自らに鞭うち、背後に座する藤陰を勵ます。
翌日、山陽は再び血を吐いた。
が、日課ともなっている庭の手入れを怠りはしない。
「垣根に牽牛を播かんといかんな。……昨年の菊作りは今一息じゃった、今年は見事な花を咲かせてみせよう」
「オオ、陽子か。かわゆうなったな、おまえも花は好きじゃろ――」
陽子は三歳の小さな両手で泥を山陽の顔に擦り付けた。
「マア、この子は――」山陽の顔を見て梨影の顔が綻ぶ。

「雪間に姿見せてくれる水仙が儂は好きじゃが……来春は見られぬやもな……」
「そんなことありません、水仙が待っていますわ」
「ウム、然うだったな。……水仙と蘭とはよう似ておると思わぬか」
「……」
「おまえのことじゃよ、梨影は蘭の花じゃろうが――」
「また、そのように揶揄なさって――」
「待ってはくれぬのか、おまえは」
「お待ちしていますとも、なにしろ、わたしは蘭ですもの……」
ひととき庭で過すと再び部屋に戻った。
牽牛の花が咲きかかるようになったとき、山陽は大量に血を吐いた。
「梨影よ、詩を作ってみた、戯れにな。聞いてみてくれい――吾に一腔の血あり、其の色正に赤く其の性は熟す、儂の体内には血があるのじゃ、生命が燃えておるのじゃぞ。この赤い血をな、秀れた君主にそそぐ、みたまやに赤光は輝くのじゃ、之を明主の前に瀝ぎ、赤光燦として廟堂に向い徹するあたわず。また、これを国家の難に濺ぎ痕を大地に留め碧滅せざらしむるあたわず、儂の此の血をな、国家の憂難にそそぐのじゃ、この青い血は大地に永久に痕跡を残すのじゃ。鬱積徒らに磊塊の凝を成す、儂の心のなかに積りおる押えきれぬ思いは大きな石のごとく固まるのじゃ。吐かんと欲し吐けず、中いよいよ熟す、儂の心はいやまして赤う熟れる。一旦喀血して李賀を学ぶ、収めがたし糝地の紅玉屑、ひとたび血を吐き李賀、これは唐の王族だがな、昌谷集を残しおる、若くして死んだ詩人じゃ、李賀のごとく儂の此の赤い思いを吐き出す、儂のすぐれた詩文は粘っこい大地から消え去りはせぬぞ。――まだ続くのじゃ」

「少しお休みになられては――」

「いや、興にのって来たわい、何事も万事中途で投げ出しては不可ん。或ひと曰く、先生史を閲し姦雄の天罰を逭るるに遭う、雎陽の歯すなわち嚼齧す、ある人が言うにはな、先生は史書を調べ、悪知恵たけた英雄が天罰を逃げ大きな顔をしておるのを知る。すると、安祿山の乱で戦った勇敢なる張巡のごとくに歯ぎしりをし口惜しがる。渠に寸傷なく己れ自ら残う、姦雄は少しも心痛めぬ、先生だけが自分の体を痛める。憤懣遂に肺肝の裂くるを致す、その憤りがな、儂の肺臓肝臓と臓腑を破ってしもうたのだとな」

「或ひと曰く、先生人を殺すに手鋏なし、奸を発き伏を擿くは筆舌による、儂はな、手に短い刃物すら持ってはおらぬ、世に隠れた悪事をあばくのは筆と舌によってじゃとな。心を以て心を誅し人知らず、霊台冥冥陰血を潴む、心で人の心を誅殺する故に人にはわからないのじゃな、これでは心は晴れぬ、奥深い魂のなかに血が、これを痛む血が溜まったのじゃとな。――梨影よ、おまえはどう思うかな――」

「儂は両者の言い分には頷けないのじゃ、吾この語を聞き両ながら未だ頷かず。するとじゃ、童子進み曰く走の意別なりと、弟子が進み出て言いおった、こものの私の考えは別ですとな。先生肉中もと血なし、儂の体のなかには血は無いのじゃと。腹中奇字僅かに剡るべし、先生は腹の中で立派な文字を彫りきざんでいるにすぎないのですよとな。昔の酒作りの杜康を欺しこんで躍起となって酒を注いでおられる、杜康を賺し得て争うて酒を載す。剣菱は剣の如く嶽雪は雪、いずれの酒にせよ、剣のごとく雪のごとく鋭く冷く腹の中に入る。ところがじゃ、大幅の蔵府受けて起たず、富豪の倉ではないので納めるわけにはいかぬとな。溢れて赤漿となり饕餮を戒む、口から赤い泡となって吐き出るより仕方がない、飲んではならぬと戒めおるのじゃとな――」

紅潮した山陽の語勢を梨影は頷きながら受け人れている。
「そこでじゃ、儂は言ってやった、咄なる哉、此の意慎しみて説くことなかれ、叱りつけてやった、なんたることを言うのか、決して斯うしたことは言うてはならぬとな。どうじゃ、儂の此の詩は。咳血を患い戯れに作れる歌は――」
山陽は大きく息を吐いた。
「いまの儂は酒を飲むわけにはゆかぬがな――」盃を傾ける真似をしてみせる山陽であった。
病魔に苦しめられながらも意気込む夫の姿が梨影には嬉しかった。それが虚勢ではないことを梨影は知っている。
夏の夕闇に山紫水明処は沈んでいる。
「このところ、三樹三郎は多少分別がついたようだな」
「不思議なくらいに、妙におとなしくなりました……」
「してみると、いささか物足らぬ気がせぬでもないな」
「ほんとうに――」梨影も笑った。
「今日もまた相手をしてやろう」
山陽は梨影に三樹三郎を呼んでこさせて、絵本をひろげ読んでやる。目を見開き絵本に食いつく三樹三郎、そして好好爺山陽である。
「復習をやっておるかな」
「……」
「しっかり学問をやるのだぞ」
「……」

山陽は弟子の児玉旗山に三樹三郎を教えてくれるよう頼んでいた。三樹は、ともかく師宅までは通うのであるが一向に学ぶ気持はないようである。山陽は三樹をなんとかせねばとの親心から旗山に託したのであるが、旗山は腕白の凄じさにもてあまし気味であった。それでもそれなりの効果はあったようだと梨影は感じていた。

「サア、向うで復習をしてきなさい」

「ハイ」返事一言、三樹はこれ幸いと飛び立ってゆく。

「近頃は咳も少なうなられました、このぶんなれば思ったより早う御快癒なさいますわ」

「ウム、通議の方も仕上げねばならぬしな、大凡そ奢侈、無益の事は必ず婦人より起る――」山陽は徳川政権のことを考えている。

〈儂の心がわかってくれるであろうか……儂の吐く血を無駄にしとうはないわ〉

「女というものは、おそろしいもので……女が気をつけねばなりませんわ」

「いや、女色ゆえに世は乱れるのだな、大奥を思うと心が寒うなるわ」

「なにも政でなくても、一つの家の中でも同じですわね」

「その通りじゃ、女色は不可んのじゃ」

「わが家は安泰、でございましょう」

「梨影のお蔭じゃ、ありがたいと思うている。おまえあっての安泰じゃ」

「そんなこと……」

「いやいや、儂は随分と苦労をかけてしもうた、すまぬと思うておるのじゃ……」

細香さまに一度お越しいただきましょうか、と言おうとして梨影は口を押さえた。

〈細香さまにお知らせしたものか……〉梨影は夫の病状を思うと判断に苦しむのであった。

「梨影よ、ひとつ儂の姿を絵に描いてはくれぬか？　どうかな――」
「……」
〈死を覚悟しておられる……死を……わたしには到底筆はとれない……〉
「梨影の筆ではお顔が泣きますわ、わたしは駄目……」
眼窩も落ちくぼみ憔悴しきった病軀で著述に精魂傾けつづける夫の姿を見ていると梨影は今更ながらに学者山陽に畏敬の念を覚え、妻として誇りに思う。が、病ならば少しは我が身を疵うて養生し、仕事放り投げ休息の日々に身を委ねる夫であってほしいと梨影は思うのである。苦しうてならぬ、擦ってくれ、美味いもの食べたい、酒じゃ……と、妻である自分に甘えて貰いたい。死に至るという病であるならば夫とともに自分も苦しみたいと思うのに山陽はその片鱗すら見せはしない。ただ一人で耐えている。それが梨影には淋しいのであった。
凄絶な夫の姿を描きとめることは梨影としては出来そうもない。後の世までも残すものであるならば自分の筆で描きたいのである。が、いまは描けない、筆は重く涙で曇るにちがいない。
「気がすすまんかな――」ボソリ一言山陽は洩らした。
「上達しまして自信ができましたら、きっと描いて進ぜます、きっと――」梨影は申しわけなさそうに言った。淋しげな山陽の言葉が梨影の心には痛かった。
山陽には梨影のこころがわかっていた。それだけに梨影に描かせることは諦らめねばと自分に言いきかせていた。残酷なことを言ったと山陽は後悔もするのである。
〈とは言うても矢張り自らの像は残して置きたいものよ……肉体は滅び去る、魂は生きつづけるがな……子孫の語り草のためにも儂の画像をな……〉
梨影には日の経つのが怖しかった。このままでいてほしい、妙に胸苦しさが感じられるのであっ

た。日の流れは遅くもあれば時に依り早くもある。山陽の病状は俄かに悪化している。体の自由さも奪われがちの日々である。それでも山陽は業を止めようとはしない。関藤藤陰や牧百峯に口述し、清書させている。その凄まじさが死期をすら感じさせるのであった。

重陽の節句が訪れた。

「菊を求めて参りました」

梨影は竹筒に菊を飾った。

ウム、と唸り山陽は暫らく目を閉じていた。

「山妻菊を買い牀に対し斜なり、是重陽の我が家に到るを知る、一たび病因循し猶死せず、今年また黄花を看るに及ぶ――」一気に山陽は詠みあげた。

病床に斜めに相向かう菊の花を見つめながら山陽はわが病いのぐずぐずと快癒にも向かうことなきを歯痒くも思い、それでいて此の日まで持ちこたえてきた命をありがたくも思うのである。

五日後、梁川星巌が訪ねて来た。

「いかがですかな。わたしは江戸へ参ります、どうも尻が落着かぬといった具合でして――」

「江戸へな――」山陽は万感こめて言った。

〈ひとときは儂も江戸へ出てと思うたのじゃが……〉山陽は星巌を羨しく思う。

「世の中、これでよろしい筈はない。……と考えると呑気にもしておれず、わが足は自ら江戸へと向いていますわ……」

「今年も旱魃じゃ、秋の収穫とても覚束ない、斯様のときこそ政が肝心じゃと言うに――」

「先日も大嵐でしたな、諸国の農作物も損うておりましょう」

「然様。大風の夜、眠れぬままに多々思うことがな……幕府に対して言わねばならぬことが頻りと

浮かんで来てしもうて――」
「わたしには野心があります、江戸の詩人たちに喝を入れ、星巌ありと世に知らしめてやらねば――」
「結構結構。わしとて病軀でさえなければ……」
「過日、敬所どのが見えられたとか――」
「喧嘩してしもうたわ」
「例のごとく、ですか」
「北朝と南朝じゃ、互いに論じ合うは良し。それが刺戟となり一気に想うかび筆走るじゃな。……はげしう叩き合うて挙句は涙流し手をしっかと握り合うた……死に垂んとし病中還みて君と別る――」
「いやいや、元気を出して貰わねば、わたしが困ります、折あらばまた琵琶の湖の舟遊びをやりましょう、その日まで息災でいてくだされ」
星巌は旅立って行った。
ここ数日、山陽の身辺はあわただしい。
今日は篠崎小竹が姿を見せた。山陽の喜びようは一通りのものではなかった。小竹の声を聞くや山陽は全く別人のように生気が蘇っていた。山陽の脳裡には京へ出て来た昔の日々が甦り、小竹に小言を言われぬように遊びに足向けた折のことごとが懐しく浮かび上って来ていた。
「こ、これを見てほしい」山陽は竹かごの中から病中に仕上げた稿を取り出していた。
「この山陽を知ってくれる君が今此処に居てくれる、こんな嬉しいことはない」
「よう為し遂げられた、さすが山陽どの。祝杯といかねばな――」

「梨影よ、酒じゃ、酒を頼む」
二人は盃を前にする。黙ったまま目を合わせ頷き合う。
「思いきり飲んでくだされ」山陽は自らの盃を前に据えたまま、小竹が気持よさそうに飲みほすのを見ている。
「……酒有りて君姑く住る、嫌を休ましめ觥を共にせず――」大き盃でひとり酒を飲む小竹を山陽は楽しげに見つめていた。
「ところで頼みがあってな」
「頼みとは――」
「これを見てくだされ、儂の像を――」
「ホホウ、なかなか良う描けておる、山陽どのそっくりじゃ」
「実はな、例の大雅堂に描かせましたのじゃ。これにな、一筆したい、すまぬが儂のかわりに筆をとってくだされ。どうも手が思うように動かぬのでな」
「ウム、わかり申した。なんと書けばよいのか」
「よろしいかな。――身は一室に偃仰して心は百世の得失に関す己が齷齪を恤まずして人の家国を憂う」
〈一室に寝たり起きたりなれども、心は百世の利益・損失を思いつづけている、わが家の食物生計など心配せずに世の人、国のことを心配する、とな。いかにも山陽どのらしいわ――〉小竹は黙って筆を握っている。
「文章は腹を満たす、饑を済わず、尺を枉げて尋を直くす、則ち為さざる所なり、噫、是何物の迂拙男児か――」

〈文彩は腹中にいっぱいある、が、饑を救いはしない。大事を為すために小事を犠牲にするようなことはやりはせぬ。ああ、なんたる愚かにして、つたない男か――その通りだわ〉小竹は、そっと苦笑する。

「然りと雖も、いずくんぞ此の迂拙者を念うの時なきを知らんや――」

〈時の世に合わぬ人間であるとは言え、いつかは必ず此の儂を常に思うようになる、とな。山陽どの、心配されずとも必ず貴殿の著を、世人は仰ぐこと間違いなしじゃ〉小竹は山陽の、この死に臨んだ男の心に心が痛むのである。と同時に山陽の心意気に感じ入るのであった。

「これでよろしいかな」小竹は賛の書を山陽に見せた。

「ありがたい、これで思い残すことはない。重ねて所望、つづきにいま一つ――」

「遠慮なく――」

「ならば――この膝諸侯に屈せず、聊か故君の徳に答う、この眼これを群籍に竭す、先人の嘱を虚うせず」

〈膝を諸侯の前に曲げはしなかった、いささかではあるが殿の恩恵に報いることができた。多くの書を読み、亡き父の遺志を継ぐこと叶うた、とな。亡き春水どのも草葉のかげにお喜びであろう、よかった、良かったぞ〉

「此の脚母の輿に侍す、二たび芳山に躋り、三たび大湖に棹さす、四たび濱湾を上下して未だかって朱頓の門を踵ねず――」

〈母上の伴をして二度吉野山に――山陽どの親孝行は一通りではなかったな。琵琶の湖での舟遊び三たび、四たびの大坂湾の往来、陶朱や猗頓のごとき富豪の門を尋ねることは一度もしなかった、そこが山陽どのの山陽たる所以なのだな……〉

「此の口残杯冷炙を餂す能わずして、此の手黔黎の寒餓を援けんと欲す」
〈呑み残して酒も、冷たくなったあぶりものも充分にひっかけ口には出来ずにいる、が、この手は庶民の寒さや餓えを援けようと願いつづける――この山陽どのに、いま死が迫ろうとしているとはな……〉
「儂の心を吐きだした思いがする、これで悔いはない。筆を借りて済まなかった、ありがたいことじゃ……」微笑を浮かびあがらせ、あとは疲れはてたように山陽は眠りに就いた。
「梨影どの、あと宜しう頼みますぞ」
「ハイ」
「此日頃、容態はいかがなものかな?」小竹は山陽の寝顔を見つめながら言った。
「食もよう進みます、病人とは思えぬくらいに――」
「それは上乗。――痩せたりとは言え山陽どのか」小竹は微笑んだ。
「これが必死の病かと疑うくらいでございます、口も可成り喧しうて……。藤関さま、牧さまにも頬いほどに口出し致しております」
「性分ですな、これは致し方ないこと。せいぜい喋らせてやってくだされ、体内の毒が吐き出せる。気分爽涼となりますわい」
「……それに、子どもたちの事を矢鱈と気にして――独り言をブツブツ言っております、以前は、そんなでもなかったのですが――」
「人間、いつになっても苦は無うなりはしませぬわ。ましてや山陽どの、己れの志を継がさねばと子息の教育には心使うておる。ところで、真面目に塾へ通うておりますのかな?」
「復蔵は真面目に。……三樹は、どうも……」

「相変らずですな、父親の血を受け継いでおる、いずれ大物になりましょうな」
「それだといいのでかが……」
「梨影どのも苦労されるな。それでよいのじゃ、よいのじゃ――」小竹は梨影を妻とした山陽は幸せ者だと思うのであった。
〈今日の山陽あるは妻女梨影あってのことなり――まさしく然り、言い得て妙だわい。それにしても梨影どのは立派な妻女じゃ、また、山陽どのの目も確か……〉
頼家をあとにした小竹は、ふと横切る暗い翳りに気付いた。山陽自身が死を覚悟していることは小竹も察知していた。山陽の代筆をしているときでさえ、そのことは念頭にあった。にも拘らず、山陽の死期が旦夕に迫っていようなどとは思ってもみなかったのであった。大坂へと戻る道すがら、小竹は今日の山陽が自分に最後の別れを告げようとしたのだと悟ったのである。あの盃は現世での二人の訣別の証であったと小竹には思える。自賛の詩は現世での最後の絶叫である。あれほどまでに別れを惜しんだことは今迄にもなかったと思えてくる。此の世での得難い友を失う淋しさにうち拉がれ、小竹の辿る足は重かった。
深い眼りのなかに、いま山陽は居る。まどろみに虹の橋がかかり遠い日々の絵巻が朧気に展開する。綿雲の漂いのなかに身を委ね、ゆらめく昔日の光芒に山陽は目を細め、思わずに微かな差恥にためらいを覚えている。
〈あれは玉蘊ではないか……なつかしい、全くなつかしいわい、あの淡粧素服の女、儂が一目惚れした最初の女であったな……あの頃は儂の身もただならず、座敷牢での垢も落ちきれぬ折であった、叔父上を尋ね、久々の舟遊び……さながら昨日のごとしじゃ、儂の心をとらえたは玉蘊なる女、我と我が目を疑うたものよ、若かった、ともに若かったのじゃ……京へ出て来た折には、玉蘊

が後を追うて来た……と言うに……。然様、牡丹の女だな。あれは此の世のさだめというものの為せる技であった、結ばれ得ぬ糸が二人の間にはあったのだな……情炎を燃やしはしたがな。……藩医御園道英どのの娘淳には済まぬこととなってしもうた……が、よい子を産んでくれた、余一もな、いまは立派になってくれた、ありがたい、申しわけないの一言じゃ……。ああ、目が霞んできた、よう見えぬわ……すべてが遠くへ消えてゆく、暫し待て、待ってくれるのじゃ〉

〈……姿を見せてくれたのか、細香、細香ではないか。長い縁であったな……大垣に足をのばし、初めて逢うてより幾とせが流れたか……そなたの父上蘭斎どのに一蹴されてしもうた、山陽ごときには娘はやれぬとな。……儂の一目惚れも束の間の夢、泡じゃった……幾たびとなく京まで来てくれたな、儂はうれしかった……嵐山にも遊んだな、あの折の、暫雲月を礙り花梢暗し、そなたの気持を察せずにいた、儂は妻を娶っていたものな。雲とは梨影のことだったのじゃ……そなたには恨まれもしておろう、そのことが辛いぞ。……詩会をはじめ公の座では随分と力になってくれた、座のとりなし、才智のひらめき、儂は面目施すこと叶うたというもの。外に在っての頼細香……であったな。……オオ、何処へゆくのじゃ、然様にあわただしげに、いずこへゆく……〉

〈傍に居てくれたか、儂も気が安らぐ……儂の傍には梨影が居てくれぬとな、儂は儂でなくなってしもうのじゃ。よう尽くしてくれた、儂にも、子どもたち、塾生どもにもな。糟糠の妻とは梨影のことだな、清貧に甘んじてくれた、なにの愚痴ひとつ零すことも無く……苦しみもともに嘗めてくれた、儂には慮外の事が多すぎたからな。……思い出すわい、元端邸で初めて出逢うた折のことをな……あれから……すでにして十九年の歳月が流れおる、早い、早いものじゃ……儂なりに此の世での志は果すこと叶うた、外史にもせい、政記にもせい、儂なりに世に問い、後の世に残すことが叶うたわ……天下の奇男児たり得た喜びを覚える……

……復蔵も三樹も母の言うこと、ようきくのじゃぞ、おまえたちには厳しい学問が必要じゃ、人に負けては不可ん、己れの足で大地に立たねばのう……三樹、また腕白か、悪戯が過ぎる、ちと大人しうしてくれい

……儂は未だ未だ死ぬわけにはゆかぬ、梨影よ、傍に居てくれるのじゃぞ……〉

山陽はめっきり衰えが目立ちはじめていた。もはや起き上がることすら出来はしない。

「すまぬな、最後まで世話をかけてしもうてな」弱々しげな声で山陽は言う。

「なにを言われます、サァ――」梨影は山陽の苦しげな胸を撫で摩る。

「今日は九月の……」

「二十三日ですわ」

「フム、よかった、儂の仕事も終えることが出来た、跋文も漸く仕上がったな……」

「少し、お休みになられませんと――」

「いや、梨影よ、おまえに頼んで置かねばならぬことがあってな、子どもはな、二人とも他所へ預けて学問させてやってくれ、飯料は出してでもじゃ。学問で身を立てさせねばならぬ、二人とも京でな。それが一番よいこと、梨影の身にとってもな。梨影にも安らかな日々であらねばのう……」

「ハ、ハイ、復蔵も三樹も学問いたさせます、二人の子どもが遊学いたしましたら、わたしは陽子と此の家を守って参ります、決して御心配なさいますな」

「三樹をな、頼んだぞ。……旗山に厳しう教えてくれるよう頼んではあるがな……近江の理山法師にも力となって貰えよう。……陽子はまだ三歳じゃ、女らしゅう育ててくれよ、女とは心やさしさが唯一の宝じゃからな。……梨影、おまえのような女に育ててほしいのじゃ……」

「それからな、此処の土地は借地じゃ、家は自家だがな。まァ、そこそこにならば暮してゆける筈

じゃ、多少の貯えもある」
「子どもが一人前になるまで、此処で陽子と暮しますわ、誰か老女にでも働きに来て貰います。……その日が来れば町なかへ引越しでもして、二人の子に夫々塾を開かせましょう。夢、いえ、きっと……」
「……然うじゃな、頼家の塾が京に二つ出来る。陽子は誰ぞ学者の妻となりおる。その間を梨影が往き来しておる、のどやかにな……よいではないか、実に……」
「ハイ……」
「梨影よ、また一緒に絵が描きたいものじゃ、もう一度な……今度は何を描くかな」
「水仙、水仙の花ですわ」
「水仙とな、うれしいことを言うてくれるわい……」
「春になりましたら、二人で絵筆を執りましょう、三十六峯を仰ぎながら……」
「ウム、……」微かに山陽は口元を綻ばせた。
「藤陰はどうしておる？」
「懸命に写しておいでです」
「ウム、然うか――」呟きながら山陽は目を閉じた。
梨影は、静かな眼差しで山陽の顔を見つめていた。山陽の顔から微かな生気が消えて、それが現世での終焉であることを悟ったとき、覚悟していたこととは言え、梨影は動転した。
〈何処、なぜなの……〉山陽の死が梨影には信じられないのであった。
揺さぶっても山陽は身じろぎひとつしはしなかった。落ちくぼんだ山陽の眼窩に梨影の涙が沈んでゆく。死とは斯様に静かにひそまったものであるのか、何故、泣き、叫び、喚き、互いに激しく

相擁し、訣別の詩を口遊み、現世での別盃を酌み交わそうとはしないのか。このことが梨影には哀しく思われる。

巨星墜つとの言辞が世上に出るかも知れない。そのようなことは梨影には関わりのないことである。唯ひとりで夫の死を必死に受けとめ慟哭し、自分だけの心中に山陽の悉くを彫琢するのみである。

「気を落しては不可ん」

元端の声にハッと我にかえって梨影は此のとき一挙に涙が溢れ出て来た。折角呼び戻した三樹が父親の最期を看取ることもなく何処かへ遊びに出掛けてしまったことを叱りつける気も失われていた。そのことよりも父春水の葬儀に間に合わず悔恨に心埋めた山陽と父山陽の臨終の枕頭に坐し得ぬ三樹との奇しきさだめを思うのであった。

「ねずみ小僧次郎大夫が獄門に首さらされた――」大きな声をあげて夕闇の庭に三樹が姿を見せたときも、梨影は凝と坐ったままであった。

夫山陽の死顔を梨影は美しいと思った。これでよかったのだと自らに言い聞かせる。それにしても早く逝き過ぎた、神仏は何を思うてかとも恨めしくさえなる。天寿とは何の謂ぞ、今更ながらに人のいのちを考えてしまうのである。山陽なきあとの寂寞は何により癒し得るのであろう、何と言おうとて自分にとっては巨星墜つである、大黒柱が倒れた、心の支柱が崩れ去った、いま、梨影は舵を失うた小舟の主である。船頭は歌うたわねばならぬ、心からの舟歌を。重く、哀しく、梨影は震えつづける胸を抱いて欷歔の淵に沈んでゆく。涙は露となり、いつしか遠い日の思いに白光る。

〈女は美しう死ななあかん、仁正寺で母に昔語りを聞かされては心のなかで呟いていたものやなァ……美しい女、優しい女、正しい女、そんな女になりとうて……いったい、わたしは、この梨影

は、どんな女であったのかしら……〉ただ一途に娘ごころに思いつづけ言い聞かせつづけていた近江での日々を描いていた。世間のことなど何も知らず、明け暮れのひそやかな片田舎に埋れての日々に、どうして今の自分を描き得たであろうか。あまにには激しい動きのなかに身を置いての京での日々であった。夫山陽の周辺にしても、また梨影自身にとっても愛憎激越の波路でもあった。

〈いろいろなことがあったなァ……苦節、わたしは苦労など気にもならない、ただ、山陽さまに仕え、家を守る、そのことに懸命で……無学な身、山陽さまに恥かかせてはと学問の真似事もしてはみたけれども……ああ、矢張りわたしは家を守る女なのだと……辛くなかったと言えば嘘になる、あの頃、細香さまのことで……嫉妬(しっと)しては、ただひとり泣いて……細香さまは才女、それに較べてわたしは田舎女、その口惜しさに負けまいと歯を食いしばって……それも昔のこと、なにもかもが、あれでよかったのだわ、いまの梨影を築き上げてくれたのだもの。波風たって海は凪ぐ、悟ったのではない、妻の座というものがわかった、妻の道というものが、ただそれだけ……ひたむきに山陽さまにお仕えした、いまのわたしには何の悔いもありはしない、大きく胸張って山陽の妻と言える、こんな嬉しいことったら……〉

梨影は美しく生きねばと思う。娘時代から描きつづけた美しい女として、目前の夫山陽の死顔のように美しく死なねばならぬ。為すべきことを果し得た安らぎ、そのために復蔵、三樹を立派な学者にしなければならぬ、陽子を美しい女に育てあげねばと梨影は責任を重く感じている。身近に人の死に遭遇して人は一人前になるのだと言う。梨影は漸く一人前の女になった、これからが自分の真価が問われる修行の場なのだと心をあらたに引き締めるのであった。

「真葛(まくず)原になり、山陽どのの亡骸(なきがら)をな……」小石元端が言った。枕頭に坐した弟子たちは黙って頭を垂れた。

文政三年九月二十三日、夕陰（せきいん）は香煙のなかに沈んでいった。

その八　時の流れ

「酔わねばのう……人の世は水の泡じゃて――」雲華上人は御満悦で頻りと盃を重ねる。
「上人さまは相変らず御酒がお好きで……」梨影は酒を注ぐ。
「思うてみれば、山陽どのとも斯様に盃を酌み交わしたものじゃ、あの折、この折と詩を詠み、筆を手にしてな……」
「酔わねば不可ん、酔うてこそ人の世悉くがわかるのじゃ。……拙僧が京へ出てより山陽どのは良き遊び仲間じゃったわ……」雲華は感慨ぶかげに言う。
「頼家の事は拙僧の掌が握りおる、すべて意のままじゃて。梨影どの、そうでござろうがな」
「ハイ、ハイ、上人さまの仰せのとおりで……」梨影は笑う。
「皆の衆、梨影どのは立派なおなごじゃ、山陽どのには過ぎたる妻でござったわ、そうでござろうがな」斯う言って雲華は細香と目が合った。
「細香どのもまた立派な……才女でござるわ」雲華はいささか照れて頭を掻いた。
「上人さま、さいじょとは妻女でしょうか、それとも細女なので……」口をとがらせて細香は言う。
「イヤイヤ、然様に愚僧を苛めなさるな、勘弁してくだされい……」
細香は梨影と顔を見合わせて笑った。

「もう十八年になりますのね」
「……」梨影は今更のように歳月の流れを身に感じていた。夫山陽が死んだ日のことが信じられぬほどに遠い昔のこととして甦ってくる。
「あの折は、お恨みしていましたの……何故、知らせて戴けなかったのかと――」
「……」
「山陽さまの最期に逢わせて戴けなくて……そのことが、ずっと心に残っていますわ……」細香は十八年前の口惜しさを思い返しながら言った。
「迷っていたのです、お知らせすべきかどうか……」あの折、細香への嫉妬心があったのだと梨影は感じていた。
「コレコレ、女人たちは何を愚痴っておいでじゃ。見てござれ、三樹どのが当惑顔じゃ」笑いながら雲華は三樹三郎に酒を注いだ。
「梨影どの、今年はよき年じゃったな。親子揃うて水入らずの日々が過せましたな……」
「……三樹とは七年ぶりですもの……」
「三樹どの、これからは母者を大切にな」
「いやいや、私のこと故、いつ何をしでかしますやら――」三樹三郎は苦笑する。
「支峰（復蔵）どのも江戸で学問しておいでじゃな、結構々々」
「兄上が江戸へ発たれてから半歳も経ちますな――」
「ほんとに……早いもの……」思わず梨影は淋しさを覚えた。
「兄上の詠んでくれました詩、覚えておりますぞ、私の帰京を待ちわびてくだされた心情、いかに肺腑（はいふ）にしみましたことか――」

「雪声笑談新たなり、濁酒乾魚老親に侍す、ただ恨む一年まさに尽きんとする夜、なお帰らざるの人あり――」

「帰らざるの人あり、三樹の帰りを一日千秋の思いで……」梨影は復蔵（支峰）と二人で鶴首していた大晦日からこの元旦のことを思い返している。梨影はしみじみと幸せを嚙みしめたのであった。七年前には梅颸の卦音に接し、五年前には娘の陽子を失い、その淋しさを二人の男の子が癒してくれる、こうした日々が無性にありがたかった。が、それも二ケ月ほどで復蔵は旅立ち、手元には三樹だけが残る。それぞれに成人してくれた我が子の姿を夫が生きて見てくれるのならと梨影は思いつづけていた。

「ホホウ、この柿は見事じゃ。樽あり、酒あり、柿あり、酔うたあとの柿は滅法うまいのう」雲華は柿を齧っている。

「この柿、細香さまから戴きましたの、この梨も」

先日、細香が山陽の霊前にと柿や梨を届けてくれたのである。

「満懐の喜気眠り著き難し――」細香は、そっと口遊んでいた。山陽と此処嵐山に遊んだ日のことが昨日のごとく浮かびあがる。

〈わたしとの逢瀬を前に山陽さまはお眠りになれなかったのだわ……あの折……もはや昔の夢になってしもうて……〉細香は幾たびとなく山陽の詩句を口遊ぶのである。

「三樹どの、それを拙僧に見せなされ、隠さずともよい」

「ウム――母に侍し嵐山花下の筵、斟を同じくし更に女詞の俤あり、阿翁我を拉し前日の如し、開落春風二十年、――そうじゃったな、つい先日も三樹どのを誘うて遊んだわ……母に侍し嵐山花下の筵じゃ、結構々々。母に侍し、これが山陽どのの詩を思い出させてくるわ、さすがに貴殿は山

陽どのの子息じゃ、血は争えぬものよのう……母思いの子じゃ、ともどもにな、そうでござろう、梨影どの」
「三樹は優しい子です、ほんとうによう仕えてくれて……」
「幼ない頃は癇癪玉の持ち主じゃったのにな、これも他国で苦労した御蔭じゃ、結構々々」雲華は三樹の方をチラと見て笑った。
「それにしてもな、よう出掛けたものじゃ、聞けば苦南尻まで赴いたとやら――」
「苦南尻とやらは――」怪訝そうに細香は問う。
「北の涯じゃ、北も北の涯じゃ。ようまア無事でのう……」
「その北の涯とはどんなところでしたの、是非にお聞かせくださいな」
「いかように申せばよいか……」三樹は言葉に窮した。あの北の涯の凄絶荒涼の景を改めて瞼に浮かべる。
「三樹どの、詩を詠まれたじゃろうが……それをな――」
三樹は筆を取りあげて徐ろに書きしるしはじめた。梨影は、その筆先を凝と見つづけている。

決眥洋空雪作堆　不見苦南尻戍台　万斛大舟軽似葉　直過鯨鰐口頭来

目を輝かせて細香は見入っている。未知の景を細香なりに詩句を通して描きあげる。雪、雪である。空も海も重く層を為す白銀の涯、国境守備の陣屋も見えはしない。吹雪く海原には多くの大きな舟が葉のごとく軽く走っている。目の前を大きな鯨が一瞬のうちに泳ぎ去ってゆく、この壮絶の景。
「眥を決す洋空雪堆を作す、苦南尻の戍台を見ず、万斛の大舟軽きこと葉に似る、直ちに鯨鰐口頭を過り来る」細香は口誦した。

そんな細香の姿を、いま梨影は嬉しく見つめている。一人前に詩を詠み得る三樹の成長を喜び、そしてまた、その三樹への厚い情を注ぐ細香への感謝のおもいで梨影は涙ぐんでしまうのである。正直言って梨影は詩の良否はわからないが、細香が感じ入っているからには三樹三郎の詩も可成りの作なのだと喜ぶのであった。

「蝦夷の地、わたしも一度はたずねてみたいもの――その折には御一緒に――」細香は夢みるように言った。

「滅相もない、荒漠の地、どうしてどうして細香どのが参られましょう」

「それだからこそ訪ねてみたいのに……」

「旅とは申せ、死を覚悟の旅、物見遊山では叶いませぬ」

「……わたし、いのちなど惜しみはいたしませんの――」

「あれは確か松前から舟に乗った折でした、暴風の威すさまじうて舟は木の葉と奔弄され、もはやこれまでと覚悟いたしたことがありましたな。……母や兄上に心配のみかけおる身ゆえに、斯様に天罰を受けるのだ、この北溟の涯で魚の餌食になる、海原に身を沈めんとして思いました。旅とは己れを知らしめもしてはくれますが――」

汗漫幾度誤帰期、空使母兄懸遠悲、果爾今朝受天譴、葬身魚腹北溟涯――三樹三郎は筆を執っていた。この詩を詠んだ日の心が鮮かに甦っている。ゆえなしか表情も厳しい。

「……身を魚腹に葬らんとす北溟の涯……」細香は神妙に口遊んでいた。

「然うじゃ、今日は三樹どのを俎上にのせて、旅、いや流浪の詩を吐き出させることにしよう、よろしかろうがのう」酔いにまかせ雲華は矢継早に三樹に鉾先を向ける。

三樹も受けて立ち、蝦夷の地での見聞の生々しさを語り、折々の詩を披瀝する。

「アラ、紅葉が――」細香が盃に舞い込んだ紅葉を梨影に指さす。
「紅葉酒ですわ――」
女は女の世界にひたり、男は男の世界にひとときを過している。嘉永二年、エゲレスの船が浦賀に姿を見せ、幕府でも海防の議かまびすしい動きがある。が、今、此処嵐山に遊ぶ梨影たちは静かに清々しいひと日を過していた。
「梨影さまは山陽さまのこと、どうお思いになってましたのかしら……」
「それはそれは大事なおひと。わたしだけの山陽さまと――」
「まァ、おあついこと。わたしは山陽さまのこと、冷たいお方とお恨みしていました。……ほんとに。それも梨影さまがおいでだからと梨影さまをもお恨みしてましてよ」
「ああ、怖いこと。わたしも細香さまのこと、ずいぶんお恨みしました、山陽さまを奪われるのではと……」
「二年前でしたかしら、梨影さまは貞節賢婦の鑑(かがみ)になられましたわね」
「……止してくださいな、そんなこと」
梨影は京都東町奉行の伊奈遠江守からお褒(ほ)めにあずかっていたのである。何故、わたしのような者がと小首をかしげたことがあった。妻として夫に仕えた、遺された子を育てる、そんな当然のことが何故褒賞にあずかるのかと。
「もう止しますわ、貞節賢婦さま」
細香と梨影は何の屈託もなく笑い合った。
京での梨影の日々は静謐(せいひつ)であった。相も変らず家事を切り盛りしながらも心なごやかな毎日が続いた。年が明けると三樹が開塾した。山陽の真塾を継承したのであった。父山陽の門人たち、それ

に繋がる面々が折あるごとに往来する。
高野長英が四十七歳の命を絶ったとか、国定忠治が刑場の露と消えたとかの風聞が世上に流れて歳月は足音たてていった。
篠崎小竹も死んだ。梨影も三樹三郎も深い哀しみに沈んだ。山陽存命中よりの支柱であった小竹の死は頼家にとっては痛恨事であった。
三樹三郎二十八歳の新春、足は近江路へと向っていた。安土を通って北町屋へ出る。蓮光寺には理山法師がいる。
三樹の来訪を喜んで理山は筆を馳せながら詠みあげる。
山野荒涼として春を見ず、孤燈空しく老吟の身に対す、蓬門今夕是いずれの夕ぞ、陋巷此の時此の人を迎う、市遠く盤肴すなわち冷淡、興来り詩句自ら清新、君とともと通家の誼あり、怪しむなかれ年を忘れ魚水の親なるを――
詠み終えて理山は三樹の顔をしげしげと見入っていた。こぼれるように微笑みを浮かべた慈顔の理山を三樹も見返した。
「母上は達者でおいでかな」
「年に似合わず、と言ったところでしょうか――」
「結構なことよ。せいぜい孝養をなされることじゃな」
三樹も筆を執り詩を墨色に彩る。二人は夜の闇のなかに睦じげに語りつづけていた。
「よの中をうきものにして過るこそ一杯の味をしらぬなりけり、世の中というものはな、然様、いまの三樹どのの気持、これじゃな、桃源の境であらねばのう――」
「法師とともに在ると心が自然と和んで参ります、心とは斯くのものやと。世の悉くを忘れて……」

「忘れては不可んのじゃ、世とともに在って悟らねばならぬ」
「ハイ――」
「心を静かにな、さすれば世の悉くが察せられような。……近頃、血の気多い連中が蠢いて、どうも不可ん」
「……」
「広島の梅颸どのも亡くなられてしもうたな、あれは天保十四年じゃった、香川景樹大人の亡くなられた年じゃ……梅颸どのも、この儂も景樹大人の門下でな……誠実よりなれる歌は天地の調べ、大人の教えであった。人というもの、心が大切じゃな、君と臣親子妹背の中よくはいつもいつつの道はたかはし。異国では君というものが常に変りおる、国を治める君がな。わが国はありがたい。天っ日継は一筋じゃ」
「ところで、三樹どの、こたびは――」
「彦根の谷太湖どのに――」
「蘭医のな。立派な御仁じゃ、朱子学も究めておいでじゃ」
「中村淡水の顔も見とうて――」
「まァ、ゆるりとなさることじゃ、身も心もな。……昌平坂の件は不可ん、いかに若気とは言うてものう……」理山は笑った。
「もう、それは申されますな」三樹は頭を掻いた。昌平坂学問所の話題となると三樹は俄然身の縮む思いがする。それを理山法師に持ち出されると全く以て全身硬直の感がする。酒に酔うて葵の紋の石燈籠を片っ端から押し倒した一件である。ために昌平坂学問所からは退塾処分を受けたのであった。が、これが契機となって三樹三郎の北の涯への旅が始ったのでもある。

「世の中、自然に逆うては不可んな。三樹どのを大きな人間に仕上げたは旅の御蔭じゃのう。流れのなかには機というものがある、あのまま江戸に居れば学問は出来たやも知れぬが、人間の方はのう……」

「……」

三樹は自分自身を知っている、それは父親譲りだと思っているのだが、一旦斯うだと思うと凝と拱手してはおれぬ性質を。それは血の気が多いせいだとは思っている。抑えきれぬ自分にハッとする折もある。法師の言うように我ながら人間が大きく心が寛になった気もするのである。三樹は理山を父親、慈父のように慕うのである。近江の地は自分にとっては縁ふかい地だと思う。母の里である、兄弟の契りを結んだ中村淡水も居るのである。父山陽は彦根藩に出講もし、小野田舜とも親交を結んでいる。

〈ああ、心が和らぐ思いがする〉三樹は矢張り来て良かったと思う。すがすがしくも心の洗われた感がする。旅には二つある。荒々しい旅路、そして和やかな旅路とがである。それにしても北国の旅の凄じさを改めて思い返す三樹三郎なのである。

彦根では岡本黄石に陪して、蘭花客土の香を恋うと三樹は口遊ぶのであった。

世は大きく揺れていた。浦賀にはペルリが姿を見せる。長崎にはプチャーチンがやってくる。幕府は品川沖に砲台を築きあげる。平穏の日々の外辺は波立っているのであった。

梨影にとって三樹は実に優しい子であった。なによりも、そのことが嬉しい。

「兄上のお帰りが待ち遠しいですな――」

「ほんとに。五年前を思い出しているのですよ、あの折、復蔵と二人して、三樹の戻りを待ちあぐねたもの……それが今は――」

「兄上も斯うして待ってくだされたのですな――」三樹は改めて肉親の情を感じていた。
昌平坂学問所を去り、越後水原陣屋へ出講していた復蔵（支峰）が京へ戻って来、梨影は我が子ふたりを膝下に置いての日々が繰りひろげられた。安政元年は梨影にとっては春、まさしく新春の装いであった。
「節斎どのが妻女を娶られますぞ」
「あの森田どのが――」復蔵が不思議そうな顔をした。
「まことです。齢四十を過ぎても妻の居らぬは男ではないと竹外どのに笑われたとかで――」
「鉄砲奉行藤井竹外どのにして、その言あり、だな」
「敬所どのは妻女をお変えになられましたな、いまの妻では陽物立たずと申して――」
「おまえの親しい面々は、どうも曰く言い難しの御仁が多い――」
「そうでもありませんぞ。先日、節斎どののところで吉田松陰に逢いました、なかなかの人物――」
「なァ、世には大きな流れというものがある、流れを変えるには機がある、焦っては不可んな」
「拱手していては何事も果せませぬぞ。――あれはまさに失敗、幕府の威に負けてしまいました」
「米のことだな」
「諸藩悉くが米を備蓄しだした、あのままでは米が高うなる、これは不可んと京でも米を蓄えるべしと動いたというに……星巌どのも立ち上って下されたになァ……」三樹は無念そうに言う。
「父上も農政については深い関心をお持ちであった、最後まで――」
「わたしも父上の血を受け継いでおります、血は争えぬもの――」三樹は笑った。
「父上はな、腰抜けも大事なことじゃと言っておられる。人に腰抜けと罵られても、それでよい」

「兄上は冷静すぎる、志は実践してこそ道ありですぞ」
梨影は隣の間で二人の話に耳を傾けながら微笑んでいる。わが子それぞれに性格が異なっている。物の考え方も違っている。謂うなれば静と動とである。その二人がひとつになって、それこそ水入らずで語り合っている。梨影は嬉しくて仕方がない。
「それはそうと日本外史の版権、いかが致しますかな」
「川越藩との談合も済んだ。大坂の柳原との間に手を打たねばな」
「この際、一気に銀三匁ということで話しましょう、事は速やかに片付けねば……」
「一部につき銀三匁だな。母上にも楽をして戴かねばならぬ、父上の御遺志だ。よかろう、早速談じよう」
「母上、銀三匁ですぞ」三樹は大きな声で呼びかけた。
「ハイ、ハイ、二人でよいようにしてくだされ」梨影は夫山陽の必死の病を押しての仕事ぶりを思い浮かべていた。
吉田松陰は捕えられた。佐久間象山も捕えられた。時代はめまぐるしく揺れ動いてゆく。三樹三郎の心中は抑え難いものを感じはじめていた。梁川星巌の寓居は俄然あわただしい動きを見せる。将軍継嗣問題も絡んで世の動きは複雑化する。
「君子どののこと、きちんとしておきなさいよ。女というものには拠りどころが大切なのですから――」
「多々思うところがあるのです、この際、家に迎え入れようと考えます」三樹は許しを請うように答えた。
「然うしなさい、いずれ皆さまに御披露するとして……」

三樹は八木玄迪のむすめ君子を家に迎え入れた。
〈これで三樹も落着いて仕事をしてくれよう……〉梨影は一安心であった。
幕府はエゲレスとの間にも約定を締結した。
のどかな毎日であった。梨影は清楚に生きていた。二人の子どもも立派に一人前となった。ああ、これで自分も一人前なのだわと梨影は満ち足りた思いである。
今日も梨影は絵筆を執っていた。
「ああ、いい香り――」梨影は思わず呟く。梨影は二昔まえの日を思い出している。
〈山陽さまがお亡くなりになった折も、斯うして菊の香りが……〉うっとりとして菊の花を見つづけている。
再び筆を手にしようとしたとき、梨影は急に頭から吸い上げられるように感じた。後頭部が矢鱈と重くなって、その癖、尖頭は軽く吸い上げられてゆく。自ら瞼は閉じ、えも言い難い。自分の意志とは関わりなく体が浮遊して、梨影はそのまま其の場に倒れてしまった。
〈梨影ヨ、ドウシタノジャ、シッカリセイ。ドウシタノジャ〉
〈アッ、山陽さま〉
〈気ガツイタカナ。儂ジャ、久シ振リジャナ……〉
〈おなつかしい……〉
〈コノ霊座ヘ来テ随分ト久シイ。現世ヘノ未練ハ無イ、ト言エバ嘘ニナルカノウ……未ダ悟リキレヌノヤモ知レヌナ。儂ノ著作モ漸クニシテ世ニ認メラレオルヨウジャ……現世トハ違ウテ此処霊座ニ居ルトナ、淡々トシテ眺メラレルノジャ、何事モナ。現世デ、アノヨウニ息巻イタコトガ不思議ニモ思エル、天下ノ奇男児タラントセシコトガナ。無風ノ風ガ吹キオルノジャ、霊座ニハナ、人間

ノ営ミノ空シサガヨウワカルノジャ。……世モ大イニ変貌シオルナ……儂ガ考エオッタ如クニ動キオルワ……〉
〈眠ッテハイカン、梨影ヨ。気ヲタシカニ持ツノジャ〉
〈ハ、ハイ〉
〈幕府ノ政治モ終リヲ告グルナ……ソレニ至ルマデノ事ガ心配ジャ……国ガ割レオル、二派ニナ。血ヲ見ルハ必定ジャ、痛マシイナ、人間ノ愚カニシテ空シキ所業ハナ……食イ止メネバノウ……儂トテ霊座ニテ心ヲ痛メオルノジャ、ト言ウテ霊座ニ居テハ手ヲ下スコト叶イハセヌ……空シイノジャ、現世ノ営ミハナ。儂モ為スベキコトセズニ霊座ニ来テシモウタ……アノ折、斯様ニ為シオクベキジャッタト悔ユルコトモアルワ……大塩平八郎ドノノコトモ然リ。何故、儂ハ、アノ折、一言強ウ言ワナンダカト無念ナノジャ、コレモマタ現世ヘノ悔イ、イヤ、未練ジャナ。徒ラニ惜シムベキ御仁ヲ死ナセテシモウタナ……然ウシタモノナノジャ、人ノ世ハナ。空シサヲ空シト観ズル心ガ必要ナノジャ……現世ニテハ、ソレガワカラヌ、哀シイコトヨノウ……イヤ、久シブリニ逢ウテ愚痴メイタコトヲ言ウテシモウタワ……〉
〈父上、母上トモ語ロウテオル。ソレニ陽子モ傍ノ座ニオルワ、蓮ノ香ヲトモドモニ嗅ギオル日々ノ営ミジャ、静カジャナ、此処霊座ハナ……〉
〈梨影も参りますわ、直ぐに――〉
〈ソレハナラヌ。マダ早過ギルデハナイカ、ユルリカニスルガヨイゾ〉
〈……梨影も為すべきこと果しました、もう此の世に未練もありません……〉
〈ト言ウテモナ……〉
〈おそばへ参りたいのです、早う……あなたさまと二人きりで過したいのです、ふたりきりで……

誰にも煩わされず……〉

〈絵を一緒に描きましょう、水仙の花、描いて進ぜます、梨影はお約束果しておりませんもの……〉

〈ウム、然ウデアッタナ。一緒ニ絵ヲ描クカナ……〉

〈そう致しましょう、是非とも……〉

〈実ハナ、儂トテ淋シイノジャ……何ト言ウテモ儂ノ妻ハ梨影ジャカラナ。蓮座ニ一人ユエ淋シスギルワイ……霊界ニ来テモ、儂ハ悟リキレヌ、コノ静謐、コノ寂寞、耐エガタイ折モアル……現世ニテハ倨傲ノ山陽ト評サレモシタガ、儂ハ所詮ハ淋シガリ屋ナノジャナ、コノコトハ梨影ガ一番ヨク知ッテイテクレヨウガ……〉

〈安ラカニ筆ヲ持チテ絵ヲ描コウデハナイカ。……安ラカニ眠ロウデハナイカ……〉

〈いつまでも御一緒に……〉

梨影は、その日、再び目を覚ますことは無かった。

「母上！」

三樹三郎の悲しげな声を耳にしながら梨影は山陽のもとへ馳せ参じたのである。ただ、復蔵が折しも越後水原へ出掛けていて、最期の折に顔を見ることの出来なかった淋しさだけが梨影の心に残っていた。

梨影は美しい顔で死んでいった。ひたむきに夫山陽に仕え、為すべきことを果して霊座の山陽のもとへと旅立ったのである。梨影が娘のころから描きつづけた美しい女、優しい女としての生涯を、いま美しい死顔で終焉のときを迎えたのであった。安政二年九月十七日、静かに梨影は五十九の齢を終えた。ふくよかに満ち足りた微笑みが梨影の生涯を照らしていたのである。

梨影は長楽寺の夫山陽の傍に眠りつづける。死して猶山陽の駱駝であった。瘤は二つあって美し

い。お遍路さんは衝く杖と一つになりきっている。一つになりきるがゆえに荘厳の美しさを醸し出す。山陽と梨影は、いま一つである。一つの霊座に蓮の香華にくゆられて眠っている。

梨影の墓表を梁川星巌は貞節君小石氏墓と記した。

三樹は父山陽の最初の弟子である後藤松陰に碑陰の記を依頼したのである。

君諱梨影小石氏江州人　頼山陽先生入京娶為継室　君性謹倹佐先生成家　安政乙卯九月十七日病歿享年五十九　後先生二十四年矣　葬先生墓側於東山長楽寺　君生三男一女　長辰蔵（夭死）次復（支峰）承家次醇（鴨圭）女先歿　君既寡子皆幼而持操屹然　凡事皆遵奉遺命夙夜勤苦教育二孤終致其成立　事聞于官特褒而旌之　私謚曰貞節　蓋取其褒詞云　二孤謂余蕉門人也請碑文　但先生之碑未有文焉然此不必藉文也　乃畧叙君如此銘曰

余庚同君　悉君平生　終始維一　莫非其貞　君可以瞑　永有世栄　長楽之山　山美泉清　先生名節　得石倍明

安政三年震九月

後藤　機撰
宮原　龍書
孝子　復立

母を失って三樹三郎の悲しみは心の奥底に大きな穴をあけた。いかんとも為し難い空洞で嗚咽のみが木霊する。木霊はやがて慟哭の賦と化す。

〈この悲しみを何処に叩きつければよいのか……〉酒を飲みほしても酔いはまわりはせぬ歯痒さに我と我が身を痛みつけるのであった。

君子は傍でおろおろと身をもてあぐねている。斯うした際、妻として何を為せばよいのか、君子にはわかりはしなかった。父親が篠山の医者であっただけに多少は医の心得もある。いまの場合、

夫三樹への対処の糸口すら摑めはしないのであった。
妻の君子は、ただ黙って身を縮めている。
「わかるか、わしの気持が――」三樹は君子に怒鳴りつける。
「……」
「わかる筈はない、わかってたまるか」
あとは三樹の慟哭のひとときであった。
三樹は外出すれば必ず母への土産を携えて帰って来た。もうそれも出来ぬ、あの折この折の母の笑顔、母の舌鼓を見ること叶いはせぬと思うと無性に哀しくなる。ああ、三樹の全身は空虚の塊となってしまう。蟬の脱け殻、あるかなきかの我が身であった。
〈どうせよと言うのか――このままでは、このままでは破滅じゃ〉
「そのようにお飲みになっては――」と言いかけて君子は口をつぐんでしまった。
〈客人と盃を交わしているとき、母上は隣の間でいつもひとりで飲んでおられたな……それももう……。ああ、心の支柱を失うてしもうた。母上、この三樹は哀しうて恨みますぞ――〉
〈……紅蘭どのが母上の死を悼んで詩を届けてくだされましたぞ。お聞きくだされ、西風蕭殺秋風に向かう、片夢俄かに驚く化一巡、覚えず惻然哀越の節、君が為に慟せずして何人の為にかせん、死に事うる亦猶生に事うるが如し、卅年の霜苦坤貞を守る、幽魂相慰む知る何れの処ぞ……〉三樹は声に詰まった。
〈……幸いに鳳雛あって声転た清し、恍惚相逢うて笑顔を聞く、千林の紅葉旧青山、賞心此れより誰と共にせん、朗月清風亦等閑なり――母上！〉
三樹三郎の歩む道は変りはしない。が、三樹三郎の心術には炬火が燃えたぎった。この悲しみを

叩きつけるには烈火の塊となって炎と燃えなければならぬ。むなしさの城に身を埋めつくしてはおれぬ。凝としてはおれぬのである。己が頭を何ものかに叩きつけ、滴る血誠を口舌に嘗めねばならぬ。

母梨影の死を機として三樹三郎は確かに変貌していた。それほどまでに母を恋い、母を慕う三樹三郎なのであった。

翌十月に入ると江戸では大地震が天地を揺れ動かした。藤田東湖が地震で命を落した。

〈天も怒る、地を憤る、この三樹三郎も眦をあぐる――〉

三樹三郎の怒りは外のみならず内に対しても向けられている。一月前、聿庵（余一）の死に間に合わなかった己れに対して無性に腹が立つ。このときも目に見えぬ糸に操られた己れに泣いたのであった。山陽は春水の死に間に合わず、そのことを生涯悔いた。三樹三郎は山陽の臨終の座を離れ、いままた聿庵の死にも逢えずじまいである。どす黒い血の流れ、さだめと思う。それ故にこそ憤懣やるかたないのであった。それに加えての母の死である。悲しみは極に達した。悲しみは憤りへと層を変えてゆくのである。

〈国が二派に分かれおる、なんたることだ。朝廷の威を強めねばならんというに――〉

三樹三郎の足は星厳宅へ繁くなる。

〈神州不滅、異国に蹂躙されてなるものか――〉幕府の安易な姿勢に対して三樹は敵愾心を燃やすのであった。

「淋しそうな顔をして……」紅蘭が三樹に呼びかけた。

仲間は皆引き上げて帰っていった。先刻までの口角泡をとばして慷慨の時間が、まるで嘘のようでもある。最近は常連ばかりではなく諸国から志を同じうする者がやってくる。此処鴨沂小隠は所

謂志士の溜り場であった。
「梨影さまが亡くなってから、妙に淋しそう……」
「我ながら腑甲斐ないとは思うのです、男児たるものが……とは言え、淋しいものは淋しい、いかんとも為し難いのです、時として無性にたまらなくなってしもうて――」
「泣きたくば泣けばいいのに――天地も裂けんばかりに……それが男児たるものですよ」
「いまは、わが一身のことでは泣いてはおれませぬ、世の中の事を泣かねばならぬのです、然うでしょうが――」
紅蘭は一瞬口をつぐんでしまった。が、次の刹那には微笑みながら三樹の視線に合わせていた。
「意地っ張り屋さん、さすが山陽さまの血をうけておいでで……」
「揶揄しないでください、揶揄なさりたくば時の世を――」
「慨然として涙あり、君笑うを止めよ、英吉夷の酋も亦婦人なり――」
「然う、然うです、その意気でなくてはならんのです」
「野山獄で松陰どのは申された、僕幽囚の身にて死なば吾必ず一人の意志を継ぐの士をば後世に残し置くなりと。いまの期に於いて志を果さねば……後世とは言っておれぬのです」
「松陰どのは信じ過ぎるのです、人を。あの御方の長所であり、それがまた……わたしはそれが心配で……」
「然りです、下田より渡海を企てた、思うてみれば異国人を信じて為せる技です、失敗に終ったも当然と言えるのです」
「象山どのは阿蘭陀の軍艦を買うべしと建議されましたね、阿蘭陀は異国――」
「ホホウ、お二人で何を語ろうてかな――」星厳が顔を出した。

「三樹どの、わが妻紅蘭どのは近年めっきり目覚めてくれましてな……」
「これもすべて星厳さまの御蔭、わたしの御主人さまの――」
「わしは妻の尻に敷かれておりますのじゃ、ああ言えば斯う言う、斯う言えば……とかく理屈が多うて……道学先生と一緒に居るとな。笑うてくだされい」
「詩を詠めと星厳どのに言われていますの……わたし、あまり詩の方は……そのかわりに政事に目覚めておりますのよ、ホホホ……」
「ともかく此処京の都は、わが国の政の中心なのじゃ、国の舵をとらねばならぬ、幕府に鉄槌を下さねばのう」星厳は、したり顔で言う。
「反逆児こそ天下国家を護るの士です。天祖以来列聖相い承け一系千歳、今日、実に皇国の大安危、大機会の時にあらずやです。やらねばなりません、立ち上がらねば――」三樹は俄然意気込む。
「反逆の四天王さまですもの、いまに天下を変えられますわ」紅蘭も気勢をあげた。
「この星厳、三樹どの、雲浜どの、して陶所どのか……まさしく四天王じゃ、よかろう、結構じゃわい」
「フ、フフ……」紅蘭が含み笑いをした。
「なんじゃ、何が可笑しい」
「……悪謀の四天王さまなのかも……」
「悪謀と言われてもよしです。謀を悪む、幕府の愚かしい謀を悪む四天王です」三樹は笑う。
「福井藩の橋本左内どのが、京の動きを難じているとやら聞きますが――」
「明道館幹事の職にある立派な御仁じゃがな。山陽どの考えに頭を下げおる御仁じゃ。熊沢蕃山、新井白石に対してもな。わが国には経済に通じおる者が居らぬと言うことじゃわ。それはそうとし

てな、同じ尊攘反幕と言うても人さまざま、考えが異なる、これまたよしとせい」
「国も二つに割れる、道を同じうする者も二つに岐れるとは……」三樹は憤懣やるかたないのである。
国を憂え、今日も三樹は心中吐き出した思いで星巌と別れ家路へと着く。斯うした日は家へ戻っても三樹の機嫌はいい。
霜月に入ると梅田雲浜が三樹のところへやって来た。
「萩へ出掛けようと思うてな、凝としてはおられぬ」雲浜は更に九州へも、また四国へも尊攘反幕を説きに赴くつもりである。
「暫らく逢えませんな」
「不在中、万事頼みますぞ」
「妻女どのは御達者ですか――」
「事ならぬ住居なれども住まれけり、我を慰むる君あらばこそ――しんの詠んだ歌ですがな、なかなか良う尽してくれる……」
しんは貧窮な暮しに耐えて雲浜の支えとなっていた。しんの父親上原立斎は山崎闇斎の流れを汲む高名の儒者である。その立斎が雲浜に惚れて娘しんを嫁がせたのであった。
「飄然去りて上る千里の舟、是魯連東海の遊ならず」声を出しながら三樹は筆をふるっていた。飄然去上千里舟　是魯連不東海遊。秦を帝とすることに反対した魯仲連の高節を雲浜の心に見るのであった。
「鉄剣声あり鮫鰐伏す、篷窓雪に坐し長州に下る」三樹は一気に書きあげた。鉄剣有声伏鮫鰐、篷窓坐雪下長州。雲浜の言葉には何者をもひれ伏させるものがあると三樹は信じている。兵庫の港か

ら旅立つ舟窓には雪が舞うている。

〈朝廷に於いても攘夷の考えは日増しに強うなっている。この機を逃してはならぬ、幕政に威圧を加えねば……〉三樹は遠く旅立つ同志雲浜の心姿を思いやるのであった。

三樹三郎は滾る血潮を覚える。父山陽は心血を吐いた。いま、三樹三郎は己が血潮を激動の世に飛沫かせようとしている。己が命を己が道に殉じさせようとしている。草間の野夫と雖も憂国愛君の真心を、いま具現せんと固く決意するのであった。黎明は近い。朝権は磐石の重みで君臨する、その日は間近かである。男児の本懐ここに在りであった。

広瀬淡窓が死んだとの報せが届いた。三樹は、その昔、父山陽が九州を旅し日田の地に淡窓をたずねたことを聞いていた。高槻の竹外からは、遺文世に布き久しうして弥々光れり、との淡窓の山陽評が伝えられた。折にふれて三樹三郎は父山陽の存在を重う感じもするのである。父の記憶は僅か数年しか残っていない。それだけに眼窩の奥底に深く刻みこまれている。今にして思えば父の所作悉くが懐しく恋しく蘇ってくる、ありがたい、ああ父上と涙がでてくるのであった。

追懐はひとときの感傷である。感傷は霧の流れである。靄の彼方へと旅立たねばならぬ、低徊は弱志の隠れ蓑である。蓑はかなぐり棄てねばならぬ、一切を放下するとき赤裸の己れが生誕する。三樹三郎は此のことを熟知している。熟知していての追懐であった。このとき、追懐は崇高にして凛冽の生意を喚起する。父山陽は偉大であった。三樹三郎の道途に炬火を揚げ屹然として睥睨する。

〈父上、わたし三樹めは一つの道を邁往いたします。確かに父上の御薫陶うけしのときは僅かであり、頑是無い幼少の日々、御叱咤賜りました記憶のみ鮮かに残りおります。御臨終のみぎり、いかに八歳とは申せ遊渉に身を任せ、御拝顔せざりしこと、いまもって慙愧いたしおります。長じて江

戸遊学、すべて父上の御遺徳の賜物、羽倉簡堂どの、尾藤水竹どのの御厚情に浴し得ました。星厳どのには随分と厳しう御叱咤いただきました。昌平坂……いや、申し上げますまい、父上なれば三樹の心情、おわかりいただけましょう。蝦夷地への旅にても父上知己の方々に幾多心和めていただけました。……頼山陽を父とする僥倖、身にしみております。御遺著拝するに及び、いや増してその感深めおります。父上御存命ならば、いかに此の三樹力強いことでありましょうや。いまや我が国、危急の秋、国情不穏、すべては幕府失政の罪。悲咽の声、津津浦浦響きおります。皇統一系、夷狄攘たねばなりませぬ。三樹、一介の身とは申せ国事に奔走、これ男児たるの道と心得おります。

道は一つ。父上の名汚すことなく、必ずや光輝あらしめる所存、しかと御照覧ください。犬死は致しませぬ、三樹は、生きて生き抜いて参ります。いまや夜明けが迫っております……〉

〈母上、もはや泣いてばかりはおれませぬ。三樹も国事に馳せ参ずるの身に成長いたしました。……三樹も早や三十二の齢を重ね、漸くにして己れの道を摑み得ました。道は荊棘、なれど踏みしだかねばならぬのです。星厳どの、紅蘭どのと国政を論じ、折にふれては詩を詠みおります。……然様、細香どのは血を吐かれました、齢七十の身ゆえ案じておりますが、只憐病状似先師と詠んでおいでです。父上も血を吐かれ、細香どのも……奇しき縁ですな……。母上にお許しを得ておきたいことがあるのです、君子のことです。この三樹の身、こののち如何様の事態となるや測り知ること叶いませぬ、累を及ぼすは男児の恥。君子に去り状を書かねばと秘かに心中考えておるのです。その折参りますれば何とぞ御許しのほどを……三樹の最後の我儘であります。

いまほど幸せを覚えおるときはありませぬ。よき母者の胸乳に育てられ、多くの知己の士に包まれ、この恩恵、報いずにおれましょうや。兄上には兄上なりの生き方がおありです、三樹には三樹

なりの生き方があります。世人なんと評そうとて我が道をゆかねばなりませぬ。母上は申されました な、美しう、正しう生きよと。三樹は正義の刃をかざすのです……母上、微笑んでくだされ、三樹よ、よう一人前になったと……〉

三樹三郎は黎明を夢みている。いや、固く信じている。信とは未来への約束である。行手を阻むものには壌臂せねばならぬ。この乾坤、ゆるがさねばならぬ。君が代を思う赤き心もて宸極脅かす輩を斃さねばならぬ。暗雲の黒き翳りの涯に光風霽月を見る。

いま、三樹三郎を包むものは渾身の憂国の真情である。赤き心の炎である。炎は燃えねばならぬ。汚濁の世塵は悉く焼残、清秋のときを招かねばならぬ。

〈憂国の志士、此処にあり〉三樹三郎は遥るけく遠き雲の涯を見あげていた。

とき、安政三年歳暮、荊棘のうちに時代の足音が轟きだしていた。

あとがき

いつか梨影のこと書いてみたとい思いながらも歳月は流れました。

「西洋紀聞」の新井白石の真摯な姿に感動したことがあるのですが、「日本外史」、山陽遺稿を目にするにつけ、凄まじい限りの山陽の生涯の心姿に頭をさげるのです。山陽をして山陽たらしめたもの、それが梨影夫人なのです。勿論、細香女史の存在がありましたが、現人風のライバルというのではなく、それを超越したおおらかな境地に身を置き得たと言えます。時代は異なるにせよ、ひとりの男、ひとりの女のひたむきな生き方は、ともすれば安逸惰眠を貪りがちな私たちになにものかを感じさせてくれましょう。美しいいのちの燃焼が山陽・梨影夫妻であったと思うのです。

生きてある限り、美しく生き、美しく死なねばなりません。夫妻の心姿は私たちにレーベンの一つの道標を与えてくれます。生きるとは何であるのか、今更ながらに考えこんでしまいます。このとき怠惰な私自身に迫るものが山陽の凄まじさなのです。峻厳であってこそ多彩なる人生と呼び得るのです。己れの心の鞭として山陽の心姿をとらえたいのです。

山陽遺稿、私なりの拙訳であります。各章ひとりだちのため時期的前後があります、御寛容のほどを。とまれ、失われゆく言葉の重み、一字々々の深い重みを大切にしなければと思うのです。

わが家の十四歳の柴犬の大手術をして貰いました。術後翌日は腰抜け同然で坐れもできなかったのですけれど、翌々朝には一目散に散歩に駆け出しました。まことに、ひたむきないのちでありま

した。偽りなきレーベンは美しく尊くもあります。

巻尾ながら、帯文玉章を賜わりました吉田時雄氏に心から感謝いたします。刊行に際し御配慮くだされた百瀬精一氏に謝意を表します。

昭和六十一年　北摂緑蔭

著　者

参考資料

山陽遺稿（書林三玉堂藏）。「近江蒲生郡志」。「近江神崎郡志稿」。「日本外史」。「西大路風土記」。「頼山陽とその時代」（中村真一郎）。「史伝頼山陽」「明治維新の暁鐘」「頼三樹三郎」（安藤英男）。日本の名著「頼山陽」（中央公論社）。「菅茶山と頼山陽」（富士川英郎）。「歴史への帰還者」（野口武彦）。